
CREATURE

三月やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CREATURE

【Nコード】

N1446B

【作者名】

三月やよい

【あらすじ】

ごく普通の女子大生・美樹は吸血鬼とセイレーンの戦いに巻き込まれ殺されてしまう。彼女をキメラとして生き返らせた吸血鬼・京介は魔物専門のオークション業者から彼女を守りきれのか？

プロローグ：美樹（前書き）

吸血鬼・京介が主人公です。

E g o i s t i c R e a l i t y と M e m o r y o f t h e
T r e e に ち ょ こ つ と 出 て い る

吸血鬼の岡見京介くんです。

半年くらい前に「どこかに投稿しようかなあ」と思って書いて途中になっていたものを書き足したのが今回の作品です。
長くなりそうですがお付き合いいただけると幸いです。

プロローグ…美樹

竹来 美樹 19歳。

都内市部にある私立大学の経済学部在籍する2年生。

家族構成はエンジニアの父と専業主婦の母、そして

2歳上の姉の4人家族。

恋人はいないが、誘われれば合コンにも顔を出し時々男の子と食事にも行く。

学校には実家から30分かけて電車通っている。

髪はセミロング。少しネコっ毛なので

スタイリングに苦労するのが悩み。

容姿はよく「○○に似ているね」といわれる。

○○は新人女優からアイドルタレントまで様々だが要するに特徴のない顔ってことだろうと本人は思っている。

服のサイズは特殊なメーカーのモノを除いて

大抵は7号サイズでちょうど良い。

しかしこの前試着したワンピースの腰のあたりがきつかったので少しダイエットしようかなと考え中。

甘いものが好きだが夕方以降は甘いものを控えて体型維持には気を使っている。

趣味は料理でお酒はほとんど飲めない。

そんな日本中を探せばいくらでも見つかりそうなどどこにでもいる19歳の女の子……だった。

春、天気予報で花粉の量を知らせることもなくなってきた時期になると

毎日の洋服選びで困る。

今日も美樹は朝シャワーの後、自分の部屋のクローゼット前で頭を悩ませていた。

朝夕は涼しいが昼間の日差しは夏並みになるのを考慮しなくてはならない。

（ワンパターンになっていやだなあ）

と大きな姿見の前で今日の服をチェックする。

シンプルなシャツワンピースにカーデガン。

温度調節も出来るし女の子らしくて好きな組み合わせだが、

昨日もワンピースにカーデガンだったし・・・と悩む。

昨日は淡い水色のタンクワンピース、今日は茶色のシャツワンピースと

傍から見たら全く違う服だとは解っていても気にしてしまうのが女心だ。

家を出なくてならない時間まであと40分。

髪をブローしてメイクして・・・あ・・・ネイル少しはげているなあ

少し足しておこうかなあと右手の爪先を見る。

淡い珊瑚色のマニキュアが丁寧に塗られている中で中指の爪先だけが地の爪色が見える。

（この爪じゃパンは捏ねられないなあ）

とちよつと苦笑する。

一応料理が趣味なのでピザを作るときはもちろんピザソースからピザ生地まで手作りする。

作るぞつと気合が入った時は伸ばした爪を切ってパン作りに臨む。

しかし最近はそんなこともかなり少なくなってきたが・・・

そんなことを思いながら日焼け止めを肌には塗り込む。

お化粧はいたってシンプルで気をつけるのは日焼け止めくらいだ。

左右を向いて髪と肌、そして眉をチェックする。

よし、そろそろ出なくては。

「真樹ちゃん、トート今日使うねー」

と部屋のドアをあけて自室にいる姉に声をかける。

姉の真樹と二人でお金を出し合って買った有名なメーカーのキャンバス布のトート。

なんでこんなのが何万もするのかな？

と思いながらもやっぱり可愛いから欲しくなってしまう。

お財布とお化粧品ポーチと携帯、それとペンケースにノートと教科書。大学生も学生さんなんだからやっぱり勉強道具も大事と思いながら教科書をバックに入れる。

同級生の中には教科書も持たずに授業を受けて出席だけとって出たってしまう人もいる。

もちろんそれでも単位を取得できる授業もあるのだが、根が真面目なのか小心者なのか、いまだに高校生の頃のように丁寧にノートを取ってしまう。

そんな美樹のノートはテスト前になるとコピーされて同級生の間にまわっているらしい。去年のノートは1年後輩たちの間にも廻っているというからちよつと恥ずかしい。

部屋から出て階段を降り、玄関まで来た所で香水をつけるのを忘れて慌てて部屋にもどる。

様々な形の綺麗なボトルがきちんと並べられた棚から小さな香水ビンを取り

(これでよしっ)

とスカートの裾にすこしだけ香水をかけてもう一度階段を降りる。

「行ってきまーす」

初夏の日差しが街路樹に降り注ぎ葉はそれに応えるようにその緑を濃くしていく。

綺麗な季節。

綺麗な風景。

家から駅まで歩いて10分。

変わり映えないいつもの道でも天気がよいと気持ちがいい。

でも一昨日おろしたばかりのミュールにまだ足がなじめず右足の甲が少し痛い。

これはお昼頃にはバンソウコウ貼らなくてはならないかもしれない。
・・・そんないつもの朝。いつもの自分。

1. 京介（前書き）

やっと主人公登場です。

1. 京介

「しまった、ペン切れた」

岡見 京介は白衣の胸ポケットにもう書けなくなった黒いボールペンを入れ

自分の実験台の上に目をやった。

開かれたノート横にあるペンケースの中を探してもシャープペンが一本とかなり小さくなった消しゴム、そして長年使っていて目盛りが薄くなってしまった定規しか見つからない。

（色素試薬作ったら買いに行くか・・・）

と時計に目をやりながら思う。

学生生協は5時まで、今から色素試薬を作ってメスシリンダーを洗って

10分だとして、20分あれば十分にボールペン一本くらい買いにいけるだろう。

タンパク質の溶液濃度を測定するのに使う色素試薬を50mlつくりメスシリンダーに洗浄用エタノールを少したらす。

試薬に含まれるタンパク質と結合する色素は手に着くとなかなか落ちないので着かないように注意深くメスシリンダーの壁面にメタノールを這わせる。

廃液入れのポリバケツに青く染まったエタノールを捨て洗剤で洗水道水ですすいだ後、蒸留水で4回すすぐ。

メスシリンダーを乾燥棚に置いたときでちょうど4時40分になっていた。

「ちょっと生協行ってきます」

と隣りの実験台を使っている博士課程の先輩・塩原清人に声をかける。

今年25歳になる塩原は身長が165と小さく顔も童顔なので毎年、新入生と間違われてサークル勧誘を受けるらしい。

学部生だった頃は嫌でしょうがなかったらしいが、
修士・博士となるにつれ話のネタと割り切り毎年

「間違われちゃったよ」と嬉しそうに話していた。

「ほーい。・・あ、牛乳買ってきて」

と塩原はカバンから財布を出して200円を京介に渡した。

この先輩はいつも牛乳か豆乳を飲んでいる。

子供の頃から牛乳を毎日飲んでいたのに165センチってことは
どうやら牛乳を飲むと背が伸びるとは一概には言えないようだ。

「はい。他には何かありますか？」

200円を受け取り聞くと

「・・・じゃ、可愛い女の子かな」

真顔で冗談を言う。

塩原の場合冗談ではないかもしれないが・・・

塩原は忙しい博士課程にいながらどう時間を作っているのか、
途切れず常に彼女がいる。

しかもかなりの面食いらしく大抵「小柄・色白・可愛い」の3つを
兼ね備えているレベル高い彼女を捕まえてくる。

本人は悪くはないが決して「イケメン」というかんじではないが
マメなのと熱心に口説くのが成功の秘訣らしい。

でもそんな可愛い彼女がいても「岡見く合コンしようよ」と声か
けてくる。

単なる女好きなんだろうか・・。

一昔前と比べると増えたのだろうか、理学部・工学部はどうしても
男子学生が多くなってしまふ。

しかし京介が在籍している理工学部生物工学科は多少とも「生物」と
銘打っているので3割が女子学生だ。

そのため、大学の理工学部棟も男の園ってほどむさくるしくはない。
いくらむさくるしくなくても実験用の白衣を脱いで校舎から出て
新緑まぶしいキャンパス内の桜並木を歩くとかなりの開放感を味わ
える。

学食の横を通り生協を目指す。

授業を終え駅に向かう人の流れと逆行してあるくとふと妙な気配を感じた。

「妙」としか言えない気配。

首筋がちりちりするような感覚。

「嘘だろ・・・ここ学校だよ・・・」

口の中で誰にも聞こえないくらい小さな声で不満をもらした。

この気配を最後に感じたのは多分5年前に深夜の繁華街で・・・。

（あの時よりも・・・強いかな？・・・）

いや、近くにいてこの程度なら・・・）

気配を読みながら京介は生協に向かう足をとめ、人通りの少ない講堂の横に足を向けた。

鯉がいる池を横切る頃にはさっきの気配は一段と強くなっている。

（そうそう、こっちにきてくれよ・・・）

人を巻き込むと面倒な事になる。

この時間で人通りがないところは・・・

「講堂の駐車場かな」

2. リクルート（前書き）

綺麗なお姉さんは好きですか？

2. リクルート

気配、はおそらく一人だろう。
そしてきつと吸血鬼ではない。

気配は感じるが同族の感触はない。

「魔族の類か妖怪か・・・魔獣みたいなのはいやなんだよなあ」
以前繁華街で襲って来たのは魔犬だった。

牙は鋭いし唾液は強酸だし獣くさいし、何より結構動物が好きな
京介にとって犬型の生物を殺さなくちゃいけないのは嫌だった。

しかし遠慮すればこっちが殺されるし人間の犠牲者も出るだろう。
仕方が無いが処分させてもらった。

日本のこんな街中に魔犬が自生するはずがない。

誰かが故意に連れてきたのだろう。

大惨事を起こすのが目的かただの好事家のペットか・・・
そこまでは解からないはまだ。

さっきからの気配はずっと京介の後をつけてくる。

学校に人間を狩りに来たわけではなさそうだ。

わざわざ京介の後をご丁寧につけていることからわかる。

(ここらでいいかな)

辺りを見回しても誰もいない。

講堂の駐車場は行事があるときに学校のVIPが車で乗り入れる時
にしか

使われないので滅多に人は通らないのだ。

講堂の裏をさらに降りていくとクラブハウスがあって授業終わりには
結構にぎわうがこの道をわざわざ通る人はいないだろう。

「何か用っすか？」

くるりと振り返り大きな声で呼びかける。

「あら、わざわざ人気のないところまで案内してくださなくても、
何も取って喰いはしませんのに」

思いがけず若い・・・女性が姿をあらわした。
若いといっても外見は京介より少し上だろう。

北欧系の顔立ち、長い銀髪で細身のスーツを着こなすその姿は
映画に出てくる美人社長秘書のようだ。

「あれ？わざと気配を漂わせて俺を呼んだんじゃないの？」

ふふふ・・・と涼やかな笑いをして

「解かっていただけでよかったですわ。」

と魅惑的な笑みを浮かべた。

魔女の類か・・・毒のある美しさだ。

もちろん人間ではない。

「で、俺に何のようなの？」

こんな綺麗な女の人が尋ねて来る心当たりはない。

「いきなり用件に入るご無礼をお許しくださいな。」

わたくし、ある方からのお使いで来ましたの。

半年前・・・その方の魔犬が逃げ出してしまいました・・・

私どもはとても困ってましたの。

もちろん警察になんて言えませんしね。

でも事件になる前にその魔犬を始末して下さった方がいた・・・

それがあなた様ですよね？

岡見 京介さん

「ふーん・・・そのお礼をわざわざ言いに来てくれたの？」

名前は調べ済みかぁ・・・。

こりゃただのお礼とは済まないだろう。

「それもありますけれど・・・」

美しい銀髪をかきあげて真っ直ぐ京介を見る。

身長175センチある京介と目線がほとんど変わらない。

ヒールを履いているとしても女性としてはかなり長身だろう。

「なかなか岡見様までたどりつけなくて苦労しましたわ。」

わたくしの雇い主があなた様に大変興味を持ってまして・・・

率直に言わせていただきますとボディガードとして

リクルートしに来ましたの」

魔女（？）を秘書（？）として魔犬をペットとし、そして吸血鬼をボディガードとしてリクルートするヤツがいるとは・・・
酔狂な政治家かはたまた大抵の娯楽には飽きた大富豪か。

どんなヤツか気にはなるがそんな好事家に関わる趣味はない。

「うーん、K-1選手とかに頼んだほうがよいんじゃないのかな？」

俺はただの大学生だし」

「吸血鬼も・・・ただの大学生かしら？」

そこまで調べているのか・・・。

艶然とした笑みを浮かべ女は更に続ける。

「もちろん報酬は破格ですわよ。日本円・ドル・ユーロ・・・

それにお望みでしたらお食事だって・・・

調べによるとあまりお食事は

なさらないみたいですけれど」

食事・・・これはきっと血を供給してくれる人間を指すのだろう。

京介は極力、吸血行為はしない。

吸血鬼は血液がないと生きていけないわけではない。

通常の食事で体を構成する細胞を保つ事が出来る。

血が必要なのは特別なとき・・・過度な肉体の損傷や超人的な

筋力・能力を使った時くらいだ。

京介のように普通に大学生活を送っている分には

吸血が必要になることはそうそうない。

（例えばホント最近血吸ってないなあ）

と余計なことを考える。

「食事には困ってないよ。

それにお金にあんまり興味ないんだよねえ。

悪いけれどその・・・雇い主さんに伝えておいてくれる？」

「・・・そうですか。でも手ぶらで帰っては私が困りますの」
歌うように不思議な抑揚をつけて答える。

耳に不思議な感触を残すしゃべり方・・・声・・・

頭の奥に共鳴するような・・・これはただの外国訛りではない・これは・・・

「そっか、セイレーン・・・かな？」

歌声で船人を惑わす美しい魔物セイレーン。

その力は言霊といって、言葉に魔力を込めることが出来る。

声を聞き言葉に耳を貸すことにより術にかかっているのだ。

実物を見るのは初めてだがこの女はおそらくセイレーン族だろう。

京介は吸血鬼という魔物の部類なのでセイレーンの魔術には

ある程度の耐性はある。しかも、もともと言霊は相手の魔力が上の場合のみ

かかる呪術なのだ。

しかしこの女に普通の人間が何か頼まれごとをしたら、

それがたとえ火の中に飛び込んで、といった生死に関わる事でも何の疑問も

持たずに実行してしまうだろう。

「ご名答。それ故にわたくし、交渉係ですの」

・・・もともと強い魔族にはあまり効かないんですけれどね。

と例の魅惑的な笑みを見せる。

「セイレーン族の誇りにかけて岡見様を口説かなくては、ですね。

もともと、無理ならば殺さない程度で運んで来い、との事なので
ずっと女が右手をあげ綺麗な爪ですつと京介の腕をなぞる。

「でも・・・男の方に手をあげるのはさすがに気が引けますわ」

セイレーンの言霊が効かなかったら色仕掛けかな・・・？

それならちよつとは歓迎・・・いやいや、

俺はお姉さま系も嫌いじゃないし

・・・じゃなかった、雇われる気はない。

「悪いけれど・・・諦めてもらえるかな？」

肩をすくめてセイレーン族の女を見る。

「仕方ありませんわね」

にっとうと紅い唇の口角があがり次の瞬間腕をなぞっていた爪が京介の

首筋を掠めた。

寸ででかわしたので「掠めた」ですんだが動かなかったらざっくりと首の肉をえぐられていただろう。

セイレーン族の戦闘能力がどれほどかはわからないが、魔力を込めた爪なら用意に肉を裂きとることができる。

「ホント、死なない程度で持ってくつもりみたいだね」女と2メートルほど間合いを取り相手の出方を待つ。

「手ぶらでは帰れませんもの」

ペロっと薄いオレンジ色の爪を舐めて答える。

「大人しく付いてきては下さらないのですか？」

「さっき言った通りだよ」

「・・・仕方ありませんね」

しゅっと風を切る音とともに高いヒールを感じさせない動きで足払いをかける。

ジャンプしてそれをかわした・・・と思ったと同時に腹部に鈍い痛みが走った。

「ぐう・・・」

咳き込みながら膝を崩す。足払いした体勢から即座に膝蹴りに映るスピード・・・

「付いて来て・・・下さいます？」

（油断していた・・・この女は本気で半殺しにするつもりだ・・・）

恐ろしい程の生命力を持っている吸血鬼が膝をつくほどのダメージは人間なら確実に死んでいるダメージに相当するだろう。

息を整えて戦法を考える。

（女は殺したくないんだけれど）

殺されるのはもっとごめんだ。

本能の奥底から冷たい殺意を呼び起こし

獲物となるセイレーンの女を値踏みし始めた・・・。

2. リクルート（後書き）

感想いただけると嬉しいです

3. 偶然の道（前書き）

暗い夜道と通り慣れない人通りの少ない道には
気を付けましょう

3. 偶然の道

「京子のほかぁ・・・いいもーん。帰るもーん。」

カツカツカツ・・・とミュールのヒール音を響かせながら美樹は憤然とクラブハウス棟を歩く。

授業後、「慎也くんの練習に差し入れ持っていくの付き合って」とクラスメイトの宮田京子に拝まれた。

「え？ いいよお」

弓道部に所属している弥生の彼氏は明後日の大会に向けて猛特訓中らしい。

「疲れたときはシュークリームが食べたくなるんだってえ」

と手には一日500個限定シュークリームの超有名店の箱を持っていた。

「もしかして3、4限と買いに行ってたのお？

えー。私に代返頼んでおいてえ」

「まあまあ。美樹の分もあるから、ねっ」

「・・・もお・・・」

もおとは言っているが顔は笑った。

大事な大事な彼氏のためだもん。

授業をちよつとサボるくらいいいよね？

いいなあ・・・私も彼氏欲しい・・・かな、なんて考えた。

しかし、いざ差し入れに行ったらもう後は二人の世界で会話には入れないし

何で一緒に来たのかなあと後悔し始めた頃に

「んじゃ、美樹。私、慎也君と帰るから先かえっててえ」

と厄介払いされてしまった。

そんなわけで一人、憤然としながら帰路についているわけだ。

（もー、早くかえろつと。

ちよつと人通り少なくて怖いけれどまだ明るいし講堂の近道通ろ

うかなあ)

普段は決して通ることの無い道をほんの気まぐれで選んだ。
ほんの気まぐれで……。

吸血鬼はcreatureの中でも戦闘能力に秀でている方ではない。

純粋な戦闘といった意味では人狼族や今や希少種となった
ガーゴイル族のほうが優れている。

しかしその分、魔力は強大で呪術的な戦いではトップクラスだ。
呪術的な能力の一番手は悪魔族で、次が吸血鬼族や夢魔族などが続
く。

あまり予備知識はいいが、おそらくセイレーン族も
呪術的な力で言えば吸血鬼族と同等だろう。

(腕力は……?)

強力な爪、長い足から生み出される蹴り……
スピードもかなりのものだし動きに隙がない。

力は京介と同等もしくは若干下かもしれないが、戦い慣れている感
がある。

肉弾戦を好まない上に見目麗しい女性を直接傷付けるのは
どこか気が引けてしまう京介は女の回し蹴りをかわしつつ作戦を練
っていた。

(言霊が効かなかったってことは魔力では俺が上かな)

間合いを確かめつつ値踏みする。

「じゃあ、せっかく美人さんだし

醜い死体を晒さなくて済むように殺してあげるよ」

「ふふ、余裕ですわね。

それよりも素直にオフアーに従う方がよろしいんじゃない?」

涼やかな声色からは疲れ一つ感じさせない。

「岡見様の戦闘能力は私どもが思った以上だと解って嬉しいですわ。
それならこちらもありクルートし甲斐ありますもの」

すう・・・と息を吸い、女は今まで聞いたコトのない言語で歌を紡ぎ出し始めた。

その歌声は戦いの場に不似合いな程、軽やかで清涼感に溢れている・・・

しかしその声が耳に馴染んで来るにつれ、京介は何とも言えない不快感と嘔吐感に襲われてきた・・・

おそらく今までとは違い「本気」で言霊を使い始めたのだろう。

（今までは小手調べってワケね・・・この女・・・カタつける気か・・・）

さつきとは桁違いな程、濃密な魔力を感じる。

旋律は人間がつむぐ音楽とは確実に違う「音階」を持っているのがわかった。

それならば・・・京介も女の周りの「空気」に意識を集中させる。すると視界の端に動くモノがあった。

茶色い・・・服？人がいる！！

こここの学生だろうか・・・

一瞬女の仲間かと思ったが全く魔力を感じない。

（やば・・・結界張ってなかったから人が入ってきたか・・・）

女にこの招かざる訪問者を盾にでも取られたらやつかいだ。

誰だかは知らないが関係ない「人間」を巻き込むのは心が痛む。

場所をそれとなく変えなくては・・・

わずかな時間内で考え女に視線を移すと同時だろうか

きやつ短い悲鳴が横から聞こえ、目を向けるとどこから現れたのか

白い虎の成獣が訪問者である見知らぬ少女の腕に噛みついている

惨状が繰り広げられていた。

「何故・・・リンカーンっ」

さっきまでの余裕の笑みとか一変、女が驚愕の表情で虎と少女を見比べている。

腕をかまれ虎に振り回される華奢な身体が宙を舞い、

どさっと女の子が倒れる姿がまるでスローモーションのように

京介の目に映った。

少女は完全に腕を噛み取られ真っ青な顔で地面に倒れている。

「お前の虎か？」

「リンカーンっおやめなさい」

凜とした声で虎に命令するが、まだ少女への興味を失っていないリンカーンは前足を少女に乗せどう猛な咆哮をあげる。

「あんたのペット、騒がってないんじゃない？」

俺は半殺しでもOKでも無関係な人間の少女を犠牲にするのは

彼女のポリシーに反するのか？なんて考えながら嘲笑気味に言うとその京介の言葉など無視して

「……岡見様、貴方にモノを頼める義理はないですけど……

あの少女を助けるの手伝ってくださいます？」

あの妖獣・リンカーンはセイレーン族のみに従う護身獣で

おそらく今は誰かの術で正気を失ってる……と女は簡潔に説明する。

「俺のリクルート諦めてくれるならね」

本当はそんな条件なくても人間一人を助けるのに全く依存はない。しかしせっかくなので恩を売っておく。

「商談成立ですわね。」

リンカーンは私が引きつけますから岡見様はあの女の子を安全な場所に

移動して蘇生術をかけてくださいませ」

蘇生術……果たしてあの少女はまだこと切れずにいるのだろうか……？

コンクリートに広がる赤黒い染みから相当な量の血を失ってることが伺える。

（生きて……）ないかもしれない。

「ねえ、名前なんていうの？」

強襲者から協力者となった女にいささか緊張感にかける質問をする。

女は京介のことをかなり知っているみたいだが

京介には女が雇われのセイレーンであることしか知らない。

急な問いに一瞬、あっけにとられたらしいが

ふと今までの毒のある華やかな笑みとは異なった聖母のような慈しむ笑みを見せ

「インペリアよ」

今後、インペリアを思い出すときはきつとこの聖母の笑みを思い出すんだろうな・・・

京介はぼんやりと考えた。

4. リンカーン

「リンカーンっその子を離しなさいっ」

インペリアは重力を全く感じさせないような動きで

軽々とリンカーンに飛び乗りまるで乗馬をするかのようにリンカーンを

制御しようとしている。

辺りに漂う血の香りに興奮しているのかリンカーンはインペリアを激しく振り落とそうとする。

（俺は女の子助けなくちゃ）

リンカーンが先ほどもまでご執心だった獲物・・・

倒れた女の子に眼を向け、そして息を呑んだ。

右手の肘から下が綺麗になくなっている。

辺りにはおびただしい量の血が飛び散り茶色い服を黒々と濡らしている。

この子が持っていたものだろう。

京介でも知っている有名なメーカーのトートバックが

中身を撒き散らした状態で吹き飛んでいる。

「生きて・・・」

るわけがなかった。

少し長めの髪がかかった顔は生気が全く見られないほどに青ざめている。

そっと首を触り脈を見るが完璧に止まっている。

（やっぱり・・・）

分かり切っていたことだが、もうすでに彼女の肉体は命を失っていた。

直接手を下したワケでは内が、結界を張るのを怠った自分の不注意から

死なせてしまったことには違いない。

『殺してしまった・・・』

そんな後悔の念が心の奥底からじんわりと広がってくる。
この構内にいるということは同じ大学なのだろう。

総合大学なので学部が違うとまったく人が分からない。

（知らない・・・子だよなあ・・・）

年下・・・だろう。

血の気を失った白い肌が人形じみている。

（この子に俺の血を与えれば・・・）

吸血鬼として蘇るだろう。

しかし同族に迎え入れるのは魔族異種族間協定で

『配偶者もしくは養子などとしてその身柄を一生管理出来る者』の
みだ。

違反すればそれなりの罰則をうけることになる。

（それに目が覚めたら見知らぬ男が旦那なんてイヤだよな・・・）
もう一度そっと少女の首筋を触れる。

柔らかい髪感触がさらさらと京介の指から逃げていく。

白い頬に飛び散った血痕をそっと指でぬぐうと目元に流れる涙の後
に気付き、

胸が痛んだ。

人間の身体はその命が尽きてしまっても変化を続ける。

筋肉中には乳酸がたまり死後硬直が起こり、その後は腐敗とともに
次第に死後硬直が解けてくる。

（どうするかは後で考えるか）

出来る限り少女の身体を『新鮮』に保つために京介は意識を集中させ
少女の周囲に時間の流れを遅くする小さな結界を作った。

「リンカーンっ何故私の言葉が届かないの?!」

インペリアは同時に生まれ共に歩んできた自分の分身とも言える
リンカーンの狂態が信じられない。

セイレーンを守る為だけに存在する守護獣・・・

しかも自分の守護獣が主であるインペリアに牙をむくなんてまるで悪夢を見ているようだ。

リンカーンに馬乗りになり制御しようと言霊を紡いでも地獄の底から響くようなリンカーンの咆哮は変わらない。

（もしかして・・・）

振り落とされない様に首にしがみつきながらリンカーンの耳に手をやると

耳の中に丸められた紙らしきものに触れた。

おそらく封魔のお札だろう。

「誰がこんな事を・・・」

今は考えるよりもリンカーンを止めることが先決だ。

耳に詰められたお札を取り耳元で言霊を紡ぐ。

首に後ろからしがみつきながらリンカーンの喉元に手をやると

「いたっ」

細い針がインペリアの指を傷付けた。

（封魔のお札で耳を塞ぎ悪魔の針で首を刺して正気を失わせる・・・）

どちらも悪魔族のやり方だ。

グループには悪魔族の加担者もいるのね・・・

この悪魔の針を力任せに抜いたらリンカーンは全ての血を失うまで出血するだろう。

できれば生きて助けたい。

無理矢理とはいえ忠誠を誓わされ働かされたグループがどのように動いているのかは全く知らなかった自分が悔しい。

（所詮セイレーン族は捨て駒ってワケね）

自分の甘さに気付く。

一族の女王として生まれ何不自由なく暮らしてきたインペリアは結局のところ世間知らずのお嬢様だったわけだ。

そして甘さに気付くのが遅かったようだ。

リンカーンを「生きて助けたい」と悪魔の針を抜くのを躊躇ったの

が命取りだった。

生死をかけた戦いでは一瞬の判断ミスが命取りとなる。

ぐわあああ

リンカーンの咆哮は一層大きくなりインペリアを振り落とした。

ああああ

灼熱の痛みが肩を貫き声にならない絶叫をあげた。

もうだめね・・・さよなら・・・リンカーン

数回目になる灼熱の痛みを感じながらインペリアは針をひと思いに抜き取った。

Mr. 岡見はあの少女を救えたかしら？

消滅しつつあるリンカーンの霧状の体液を浴びながらぼんやり考える。

吹き出る血液はすぐさまに塵のようにさらさらと消えていく。

リンカーンが消滅しつつあることを示す塵を指で触れながら

自分自身の寿命も感じつつあった。

5. キメラ（前書き）

京介は美樹を助けられるのでしょうか？

5. キメラ

「私はもう消滅してしまう・・・」

リンカーンに咬まれたのだろうか・・・

肩には見るも無惨な赤黒い穴がぽっかりと開いている。

気管もどこか損傷しているのかもしれない。

言葉のところどころにしゅーと空気が抜ける音が混じる。

「御願い・・・私の腕をあの子に移植して・・・キメラにして・・・
そうすればあの子は助かるわ・・・」

「でも・・・」

この状態で腕を切り離したら確実にインペリアは消滅・・・
死んでしまうだろう。

「早く・・・お願い・・・私はもう・・・」

すうっとそのままインペリアは倒れてしまった。

「インペリア・・・」

俺はどうするべきなのだろう・・・

少女はもうすでに事切れている。

目の前のインペリアももう数分の命であろう。

ちらりと結界を張った少女に視線を投げ、

もうすでに魔力をほとんど感じさせなくなってしまったセイレーン
と見比べる。

「やっぱり・・・」

小さな風が少女を中心に生まれている。

見開かれた瞳にはガラス玉のように全く表情が無い。

「おはよう」

京介の言葉に応えるかのように少女の身体が数センチ地上から浮き
上がり、

そのままゆっくりと立ち上がり始める。

低くとも高くとも聞こえる長く悲しげな声・・・果たして声と言っているのか・・・

人間の声とは思えない「音」が少女の唇から発せられた。

風は段々強くなり、その風にたなびくように少女の髪がみるみると伸びていく。

長い長い髪が優雅に舞う姿はまるで異国の宗教画の様だ。

右手の指先から白い光が生まれその光は徐々に腕へ肩へ身体へと

全身を移動していく。

ぱあん・・・辺りの結界が内側からの魔力に耐えられず砕け散る音が響く。

それが合図だったかのように風がやみ少女はそのまま地面にゆっくり崩れ落ちた。

「ふー」

京介は少女の傍らに座り込み脱力してしまう。

意識がない女性に触れるのは気が引けたがそっと少女の腕を取り、傷一つ無い真っ白い腕を丹念に観察し自らの仕事ぶりを確認する。

「牛乳・・・買いそびれちゃったよ」

時計を見ると5時半少し前だ。

このまま少女をコンクリートの上に寝かせて置くわけにもいかない。塩原に「すみません。ちょっと急用が出来たのでこのまま帰宅します」

と携帯に電話入れ少女をどうしようか悩んだ。

（ここで起こした方がいいよなあ）

このまま京介の部屋に連れて行こうかと思ったが目が覚めて見知らぬ男の部屋ってのはさすがにイヤだろうし・・・。

（誤解されてもいやだしなあ）

「お目覚めの時間だよ。お姫様」

少女の額に手をかざし覚醒の合図を送る。

「ん・・・あ・・・」

うつすらと瞼を開け焦点の定まっていなない視線が

「おはよう。目覚めは良い方かな？」

との京介の声に反応する。

「おはよう・・・ございます」

可愛らしいが落ち着いた声。

さっきの声とは別人の・・・この少女本来の声だろう。

「ごめんね。起こしちゃって。この学生？」

あ、ゴメン。俺は理工学部生物工学科4年の岡見京介。

と慌てて自己紹介を続ける。

「はい・・・ここの学生で・・・」

経済学部2年・・・竹来・・・美樹です・・・」

どうやら寝起きは悪くないらしい。

「私・・・どうしてここで・・・」

「覚えてないよね。良かった・・・えっと取り敢えずここに居ると

誰か来ちゃうかもしれないから・・・」

あ、髪ってどの位の長さだった？」

「え・・・？」

言われてふと自分の髪に触れると・・・

信じられない程長くなっていて驚いたのだろう、声が出ない。

「一生分の髪が伸びたから・・・竹来さん。」

竹来さんは一度死んだ身なんだ」

一度死んだ身？

目の前にいる若い男・・・美樹と同年か少し上くらいだろう・・・

が不思議な事を言った。

美樹の聞き間違いだろうか？

でもそれ以上にこの髪・・・一生分？一生分の髪が何で伸びるの？

驚く事が多すぎて目の前の男にたいしての不信感なんて吹き飛んでしまっている。

「あの・・・？」

何とか声を出せたが口が渴いていてうまく声が出ない。

「これくらいかな？ちよつとゴメンね」

男は遠慮がちに美樹の髪を取り・・

次の瞬間には引つ張られた様な感触も何も感じなかったのに、
ばらばら・・小さな音と共に京介の手の中に髪束が出来ている。

「あ・・」

本格的に覚醒した美樹の脳はこの男の奇異さを次々と見つけてしま
う。

「暫定的に・・ね。このままの長さで歩くわけにもいかないしね」
手で髪を・・切った？

そんな事が出来るの？

「ごめん。驚いたよね。詳しくは後で説明するね。

俺、吸血鬼なんだ」

きゅうけつき・・？きゅうけつきって吸血鬼？

頭の中で漢字変換されるまでに時間がかかった。

「そして竹来さんは・・もう人間じゃない。

Creature・・・セイレーンの右手を移植したカメラなん
だ・・」

6. 再生の夜（前書き）

生まれ変わったらカメラだった。
アナタはどう思いますか？？

6. 再生の夜

何の変哲もない3階建てのアパート、その3階の304号室が京介の部屋だ。

駐車場に車を止めあたりを見回し、人がいないことを確認する。

ぱっと見だとわからないとはいえ、女の子が血まみれの服を着ている姿を

人に見せたくはない。

鍵を開け、部屋の中に美樹を促す。

ふと見られてまずいモノは何もなかったよなと思い返してみる。

・・・ないだろう。大丈夫。

ごく普通の1Kのアパートでキッチンが少し広いのがご愛嬌。

本来なら一人暮らしの男の部屋に女の子を促すなんて

特別な場合だけなのだろうが、今回はある意味「特別な場合」なので仕方がないと自分で納得する。

「お邪魔します」

聞き取れないほど小さな声で言った。

「服・着替えた方がいいよね。ちょっと待っていて」

クロゼットからパジャマを取り出す。

まだ一度も袖を通していないしこれなら女の子が着てもおかしくはないだろう。

「俺は着替えている間、外いるから終わったら教えて」

こくりと頷いてパジャマを受け取ると、京介はいったん部屋を出る。

放心しているのかな？もっと泣き喚くかと思ったがあまりに大人しくてびっくりした。

切り取った髪を燃やし、creatureのものとは違い残ってしまふ

美樹のおびただしい血痕も炎で焼き焦がしておいた。

その場に座り込んでいる美樹の散らばった荷物を集め、

ほとんど抱えるようにして美樹を車に乗せ家まで連れてきた。
俺は間違っていたのだろうか・・・

あのまま彼女を殺したままにしておいた方が良かったのだろうか？
明日の新聞やニュースで「女子大生変死」と報道される。

手を何かにより噛み取られ出血多量によって死亡・・・。

猛獣か変質者か通り魔か、または怨恨か。

様々なプライバシーが暴かれて面白おかしく脚色されて公共の
見世物になる。そして飽きるとあっさりと次の話題になる。

でもプライバシーをさらされた本人とその家族はどうなるのだろうか？

被害者はこの世を去っても家族親族は生きて社会生活を営まなくてはならない。

それに彼女がこれから生きていくかどうかはせめて選択できてもよいはずだ。

そして・・・非常にわがままな願いかもしれないのだが人を見殺したくなかった。

しかも何の罪もない女の子を。

そんなエゴで生き返らせた。

Creatureとして・・・

「あの・・・終わりました」

玄関のドアを少しあけてパジャマに身を包んだ美樹が京介を呼ぶ。

「お茶飲む？ 紅茶でいい？」

棚から久しぶりに使うマグカップを取り出し、やかんでお湯を沸かす間に洗う。

洗って棚においてはいたが、長い間つかってなかったので
手触りが少し埃っぽかった。

美樹はまだ放心したようにたたずんでいる。

「座っていいよ」

そのクッションのどこ、とビーズクッションを指し示す。

美樹は素直にちょこんとクッションに腰をしずめた。

そんな姿はまるで小さな女の子のようだ。

大学2年生・・・19～20歳とはこんなに幼いものだったか？

京介は自分が本当に20歳前後だった頃を思い出してみようとする。しかしそれははるか昔過ぎてぼんやりとも思い出せない。

もう一つ、可愛いな・・・と思った。

まだぼんやりとして宙を見ている美樹をそれとなく観察してみる。

さっきは顔なんて見ている余裕はなかったがよく見るとかなり

可愛い女の子だと気付く。

名前は忘れてしまったがお茶のCMに出ているアイドルタレントに似ていなくもない。

おそらくこうゆうコを清純派と呼ぶのだろう。

「はい、どうぞ」

手渡したマグカップを微かな笑みで応えて受け取った。

（何て言えばいいんだろう・・・）

言葉を探すが見つからない。

いきなり「君はもう人間じゃないんだよ」なんて言われたら確かに人は事実をそうすんなりとは受け入れられないだろう。

ましてや自分の右手はセイレーンから移植したものだよ、なんて言われたら・・・

（恨まれても仕方ないよな）

今は大人しいが、落ち着いて状況が飲み込めたら罵られるのだろうか
さめざめと泣かれるのだろうかそれとも恨まれるのか。

生きた屍・・・いや、人形となって永遠に姿が変わらない存在。

この先4～5年はよいであろう。

しかし必ず「老い」ないその姿は人から不信をかう。

もちろん家族や親しい友人からも・・・。

そうなった時、彼女はそういった周りの環境を捨てて

生きていくことができるのだろうか？

俺みたいに・・・。

もう一度、美樹に目を向けると今度は彼女もしっかりとこちらに

視線を向けていた。

「お茶、ごちそうさまでした。」

ぺこりと頭を下げてマグカップをテーブルに置いた。
カップを置いたその手は彼女本人のモノではない。

「あ・・・うん」

あまりにお行儀良く言われたので京介は戸惑って言葉を
頭で反芻しなくては意味がつかめなかった。

「あと・・・お洋服も貸していただいちゃって・・・ありがとうございます
います」

と自分が着ているパジャマを摘んでみる。

まさかお礼を言われるとは思わなかったので面食らってしまう。

「あ・・・俺・・・」

謝るべきか、謝らなくてはいけないだろう。

目の前にいる娘を俺は殺してしまったのだから。

「あ・・・」

もう一度口を開く。

「ごめん」

頭を下げる。

これしか言えない。

弁解の余地なんてないし、いい訳言える立場でもない。

「ごめん。」

繰り返す。

静かな時間が流れる。

多分数秒、長くても十数秒の時間であろう。

しかし京介にはその間が永遠にも近く感じられた。

「あ・・・」

沈黙をやぶったのは美樹の困った様な声だった。

「ごめんなさい、私・・・謝られる意味が解らないんです」
顔をあげると不思議そうにこっちを見ている。

「だって俺・・・」

「私、今動いてますよ？」

確かに服に血が付いていたときはびっくりでしたけれど」
だから謝られるのがわかりません、と控えめな笑みを作りながら
静かに言った。

「でも俺が・・・」

美樹の身体がリンカーンに振り回される映像が頭の中でフラッシュ
バックする。

そしてインペリアの腕を切り落とし美樹に接合したグロテスクで
原始的な手術を思い出す。

「ごめんなさい。まだよく飲み込めてないんです」

ごめんなさい、と言わなくてはいけないのはこっちなのに
しきりに恐縮しながら謝られて京介は少し居心地が悪くなった。
また沈黙してしまう時間が訪れる。

「ごめんね。服も・・・着ていた服の血・・・クリーニングで落ちる
かな？」

話題を変えなくては、とあせって京介はそんなことを
言ってしまう。

しかし言ったあとで「しまった、不謹慎だったかな？」と
後悔をした。

「私、自分で洗えますよ？」

美樹もどうやら話題を変えたかったらしい。
ほっとしたような笑顔で答えた。

「あの・・・良かったらここで洗っていいですか？」

パジャマお借りして帰るわけにいきませんし・・・
とおずおずと上目使いで言った。

美樹が言うにはワンピースは幸い茶色なので洗っておけば
多少しみになっても目立たないだろうとのことだ。

明日にでもちゃんとクリーニングに出せばよいらしい。

「とりあえず、血のついたお洋服で帰るわけには行かないので」
とちらりと窓の外を見た。

もう日が落ちている。

「家に連絡とかしなくていいの？」

見た感じ良いところのお嬢さんっぽいし門限がないとも限らない。
って今時大学生で門限あるような家は皆無かな？

「そうですね、姉にメールします」

と奇跡的に血痕がつかなかったバックから携帯を出しメールを打つ。
一人暮らしではなく姉がいるらしい。

ペンギンのマスコットのついた携帯ストラップがいかにも
女の子の持ち物っぽい。

携帯メールを打つ早さもかなりのものでメールを普段から
フル活用しているのが伺えた。

電話不精だし、ちまちまとした携帯メールがどうも苦手な
京介にはそんな姿が違う人種のようにも見えた。

「遅くなるってメールしてきました。お洋服洗って乾かさなきゃ」
すっと立ち上がりお風呂場借りてもよいですか？

と手にワンピースを持ちながら首をかしげる。

「こっちだよ」

とお風呂場に案内する。

バス・トイレが別々になっていて一人暮らし用バスにしては
広いほうだと思う。

しかし女の子をまさか我が家のお風呂場に案内することになるなん
て・・・

ちらと美樹を見ると熱心に服の染みをチェックしている。

パジャマ姿の可愛い女の子とお風呂場へ・・・もちろん一緒に
入るわけではないが何か照れてしまうようなシチュエーションには
違わない。

（何か不謹慎だぞ、俺）

自分の不注意で殺した女の子に一体何を考えているんだか、と
ひとりごちする。

「洗濯石鹸ってありますか？」

せんたくせっけん?・・・男の一人暮らし・・・しかもそんなに
マメではない男の一人暮らし・・・そんなモノ・・・ない・・・

「買ってこようか?」

何かおろおろしてしまう自分が情けない。

「あ、いえ、いいんです。えーと、

じゃあボディーシャンプーとかありますか?」

「ボディーシャンプーならあるよ」

とお風呂場には使いかけがあるが、一応棚から新しいボトルを出す。

「お湯だしとく?」

「いえ、血はお水のほうが落ちやすいんです。」

「へえ・・・」

感心してしまう。

確かにタンパク質を含んでいる血液をお湯であらうと凝固を起こし
そうだ。

「ではお借りします」

ぺこりと丁寧にお辞儀をしてバスルームに入っていく。

それを見送りながらまた何故か照れてしまう。

考えてみるとこの部屋に女の子が入るのは初めてかもしれない。

今の大学に入ってから彼女を作っていない。

いいな、と思う女の子がいなかったわけではないが縁がなかったの
だ。

彼女なんてつくらないで卒業かなあと思っている。

潤いの無い生活、それが部屋にも現れているかもしれない。

小さなTVにビデオデッキ。CDプレイヤーと本棚。

本も雑誌の類はほとんどなく学校の教科書と専門書くらいしかない。
クローゼットの中の衣類も基本的な大学生としては平気よりも

むしろ少ないほうであろう。

いつもの自分の部屋を改めて見直してみる。

くつろぐというよりただ寝るだけの部屋。

面白みもないが見られて困るようなものもなかったのがせめてもの

救いだ。

吸血鬼は普通の食事を食べる事は出来ても肉体を最低限維持するた
めにしか

必要とはしないので普段家では食事はほとんどしない。

学校や人というときは食べないと怪しまれるので一緒に食事を摂る。
それだけで十分だ。

部屋には一応、最低限度の食器類は揃えてある。

これも人を部屋に上げた時に『普通』に見えるための演出にもなる。
もちろん客人にお茶などを出すときにも使えるし。

それにしてもこのお客様用マグカップを出したのなんて何年ぶりだ
ろう・・・

「・・・」

懐かしい名前を口の中でつぶやいた時

「落ちました。ありがとうございます」

と美樹の声がし、ふと我に帰った。

「良かった」

ほっと胸をなでおろす。

血を落とすのに使ったボディーションシャンプーの香りがまるで
湯上りのようでどぎまぎしてしまう。

「いろいろお借りしちゃって悪いのですがこのドライヤー使っても
いいですか？」

と洗面台の横にあるドライヤーを指差す。

どうぞ、と言いながら丁寧なコだなあと関心する。

最近では、挨拶はおろかお礼も満足に言えないコが多い中

こんな礼儀正しいコは珍しい。

親の教育が良かったのだろう、良い意味で親の顔を見てみたい。
そんな年寄りじみた事を考えているうちに美樹はドライヤーで
服を乾かし終えたようだ。

ほら、見てくださいーと嬉しそうにワンピースを広げてみせる。
「落ちましたーっしかも皺もあんまりつかなくて良かったー」

確かに見た限り血まみれになっていたようには見えない。

とりあえずこれを着て外を歩いても何ら問題は無いであろう。

「着替えるよね。また外出るね」

「あ、すみません」

部屋を出ると外はすでに真っ暗になっており、冷たい夜風が頬をなでた。

京介はタバコを吸わない。

のでこんな時に時間を潰すすべがない。

そんなわけで美樹が着替え終わるまでぼんやりと見慣れた

我が家の玄関前の風景を眺め続けた。

6. 再生の夜（後書き）

感想いただけると嬉しいです

7. 説明

「少し縮んだかなあ・・・」

血を洗い落としたウエストのあたりが心持、朝よりも
びったりしているように感じた。

しかしそれもあくまで心持、だろう。

2、3回ウエストをひねってみるとしっくりとなじんだ。

京介の部屋に大きな姿見がない。

よって全体を見る事はできないが着た感じおかしいところはないで
あろう。

（問題は髪・・・）

一生分の髪・・・優に5、6メートルはあっただろう・・・を
暫定的に切ったので毛先がばらばらになっている。

長い・・・長い髪。

あんなに伸びるんだあ・・・と思い出してみる。

髪を伸ばそうと思っていたので折角長くなった髪を切っちゃったのは
もったいなかったのかな？とも考える。

教科書で見た平安時代の女の人はあんなに長い髪をどう維持してい
たのであろう？

肩下で適当に切りそろえた自分の髪をつかみ思いをはせる。

明日美容室にいかなくちゃ・・・ちようどそろそろ行こうと思って
いたし。

今日はまとめておけばよいだろう。

化粧ポーチからピンを出し数箇所ブロッキングしながら
慣れた手つきでアップスタイルに纏め上げた。

夕方以降はまだ寒い。

そんな中でこの部屋の主である京介を長く待たせるわけにはいかな
いので

メイク直しはとりあえず諦める。

ふと洗面所の鏡から視線をキッチンの方に移す。

日頃はあまりシンクを使わないのか、はたまた異常なまでに神経質なのか全く料理とは無関係にも見える台所だ。

「男の人ってこうなのかしら？」

美樹には男兄弟がないのでよくわからない。

一人暮らしの男の部屋に全く行ったことがないわけではないがこんなにもまじまじと観察したのは初めてだ。

は、と我に返り玄関のドアをあける。

「あの・・・お待たせしました。」

ドアに背を向けて階段の踊り場を外を見ている京介を呼んだ。寒かったかしら？とちょっと心配になる。

「よかった。洋服だめになっちゃわないで」

ほっとした京介の笑顔を見て心配かけて悪かったなあ・・・と反省する。

でも原因作ったのは京介なのだから美樹が悪かったなと思う義理はないはずだ。

それでも親身になって心配されると後ろめたくなってしまう。

それが美樹の良い所でもあり、しかしそのせいで少々引っ込み思案になってしまう短所でもある。

「良かった・・・じゃあ、家まで送ろうか？」

暗くなっちゃったしと、空を指差す。

時計は九時少し前を指している。

美樹の家に門限はないが、いつも7時前には家に着くので遅い帰宅になるだろう。

「家どこかな？少し車の中で話すね」

玄関の棚から車と家の鍵を取り美樹がバックを取って来るまで玄関で待っている。

（行動がてきぱきしたひとだなあ）

とテンポののんびりしている美樹には感じられる。

数字と格闘している理系の人ってみんなこうなのかなあ・・・とぼん

やりと考えた。

玄関でミュールをはくとき、靴擦れが痛くてお昼に貼ったバンソウコウが甲部分に引っかかり少しはがれ傷一つない真っ白な足の甲をさらした。

京介の家からは車で20分ほどの距離らしい。

学校のある市とは隣の市だが町名を言ったら近くまでならわかるから近所は案内してと京介は言った。

車を運転しない美樹にはよく分からない道を京介は楽しそうに運転している。

「運転って好きなんだ。マニュアル車でガンガン飛ばすのが好きってのじゃなくてただただ景色が変わるのがすきなんだよね」とハンドルを嬉しそうに握る。

「男の人って運転好きな人多いですよね」

周りのクラスメート達を思い出しながら言う。

それに応える京介のおだやかな笑顔がふと真顔に変わり

「竹来さんは・・・もう・・・人間じゃないんだ・・・」

突然、本題に入った。

美樹の京介に向けていた笑顔が凍りつく。

「ごめん・・・もう・・・竹来さんは普通に年を取ることができない・・・」

さっきまでとは違った重い声。

「さっき・・・もう・・・人間としては死んで・・・今は・・・生きた人形なんだ」

「傷を負っても体が肉片レベルにばらばらにならなければ死ぬ事が出来ないし、小さな傷は人の治癒能力とは比べ物にならないほどの速さで

完治しちゃう・・・

これからは周りの人たちに不信に思われないように生活しなきゃいけない」

(じゃないと周りから迫害される・・・昔の俺みたいに・・・)

京介はその事は黙っていた。

いきなり脅すような事は言いたくないという気持ちが言葉を抑えた。
もうひとつ、京介が今言いたくなかったことは、

今後10年は今の家族、友達と一緒にいる事はできないだろうという事・・・

あまりに残酷なことは言いたくない。

しかも彼女が「死んだ」日に。

「そして俺は吸血鬼なんだ・・・ごめん・・・」

君を人間以外のものにしちゃって・・・」

美樹は凍りついたように表情をこわばらせたままだった。

人間以外のもの・・・？そんなものあるわけない。

って思う気持ちもあるが、さっき自分が血まみれだったことや

信じられないくらい長い髪が非現実なことが現実になった証拠のようにも思われた。

確かに血まみれだった。

確かに髪が伸びた。

確かに・・・おかしい？

でも・・・でもそれだけじゃまだ信じられない。

「でも・・・」

言いかけた美樹に

「これで証拠になるかわかならいけれど」

と京介は口をあけ・・・牙を見せる。

「牙」にしか見えない歯・・・人の犬歯は普通ここまで発達しないだろう。

美樹も少し八重歯なのでよく「見てみてゝ牙みたい」と

冗談で言ったことがあるが八重歯と牙は大きく違う・・・と京介の牙を見ると感じた。

しかしさっきまでそんなの無かったのに・・・。

「吸血鬼の牙はネコの爪みたいに普段は隠してあるんだ。

人間に紛れて暮らせるために進化かもしれない」

と静かに語るその口元にはもう牙は確認できなかった。

「でも・・吸血鬼って昼間だめなんでしょ？」

そうだ、日が照っていた。

薄暗かったがたしかに京介を見たのは光の下だった。

「光がくらいで灰になるような弱い血族だったら・・

遠の昔に淘汰されているよ・・ちなみに鏡にも映るよ」

サイドミラーに目を向けると京介の横顔が鮮明に映っている。

「死体だって鏡に映るだろ？そもそも実体があるのに鏡に映らない存在があるわけないんだよ。

ブラム・ストーカーの影響でみんな吸血鬼は鏡に映らず、

光とにんにくと十字架がダメって思っているみたいだけど」

京介が言うには、吸血鬼みんながクリスチャンではないし

どこの国にもいるのだから欧州の宗教のみが弱点になるわけがない
とのことだ。

中国には有名なキョンシーがそれにあたるし日本にもひえんまという
女吸血鬼が昔話に登場しているらしい。

「そして霧になったりコウモリになったりも出来ないよ。

あんまり魔術めいたことは出来ないんだ」

「じゃあ・・私を生き返らせたって？」

十分に魔術めいている。

「んと・・竹来さんのもとの体にセイレーン族の

性質が備わったっていうか・・あ、接木ってわかる？植物の。

あれと同じだよ。俺は何か特別なことしたわけではないんだ」

接木・・品種改良などのために与えたい性質を持った他の植物と
接合させて性質を持たせる。

まさにぴったりの例えだろう。

ただし敢えてドナーであるセイレーンのことは告げない。

いずれ時が来れば説明するかもしれないが、

ただでさえ混乱している時に「ドナーは死んだ」なんて知ったら

自責の念にかられてしまう恐れがある。

「あの・・・それって腕をくつつけたのですよね？」

くつつくのですか？だってキョゼツ反応があるんじゃない？」
たまにテレビで臓器移植の問題を取り上げている。

あれは他人の体のモノは自分とは違うと認識するので免疫系が
折角移植した臓器を攻撃してしまう。

それを防ぐには血液型や免疫の細かい型が一致しないといけないらしい。

美樹はあまり詳しくはわからないがすぐに手がくつつくとは
考えられない。

「・・・死体に抗原抗体反応は起こらないんだ・・・」

京介の声のトーンが下がる。

極力「死体」という言葉は使いたくない気持ちでトーンを
下げさせたのだろう。

「ぬいぐるみの腕を別の人形の手につけるのと一緒にだから・・・」
そして美樹は生きた死体・creatureになった・・・。
左折するために出したウインカーの音がやたら大きく聞こえた。

「俺たち吸血鬼や竹来さんみたいな・・・ヒト・・・は
人間と代謝システムや細胞周期が違うんだ」

ヒトと呼んでいいのだろうか？

空いている何の変哲もない住宅地の道を走る車の中での非現実な会
話。

「竹来さんもう普通の代謝はされない。もちろん普通の食事を
摂ることはできるけれどそれが今までみたいに成長に使われるこ
とはなく

最低限度の細胞維持にのみ使われて体外に排出されえる・・・

あ、この道は右？左？」

右です、と小さく答えた。

もうすぐ美樹の家の前になる。

「どうしよう。明日、また話せるかな？」

ここです、と美樹が家の前で言う。と京介はエンジンを止めながら顔を向けた。

「まだ、いろいろ説明しないといけないし、明日学校に来る？」

明日は2コマに必修授業がある。

「はい。2コマに授業あるので・・・」

「ならお昼にでも話そうか。えっと・・・じゃあ2コマ終わりに生協の前って平気？」

「はい。・・・あの、ありがとうございました」

「え？」

「あの、送っていただいちゃって」

ぺこりと頭を下げる。

「ううん。いいんだよ。ごめんね。明日もっと詳しく話すね」

助手席のドアを開けもう一度お辞儀をして車からでた。

「また明日」

何故か二人で同時に言い、それを二人で照れ笑いしながら京介は車のエンジンをかけ美樹はそれを見送った。

「送ってくれてありがとう・・・か・・・」

帰り道を運転しながらさっきの美樹の言葉を思い出す。

彼女に京介がどんな残酷なことをしたかはたして理解しているのだろうか？

8. 生まれない自覚（前書き）

美樹にとって怒濤の一日が終了しました。

8. 生まれない自覚

「ただいまあ」

玄関を開けて帰宅を知らせる。

「おかえりなさい。ごはんどうする？」

と奥から母・奈々子の声がした。

ご飯・食べてはいないがあまり食欲がなかったので

「うん。済ませてきちゃった」

と嘘を言った。

食事・のことも何か言っていたなあと京介の言葉を思い出す。

覚えていないわけではないがまるで何か物語を聞かされたような後味しか

まだ感じない。

不思議な男の人だった。

目が覚めたら血まみれで目の前に京介がいた。

気を失う前に何かあったような気がするがよく思い出せない。

講堂の横を歩いていて・・・大きな動物に咬まれて・・・それから・・・

気が付いたら目の前に京介がいた。

そして「岡見京介、この大学の理工学部生物工学科の4年生」と

自己紹介されそして「吸血鬼だ」とも教えられ・・・

どこまでが本当なのだろうか？

私は本当に死んでいるのだろうか？

彼の家で洗ったワンピースにはかなりの量の血液が付いていた。

あの量を自分ひとりで流したのならきつとこんなびんびんしていないだろう。

・・・しかも外傷が全く無い。

腕・・・腕はセイレーンのだと言っていた。

セイレーンって確かどこかの国の化け物よね？昔本で読んだ気がする

る・・・。

その腕が私について私は死んで・・・セイレーンも死んでる？
あの虎みたいな動物に何か叫んでいた綺麗な女の人がセイレーン？
考えれば考えるほど物語じみていて手の込んだいたずらのようだ。

「何玄関でしているの？」

姉・真樹に不審そうな声ではっと我に返る。

玄関でミュールを脱ぐつもりそのままぼんやり考え事していたらしい。

「忘れ物でもしたの？」

小首をかしげるような仕草で真樹は尋ねる。

よく一緒に買い物したり洋服、アクセサリを貸し借りしたり、
何でも相談できる大好きな姉だが・・・今日のことは話せない・・・。

「ううん。疲れていてぼーとしてた」

と苦し紛れに言ってみる。

「昼間は暑いから、あんまり無理しちゃだめよ」

冷蔵庫にミントティー冷えているから、と言い真樹は自室に戻って
いった。

夢・・・だったかもしれないし・・・よくわからないや。

明日、また考えよう。

そう思い直し家に上がりミントティーをグラスに注ぐ。

「珍しく遅かったわね。京子ちゃんたちと一緒にだったの？」

既に真樹から遅くなっていることを知らせてあったので母は何も不
信がってはいない。

「え、うん。」

嘘をつくのがちよつと後ろめたく思い語尾が濁る。

「顔洗ってくるね。」

何となくこの場に居すらくなって

冷たいミントティーを飲み終えて洗面所に向かう。

いつも通りオイルクレンジングを手に取り指先でくるくると
円を描きながらマッサージする。

目を閉じると一日の疲れがどつとでてくる。

一日でいろいろな事があった。

岡見京介・・・ともう一度京介を思い浮かべる。

優しい青年、それが第一印象だった。

言動もそうだが、優しい瞳をしている。

ときばきとはしているがトゲを感じさせない。

ぬるま湯でオイルを流し洗顔フォームを泡立て、残ったオイルを泡で包むように洗い落とす。

「ふー・・・」

柔軟仕上げ剤の香りのするタオルで水気をふき取り鏡を見た。

「あれ？」

見慣れた自分の顔なのに何かが違う・・・大きく違うのではなく丁度、

「昨日今日とちがうかも」って程度の軽い違和感ではあるが・・・

「あー」

一人で納得して声をあげてしまう。感じた違和感の原因、それは眉だった。

整えるために少し切っていた眉が伸び放題になっていた。

髪が一生分伸びたのと同じ理由だろう。

さすがに髪と違って眉は伸びることが出来る長さが決まっているので数メートルにはなっておらずちよつと伸びているくらいだった。

「やー、面倒なのに・・・」

と言いながら眉バサミで少しカットする。

面倒とは言ったがもともとが自然なアーチ型なのでそう手は加えない。

「これでよし」

と鏡でチェックしてみてもまだ残る違和感を感じながら化粧水を手にとりパッティングする。

「肌・・・」

違和感の原因は肌だった。

もともとそんな日に焼けている方ではないが鏡に映る美樹の肌は

真っ白といえるほど白くキメが整っている。

（赤ちゃんの肌みたい）

右頬にあって気になっていた3個のそばかすも消えている。
完璧に手入れの行き届いた肌になっていた。

「これも死んだから？」

死んだらゾンビみたいになると思ったのに肌が綺麗になるなんて変なの・・・

ほのかに柑橘系な化粧水の香りを嗅ぐと段々と眠気が体の奥から染み出てくる。

湯船にゆっくりと浸かりたかったが今日は早めにベットに入りたい。
ホント一日にいろいろありすぎた。

「明日岡見さんにいろいろ聞こう・・・」

歯を磨き部屋に行く。

オレンジを基調とした温かみのある部屋。

小物一つをとっても女の子らしくて可愛いが少し幼い部屋ともいえる。

服を脱ぎ明日クリーニングにだそうと椅子にかける。

クリーム色のパジャマに袖を通して聞く事を頭の中で整理しながら
ベットに入っているうちにいつの間にか深い眠りに落ちていった・・・。

9. 偽りの日常（前書き）

ネイルアート好きですが筆で描くのは苦手です（汗
この章はとても長いです

9. 偽りの日常

「あれ？ネイルアートしたの？」

京子は教室で美樹の隣に腰を下ろすなり挨拶もそこそこ指摘する。

昨夜から意識的に目を逸らしていたので一度も直視しなかった右手を見ると左手の珊瑚色のネイルと色味が似たオレンジ色の

下地に銀色の繊細な花が描かれている。

これが・・・セイレーンの手・・・私の手よりも少し指も長くて細い・・・

他の人が見てもその変化は気に留めるほどではないだろう。

しかし自分の長年見慣れた身体とは明らかに違うパーツであった。

「器用だねー。自分で書いたの？」

「え・・・？う・・・うん」

「あー、お姉ちゃんかー。いいなー私もお姉ちゃん欲しいな」

京子は反応の薄い美樹に勝手に話を進めてくれる。

朝、少し寝坊し朝のシャワーを浴びて2限目前に美容室に寄った。

ばらばらの毛先を店で不審に思われるのを避けるため、

いつもとは違う美容室にしておいた。

長さを変えずに少しそろえてすいてもらい、形を整えてもらった。

その事を指摘されないってことは違和感なく仕上がっているということだろう。

「・・・ねえ・・・やっぱり昨日のこと怒ってる？」

さすがに後ろめたいらしく反応がそっけない美樹に京子は何うように聞いてきた。

「え・・・？昨日？」

そういえば、弓道部の部室から追い出されたっけ・・・

でもそんな事は小さなことに感じた。

「ううん。いいよ怒ってないよ」

「・・・ホント？」

「うん」

「そっか・・ありがと。でもゴメンね。今度埋め合わせするね
慎也くんの友達が美樹のこと見て気に入ったみたいで今度飲もうだ
って」

「え・・・うん。じゃあ今度のもつか」

「絶対だよ。」

「忘れないでね。」

「美樹もてるからなー・・・何で彼氏作らないの？」

「え・・・と・・もてないよ」

心ここにあらず、だが失礼がない程度に話を合わせる。

「だってこの前もー・・・」

京子の言葉と授業開始のチャイムが被り同時に教授が講堂に入ってくるのが見え、

美樹は視線を前方に向けた。

まだ何か言いたげだったが京子もしぶとそれに倣い話をやめた。

1時間30分の退屈な授業が始まった。

終業のチャイムと同時に昼食を誘う京子を適当にかわし美樹は学生生協へ向かう。

友達同士数人でお昼をどこで食べるか相談しているグループ、
手をつなぎながら学食へ入っていくカップル、手にバスケットボールを持ち

グラウンド方向へ走っていく男子学生・・・

思い思いの行動がのどかな昼下がりの下で繰り広げられている。

（そろそろ日傘が必要かなあ）

思いの外暑く感じる木漏れ日を受けながらゆっくりと前方に目をやると

京介はもう先に着いていた。

「すみません。お待たせしちゃいました」

「ううん、大丈夫だよ」

車なんだけれどいい?と京介は美樹を促しゆつくりと歩き始めた。

「この後って授業ある?」

「いいえ、今日はもう授業はないです。」

4コマの授業あったのですが

さっき掲示板見たら休講になっていて・・・」

「じゃあゆつくり食事できるね。」

竹来さんって何かバイトしている?」

「はい。今は週に一回ケーキ屋さんでバイトしています」

「そっか・・・他に何かバイトしていた事ある?」

「え・・・と、春休みには塾の受付で事務のバイトしました」

「あ、それで行こう。」

俺はその塾の講師していて知り合ってたってことにしよう」

「?やっぱりそゆの必要ですか?」

「いやあ・・・理工学部って男ばかりだから

こんな可愛い女の子と歩いていたら

絶対何か言われるんだよね。」

「そんな・・・」

可愛いと言われてちよつと照れている姿が本当に可愛い。

美樹の歩幅に合わせて歩くと、いつも歩いている学生駐車場までの

道が新鮮に映った。

「今日行くところってオムライスの店なんだけれど卵大丈夫?」

「はい。大好きです」

「よかった」

車に乗り込みながら尋ねた。

午前中に隣の研究室のクラスメイトに「女の子連れて行って喜ばれ

そうなお店」を

教えてもらっておいた。その女子学生には「へー、岡見君にも彼女
できたの?」と

からかわれて少し居心地が悪かったが・・・。

その紹介されたオムライス専門店は大学から車で10分ほどの位置にあり、

内装もカントリー調でかわいらしく女の子向けで、客も女の子のグループと

カップルが目立つ。

ざっと店内を見回した限りは見知った顔はいない。

「可愛いお店ですね」

ふんわりとしたスカートに赤いギンガムチェックのエプロン姿のウェイトレスたちを眺めながら美樹は

「制服可愛いしこんなところでバイトしたいです」としきりに言った。

「女の子好みの店をクラスのコに聞いたら薦めてもらったんだ。」男である京介には赤いギンガムチェックのテーブルクロスやいちご柄の

ナプキンが可愛いがちょっと居心地悪い。

こんな店は男同士じゃこないなあ、女の子連れなら違和感ないけれど。

メニューを見ても女性客をターゲットに絞ったと考えられるデザート

トを

全面に出したセットなどが目を惹いた。適度に間隔を開けられたテーブルごとに小さなパーテーションで区切られており隣の会話はほとんど聞こえない。

これならば聞かれたくない話題でも合格点をあげられるだろう。まあ万が一話を聞かれても現実の話とは思われないだろうが。

「オムライスなんて久しぶりだなあ」

二人とも小さなサラダとスープ、食後の飲み物とデザートのセットを注文した。

京介が注文したチキンオムライスの卵をくずしながら中のピラフを確認する。

ガーリックでいためたチキンとタマネギ、そしてニンジン、

ブイヨンスープの香りが鼻をくすぐる。

美樹は猫舌なのか運ばれてきたきのこオムライスに切れ込みを作り湯気を逃がしている。

吸血鬼の嗅覚は人間よりもはるかに優れているので大抵の料理なら香りだけで食材を言い当てることができる。

そんな特殊技能があっても男の一人暮らしで凝った料理なんてそう作らないし京介は吸血鬼なので普通の食事を摂る必要もないが。「そうなんですか？ 私は結構作りますよ。」

生クリーム入れると卵がふわふわで美味しいんです」

「さすが女の子は違うね。じゃ、今度作ってくれる？」

「いいですよ。」

ちよっとナンパじみているかな？

と言ったあとで少し後悔したが

美樹に美味しいオムライスを作ってもらっているのは

なかなか嬉しいシチュエーションに思える。

しかし作ってもらいたいのはやまやまだが、

それは誰か別の男の特権かもしれない。

「立ち入った質問かもしれないけれど家族のほかに

一緒に生活しているヒト・・・んと例えば彼氏とかいる？」

ちよっとためらいながら京介は質問した。

もしもいるなら彼氏に不信に思われないよう人間生活するのが

最重要課題になった。

いつも美味しいオムライスを美樹に作ってもらっている男のコトを

ばんやりと考える。

外見は標準以上、性格も悪くはなさそうだ。

男は放っては置かないだろう。

人ではなくなった生活に慣れたところに彼氏ができるのならばそれなりに

誤魔化し方も心得ているかもしれないが、今いきなり身近な人間をごまかすのは至難の技であろう。

「いえ・・・いないんです。」

スプーンの手を止め、ちよつとはにかみながら笑顔で答えた。
意外。

可愛くて性格も良さげなのに・・・もしかして理想が高いとかかな？

「岡見さんはいるんですか？」

「いやぁ忙しくてなかなか・・・」

「ふうん。岡見さんならすぐ出来そうなのに」

眉目も整っているし人当たりも良いのにと美樹は首をかしげながら続ける。

「モテないし何かタイミング悪くてね。」

この大学来てから全くいないんだよねえ」

「前の大学ではいたんですか？」

無邪気な質問を浴びせてきた。

「んゝ前の大学の時はね。」

結構長く付き合った彼女いたけれどやっぱり・・・

ね、こんなカラダだし」

肩をすくめておどけてみせた。

「あ・・・そうなんですか・・・すみません」

「いや、謝るほどのことじゃないよ」

やっぱりいいこだなあ・・・と思った。

「でもないなくて良かった。」

いきなり体質が変わったことを隠すの大変だから。

あとは家族だけけど・・・家族は仲良いのかな？」

あまりにずけずけとプライバシーを聞くのははばかられた。

しかし細心の注意を払って人間生活を演じなくてはならない。

さもないと・・・周囲から迫害されてしまう・・・昔の俺みたいにな・・・

「んゝ・・・普通、ですね。」

でも姉とは仲良くってお買い物行ったりしますよお。」

その仲の良い姉ともあと数年もしくは十数年で別れなくては

ならなくなる・・・それを今言うべきか・・・

左の頬に小さなえくぼを作りながら笑う美樹を見ていると
そんな悲しいことに触れさせたくない、と感じさせられた。

悲しませる原因を作ったのは京介なのに勝手なのかもしれないが・・・

「そっか。えっと、ちよつとまじめ話するね。

食べながらでいいから聞いてくれるかな。

取りあえず・・・竹来さんはもう病気にはならないし

怪我をしてもすぐになおっちゃう体なんだ。

しかも食事を必要とはしない。

ま、食べることはできるけれどね。

セイレーンの属性だから俺みたいに血を吸ったりはしないよ。」

もつとも最後に血を吸ったのはもう何年も前だが。

「特にキメラになったばかりの頃は

まだ人間の習慣が染みついているから

普通にお腹がすいたりすると思うよ。

あと、もしかしたらすぐく力が出るようになるかもなんだけれど・

・」

そう言いながらふとあることを考え、テーブルに置いてある

小さなバスケットからスプーンを一本手に取り

「これを何も特別力入れないで曲げてみて」

と美樹に差し出した。

「これですか・・・はい・・・ん・・・」

何度か持ち替えて曲げるのを試みてくれたが硬めのスプーンは

全くその形状を変えなかった。

「力は変化なしみたいだね。

じゃあ五感もそのままかもしれないなあ。よかった」

「セイレーンって・・・何食べるんですか？」

「それは・・・人間・・・」

一番伏せておきたかった事実だった。

「私……」

「あ、安心していいよ。セイレーンは人を食べるけれど竹来さんはキメラだから。」

力に変化なかったようにそこまで魔物寄りじゃないと思うから」ただ、腕のみの移植でどこまでcreatureとしての特性が発現するのかは気になる。

じっくりと観察・研究してみたいくなるのは美人を前にしてのオトコとしての

好奇心か研究者としての知的欲求か？

「セイレーンってのは希少種だから生態はよくわからないんだ。

ドナーも死んじゃったし……

ただドナー本人も言っていたけれど影響はほとんどないんじゃないかないかと……

まあ寿命だけは格段に伸びちゃうけれどね」

「ドナーが亡くなった？」

しまった。伏せておくべきだったか……。

「亡くなったよ……昨日……君に腕を残して……」

「まさか私のせいで……」

みるみる美樹の顔色が青ざめてくる。

「いや、それは違うよ。死の間際に竹来さんへ……

腕を残して亡くなったんだ……。」

「岡見さんの知り合いの方ですか……そのセイレーンさんって……」

「いや、昨日初めて逢ったんだ。」

セイレーン……インペリアは妖獣のリンカーンと相打ちになつて……」

言葉を濁してしまった。

インペリアの聖母のような笑顔を思い出した。

彼女は結局なにも大事なことは語らず消えてしまった。

美樹にどこまで話すか悩んだが、何かを説明出来るほど京介も情報を持っているワケでもない。

「リンカーンって・・・あの白い虎ですか？」

おぼろげだが覚えている。

しかし京介の暗示が効を奏し、腕をもがれた恐怖の体験は記憶の中でぼやかされていた。

美樹に残っているのはリンカーンに対するおぼろげな「思い出」だけなはずだ。

「そう、あの虎はセイレーンの共に生まれて育つ

護身獣らしいんだけど、何者かにあんな・・・

制御効かないような状態にされちゃったらしく・・・

それで竹来さんを襲った・・・」

「あのセイレーンの女の人はどうして・・・？」

「・・・そんな状態のリンカーンを止めるべく戦って・・・

相討ちに・・・」

「・・・そうですか・・・」

スプーンを持つ美樹の手が止まった。

「ごめんね。食事中に相応しくない話題だよね」

京介の皿はキレイに空になっているが美樹の皿にはまだ1／3程残っている。

こんな話題では食欲も失せてしまうだろう。

「ごめんね。俺デリカシーなくて・・・」

「いえ、とんでもないです。」

今日はこういった話をするために来たんですもの」

大丈夫ですよ、といささか無理しているのが解る表情で笑顔を作りスプーンを動かし始める。

どうやらこの子は相手に気を遣わせない為に気を遣う子らしい。

「冷めちゃってない？」

「猫舌なので丁度いいです」

やっぱり猫舌なんだとほほえましく思った。

「いきなり話題変わって悪いんだけど、

さっき言っていた塾のバイトって長いの？」

食事中に相応しくない話題を無理矢理押しやった。

「いえ、春休みだけです。」

一応今度の夏休みも雇っていただくことになってますが。

岡見さんは塾の先生しているんですか？」

「塾じゃなくて家庭教師なんだ。」

でも講習で予備校講師の授業見学とかあるから

一応理由になるかなあと」

「その塾、同じ大学の方いなのでバレないと思いますよ」

「じゃあ塾つながりってことで」

バイト先にこんなコいたら確かに楽しいかもしれない。

「私も友達に一緒のとこ見られたらそう言いますね」

バイト先の先輩、よりも彼氏・・・は無理にしても友達になれたらいいな、

素直にそんな事を考える。

「それと・・・そうだなあ、一例として俺の軌跡を話すね。」

俺、戦後は大学へ入って大学院行って修士・博士課程を終えて・・・

その後は留学したって事にしたり遠くの大学の助手になったってことにしたり・・・取り敢えずそんな事を繰り返してるんだ。

学生時代って外見変わらなくても取り敢えず

おかしくはないからね。

しかも大学で四年。院で最低五年は同じ場所に居られるし。

みんな卒業と同時にあちこちに散るからその時に名字を変えて

他の大学に行けばいいしね」

卒業してしまったらもうそれまでの知り合いとは会えなくなる。

そのせいか人付き合いが希薄かもしれない。

深入りすればするほどに別れも寂しくなる・・・慣れてはいるが

やっぱり寂しさを感じることは変わらない。

今はまだちゃんとは考えてないが美樹も大学卒業後

そうするかを考えなくてはならないだろう。

普通のOLになってもその会社に居られる時間は限られてしまう。

「じゃあいくつもの大学に行っていたんですか？」

「そ。まだ全国制覇はしてないけれどね」

ちよっとおどけて言ってみた。

入学する学部は主に理系・・・コレは院への進学率が文系に較べ高いので

少しでも目立たなくするためだと説明した。

「あとね、結構多いのが生物系かな・・・」

やっぱり最初は自分の身体のおしくみとか知りたかったし。

でもね、医学部は入っても実習があつてすぐに辞めたんだ」

「どうしてですか？」

「実習で自分たちの血を採血して実験するクラスがあつたんだ。

一応は血液検査しても異常ナシだったりするけれど・・・」

周りが人体の専門家ばかりだとやっぱり

俺が人間以外だってばれそうで。

怖くなって辞めちゃった」

今でも毎年ある健康診断は戦々恐々だ。

たまに白血球値が高かったりする。

吸血鬼の異常なまでの快復力ともしかしたら関係があるのかもしれない。

「それだけ大学行ってるなんて・・・お勉強が大好きなんです」

ちよっとズレた発現にも感じるが京介に羨望のまなざしを向ける姿は何か良かった。

本当は食欲なんて失せていたかもしれないのにこにこしながら

オムライスを食べ終えて、運ばれてきたスフレを口に運んでいる美樹が愛おしく見える。

同情？ 罪悪感？

それもあるかもしれない。

もしも美樹と普通に学校で知り合っていたら深く知りたいと思うかわからないか？

「ま、竹来さんが当分のところ気を付けるポイントは一つ、傷の治りが早いだけ気を付けるだけかな」

いきなり色々心配させたり心構えを語っても疲れさせてしまうだろう。

食事を済ませ、車に乗り込み学校へ戻ろうと国道にでた。

ホントはもう少し遊びたい気もするがいきなり長い時間取らせるのも気疲れさせてしまうかもしれない。

ゆっくり安全運転を心がけながらハンドルを握った。

「岡見さんは今まで吸血鬼だとバレそうになったことがあるんですか？」

「あるよ。」

以前の同級生が教授になっていた時とか。

『昔似た友達がいたよ。』

そう言えばそいつもキョウスケって名前だったかな』

って言われたよ。本人だっちゅーねん。

でも・・・さすがに同じとは思わないよね。

もう20年前の同級生がまだ学生だなんて。

それと・・・もうずっと前だけれど・・・

刀で切られても動いてたら鬼だとか物の怪だとか叫ばれて・・・

さすがにその土地には居づらくなって

別の地へ移ったこともあったな・・・」

まざまざとその時の情景が浮かんでくる。

元同級生の年齢を重ねた重みのある顔、そして妻を娶り子を授かり・

人間としてのごく普通の歴史がただ羨ましく思えた。

そして・・・ずっと昔の京介を守ってくれたある女性を守りきることが

出来なかった苦い思い出・・・。

深紅の長襦袢に映える漆黒の長い髪、黒曜石の瞳、雪のように白い肌の感触・・・

様々な記憶が蘇った。

人間界に混ざり生きるようになってから幾人かの恋人が出来た。その中には伴侶として一族に迎え入れようと思った女性もいた。しかし……。

「それってずいぶん前なんですか？」

美樹の落ち着いた声が京介の郷愁を遮った。

「そうだねえ……まだ日本人が着物で生活していたような時代……って言って解るかな？」

「着物！？それで刀……岡見さんってホントに吸血鬼さんなんですね。」

「やっぱり長生きだと昔のレベルが違います」

美樹はまじまじと、運転する京介を眺めながらしきりに感心したように頷く。

「おいおい、ホントに吸血鬼「さん」って……と苦笑いしながらも

「真正正銘、ホンモノの吸血鬼さんですよ」

ちよっとおどけた調子で切り返した。

「ここで車を止め「じゃあホントかどうか教えてあげるよ」と

顔を近付けたら彼女はどんな反応をするのだろうか？

そんな悪戯心が頭をもたげた。

数日すれば回復するが、美樹に蘇生術をかける際、

大量の魔力を消費してしまったのでここ数年久しぶりに喉の渇きを覚えていた。

細い肩に手をかけ白い首筋に口付けしたい衝動を抑えた。

「……私も……」

「いつか人間じゃないってばれちゃうことあるんですかね……」
ぼそりと不安げな声が京介の悪戯心をせき止めた。

「……少しドライブしてもいい？」

「はい……」

「やっぱり不安なのだろう。」

京介自身は生まれつきの吸血鬼だが美樹は人間から転身したばかり

だ。

ずっと人間界での処世術をあまたの経験により教育されてきた京介とは

状況が全く違うのだ。

そんな不安定な少女に対して浮ついた感情を持った自分が少し恥ずかしかった。

吸血鬼の知り合いで人間の女の子を妻にしたヤツがいたな・・・

そのうち彼女に紹介してみるのもいいかもしれない。
平日の午後ということではほど混んでない道を20分程郊外に走らせる。

その間美樹はぼんやりと流れる景色を眺めていた。

しかしちらりと美樹に目を向けると気を遣ってかこちらに穏やかな笑みを見せてくれた。

「着いたよ」

「ここって・・・？」

「この公園、少し歩くと奥に湖があるんだ」

郊外特有の森林の香りが気分を開放的にしてくれた。

「取り敢えず落ち着くこと。」

一瞬で傷を治すところとか言い逃れ出来ない

場面でも見られない限り何とでも言い訳できるから。

竹来さんならそんな状況になることはないと思うよ」

ゆつくりと木立の中を歩きながら口調も意識的にのんびりと話した。

「もしも何かあって・・・creatureだってばれそうになつたら・・・」

取り敢えず落ち着く。

頭の中で何でもいから歌を頭の中で流す。

もしも可能なら歌っちゃうのが一番なんだけどね」

思いもよらない方法に美樹はちよつと驚いたよう

「歌ですか・・・？何でもいいんですか？」

笑いながら問いかける。

先ほどの思い詰めた様な表情も気を遣って取り繕うよう笑顔も今は見えなかった。

「そ、何なら子供の頃歌った童謡なんかお勧めだよ。

どんな歌詞だったけ？って悩むから時間稼ぎにもなるし

取り敢えず目の前の状況から頭が離れるから少しは冷静になれるしね」

「そうですね。

じゃあ岡見さん直伝のリラックス方法を試してみますね。

試す機会が来なければそれはそれでいいんですけれどね」

「そうだね」

初夏の日差しと水辺の清涼な空気、そして木の葉擦れの音がゆったりとした気持ちにしてくれる。

「わぁ・・・お魚もいます」

水辺によると思いの外透明度の高い湖面には小魚の群が見える。

「あそこにいる鳥ってこの魚たち狙ってるんですかね？」

湖面に飛び出した小枝の上で用心深く狙いを定めている青い鳥を指さし

美樹は心持ち小声でいたずらっぽく微笑むと、ふと思い出したように

「岡見さんって・・・血吸うんですか？」

と問うてきた。

「え？・・・ええ・・・まあ」

今、目の前にいる女性に吸血願望持ったなんて事は絶対に言えない。

吸血鬼にとって血は必ず必要なものではない。

食欲・睡眠欲・性欲で言えば性欲に近いのだろう。

そのため、通常の吸血鬼は好ましいと思う異性の血を欲する。

「血吸つてるところを見られた事・・・ありますか？」

血吸っている所・・・かぁ。

思い浮かべるとなかなか・・・

思い出すのも言うのものはばかられる様な状況なので。

「いやぁ・・・昔はまだ吸血鬼・・・に限らず魔物に対して

警戒が強かったからね。

でも今ならいちやいちやしている様にしか見えないから」
答えになってない答えをする。

「あ、キスに紛れて貧血にしないようにもらうのがコツ
ってやつですか？」

「そうそう、詳しいね」

「昔なんかの小説で読みました」

吸血鬼を題材にした小説・映画は多いからなあと苦笑する。
しかし彼女は・・・どんな状況を思い浮かべてるのか？
ちよっと心配になった。

・・・ま、キスくらいならいいかな。

「血吸ったら相手も吸血鬼になるんですか？」

「いや、吸血鬼の血を体内に入れない限り

いくら吸われても吸血鬼にはならないよ」

キメラの血ってどんな味するんだろう？

そんな思いも頭をよぎるがこんな郊外に連れ出して襲ったら
はつきり言って悪人だろう。

「そうなんですか・・・じゃあ人間と共生できるんですね・・・」

ぴちゃん、先ほどの鳥がハンティングに成功したらしく、
くわえた魚を器用に飲み込んでいく。

「creatureの中でも悪魔族、吸血鬼族、人狼族そして夢魔
族が主流なんだ。

悪魔族は正式な契約でのみ人間と取引する・・・

つまり不用意に人間を傷つけることはない。

人狼族は人を食餌としないし夢魔族は吸血鬼と同じで
殺さずにして精気を得ることが出来る・・・

希少種となったセイレーン族やガーゴイル族は・・・

人を食い殺すってことでやはり迫害されほぼ絶滅状態と
なっている」

これが自然淘汰ってやつなのかなあと独り言のようにつぶやく。

「でも反対に言えば人間に危害を加えない竹来さんならば
迫害される理由もないし・・・上手く共生していけるよ」

美樹の不安はおそらく「人を傷つけなくては生きていけないのでは
ないか？」と

おそれているからだろう。

大丈夫だよ、もう一度言ううと美樹はにっこりと笑って

「ありがとうございます。」

すみません。気を遣っていたいちゃって・・・」

気を遣ったこっちが気を遣われてしまった。

「でも・・・なんかキレイな空気吸ったら気持ちがすっきりしました」
んーっと手を伸ばしながらのびをする。

きらきらした日差しの中でミントグリーンのニット、
白いスカートの美樹は全く「魔」を感じられないほど生に溢れてい
る。

この女性の中にcreatureの血が流れているのが不思議に思
える。

「もっと暑くなったら綺麗な川で水遊びとかしたいですね」

「そうだね、暑くなったら行こうか」

何かもう深く考えなくていいような気がする。

きつと彼女なら、一緒ならば不安になることもないだろう。

楽観的な思いだけが初夏の日差しのなかでは似つかわしいように思
える。

9. 偽りの日常（後書き）

京介の過去も少し書いてみました
感想いただけるとありがたいです！

10. 高校生（前書き）

合コンなんて最近してないなあ・・・

10. 高校生

「先生。来週の授業、水曜か金曜に振り替えてくれない？」
美樹とのしばしの時間の後、彼女を学校まで送り届けその足でバイトに向かった。

毎週木曜日、午後7時からのバイトで家庭教師をしている。

教えるのは数学、生徒の曙 昇迦は都内有名進学校に通う高校2年生で

出来はかなりよい。

覚えが良く頭の回転も速いので応用も利く。

教えやすい生徒なのだが、いかんせん、いわゆる現代の高校生なのか遊び過ぎな感がある。

美少年芸能事務所にいても通用しそうな顔立ちで頭もそこそこ、しかも運動神経も良いらしく・・・要は何でもソツなく出来る
ある意味でいえばいやみやつだ。

もちろん女の子にもモテるのでちよくちよく女の子からの電話で授業が中断される。

あまりにひどいので「授業中はかけるなって言っておけ、もしくはメールにしてもらってくれ」と言ったほどだ。

その授業中、昇迦の部屋で問題集を解かせていたら突然言い出した。
「え？何かあるの？」

数学の参考書に目を通しながら次のテスト対策問題を作ろうとしていた

京介は顔をあげた。

「合コンなんだよね」

と悪びれずに言う。

おいおい、家庭教師の授業をずらして合コンかよ、高校生！
「聖慶女子とだし、はずせないでしょ。」

だるそうにシャープペンを指の上で回しながら頬杖を付く。

そのノートをちらりと見ると8割がた問題解くのは終わっている。しかも正解率はほぼ9割・・・相変わらず出来が良い。

「理由が合コンってのはちとどうかなくって思うけど、

ま、サボるんでなく振替えだからその姿勢に免じて許そう」

さ、続きをやる、と指でノートをとんとん叩き注意する。

「先生は合コンとかしないの？」

すでに数学の問題に飽きたのだろう。

話を振ってくる。こうなるともうやる気がうせている証拠なので

しばらくは話して気分転換しないと勉強なんて見向きもしくなくなる。

「うーん・・・忙しいしねえ」

「ふーん・・・彼女いないみたいだし、先生顔とか悪くはないのにね
」

値踏みするかの様に京介をまじまじと見る。

「聖慶女子合コン来る？」

「って女子高生だろ？犯罪だよー」

「えーっいいじゃん。たまには女子高生も」

「無理むり、年の差結構あるじゃん。お前だって大学生と付き合える？」

「いいじゃん。女子大生」

・・・おいおい、何モンだよ、こいつ。

「・・・参考のため聞かせてもらいたいんだけど・・・お前、
今まで付き合った中で一番上っていくつ？」

聞くのが恐ろしいが・・・

「うーんと・・・25歳のOLが一番上かな？」

10歳近く離れてるやん・・・

「どこで知り合ったの？」

それが気になる。

「ダチの姉貴」

・・・友達の親族に手出すなよ・・・

恐るべき子供達、とでも言おうか。

「可愛いコも来るよ。先生ってどんなコ好み？」

「うーん、優しい子かなあ」

「ってかさ、そんなのみんな言うじゃん。見た目は？」

「見た目？・・・そうだなあ・・・色白で髪はさらさらで・・・」

可愛い系でお行儀が良くてちよつと天然で・・・と思い浮かべているうちに

美樹の顔が浮かんでくる。

（何でここで竹来さんがうかぶんだ！？）

そりゃ可愛いとは思うけれど・・・心の中で苦笑する。

「それで？」

昇迦の声で我に返る。

「え？そだなあ・・・それでやっぱり優しいコかな。」

「ふーん・・・そんなコくるかもよ？それとももう狙ってるコいるん？」

狙ってるコ・・・とは言えないよな。

だって・・・殺しちゃったコだし・・・。

「んー・・・そだなあ・・・気になる子は無理めだからなあ」

素直に答える。

狙うとかそんな大それたモンではなく、素直に「気になる子」だし。

「彼氏いるの？いいじゃん、奪えば。」

そりゃお前ならやりかねんがな、と思う。

俺は・・・もしも竹来さんに彼氏がいたらどうしていたのかな？

いや、どうもせんだろう。

「うーん・・・いいんだよ、そのコは何もしないから」

「先生って消極的だなあ。彼氏いようが何だろうが行動起こさなきゃ。」

人生なんて一度きりだよ。」

・・・まさか年下にそんなこと言われるなんて、と笑ってしまふ。しかも確かに人生は一度だけでもこの一度が永遠に続くし・・・

「そうだなあ。ちよつとは誘ってみようかなあ」

「そうそう、そして押してもダメなら押し倒せってね」

「そりゃお前やろ」

そうゆうヤツだった・・・こいつは・・・。

遊び人めっと思う。

美樹には絶対近づけたくないタイプだ・・・ってやっぱり俺、かなり竹来さんのこと気になってるんだなあ・・・妹が出来たみたい？って違うか？

「でも俺さ、今はマジなんだよね。その聖慶女子のコで狙ってるコいてさー」

超真面目でお嬢様だから普通は飲みなんて絶対来ないコなのにいろいろ頑張ってみたんだよねー」

「へえ、お前でも真面目になる事あるんだ」

「つたりまえじゃん。ってかそのコ・・・一島桜ちゃんって言っただけど」

もし付き合えたら俺、超真面目になるっすよ」

今まで見たこと無いような昇迦の照れ笑いを見て

どんなにもてる奴でも本気になりうる相手がいるんだな

と悪くない後味を残しながら今日の授業を終え、曙家を後にした。

11. 講演（前書き）

講演内容も考えたのですがあまりに本筋と関係ないので割愛しました（汗

11. 講演

美樹に対しては「気になる子」確かにこの言葉がぴったりだろう。こういった意味で「気になる」かは別として・・・

翌日、研究室で自分のパソコンを立ち上げたら旧友からe-mailが届いていた。

旧知・・・相手も人間ではない。

それこそ何百年以上も前からの友人だ。

e-mailで連絡を取り合うcreature・・・時代は変わったものだ。

『今週末土曜に都内で講演をするから来ないか？』

少々形式張ったビジネス英語で書かれている。

「今週末ってよりも明日じゃん。」

しかも、もちろん麗しい女性同伴で？・・・まったく・・・」

友人の相変わらずの物言いに苦笑しながら講演会場となる

都内ホテルの地図とチケットとなる画面をプリントアウトする。

「麗しい・・・ねえ・・・」

普段なら一人で行くところだったが昇迦に焚きつけられたからだだろうか？

俺以外のcreatureを紹介するのも悪くないし

「確か経済学部って言っていたよな・・・」

講演内容は「知的所有権に対する認識変化」やら「市場拡大と文化」と

経済学部に対応しい内容に思える。

こじつけ？言い訳がましい？

美樹に聞いた携帯のアドレスを宛先に打ち込みながら考える。

「ま、深く考えても仕方ないか」

おはようございます。岡見です。

急ですが明日土曜日に予定ありますか？

もしも良かったら友人が講演するのですが一緒に行きませんか？
講演内容の主だったテーマは知的所有権などです。

岡見 京介

相手は携帯から見るのであまり長くない方がいいかな？

改行入れない方がいいかな？

と色々考えてしまったが取り敢えず簡潔を心がけて文を作り誤字脱字を

チェックし送信した。

急な話なので断られるだろうし・・・期待半分でいよう、と

昨日作りかけだったグラフを開き手を加えていると

You got a mail!

メール受信の表示が現れる。

「早い・・・さすが・・・」

京介の部屋で手早くメールをうっていた姿が思い出される。

おはようございます。もう学校なんですか？早いですね。

明日空いてますよ○（へーへ）○是非ご一緒させてください！

顔文字なるものが入っているメールは初めてだ・・・と新鮮な驚きを覚える。

返事早いね（笑）じゃあ土曜日の朝、迎えに行きますね。

最寄り駅と家とどっちがいいですか？

送信をクリックしながら携帯電話でのチャット状態メールは難しいが
使い慣れたパソコンなら難なく出来るなあと考えてしまう。

この分なら携帯電話のメールも慣れれば出来るのかもしれない。

You got a mail!

）
どちらでも構いませんよお（岡見さんがわかり易い方で（＜―＞）

むしろ私が学校の方まで出ますよっ
講演って難しいですか？

メールの文なのに美樹とまるで話しているような錯覚を覚えるのは
敬語ながらも小文字や顔文字を使って受ける印象を和らげているか
らだろう。

これが女性の言語能力ってヤツか・・・妙に感心してします。

誘ったのはこっちなので・・・

じゃあお家まで迎えに行きます。朝9時でいいですか？

内容はちよっと高レベルかもしれないです。学生向けではないの
で・・・

俺も専門外なので一緒に悩みつつ聞きましょう。

結構楽しいかもしれない。

You got a mail!

ありがとうございますm（　）m

ではでは、土曜日を楽しみにしてます！

楽しみなのは京介の方だ。

俺って結構単純だな・・・とひとりごちしながら続きの作業をこな
していた。

約束の時間より少し早くに美樹は家の前に出てきた。

家より少し離れた所で停車し待っていた京介はその姿を確認しエン
ジンをかける。

「おはようございます」

朝は苦手ではないらしい、華やいだ声で挨拶する姿がすがすがしい。

「おはよ、ちょっと道混むかもしれないけれどもいい？」

「はい、大丈夫ですよ」

するりと助手席に乗り込みながら笑顔で答える。

休日の朝はみんな寝坊気味なのか？

会場となる都内ホテルまでは思いの外、順調に着く。

受付を済ませ要項をもらい席に着く頃にはもう開演5分間だった。

「こゆところ初めてです」

まだ辺りはざわめいていたが美樹は小さな声で京介に耳打ちする。

その秘密めいた話し方がちよつとくすぐったく思い

照れ笑いを浮かべたい気持ちになる。

「俺も・・・経済系は初めて」

聴講者の多くはビジネスマン・ウーマンと一見してわかる出で立ちだ。

しかし京介の斜め前に座っている初老の紳士は臨床系医学雑誌を広げていることから医者もしくは製薬関係の人間だろう。

他にも講演者の妻らしき上品な婦人が何やら関係者に挨拶をしている。

そんな中で圧倒的に若く学生風の二人は非常に目立った存在だ。

京介とさほど年が変わらなさそうな青年も数名居たが、

会社の命令できたのだろうか？ スーツ姿でだるそうに要項に目を通している。

「ちよつと場違いですか？ 私・・・」

確かに美樹は大人しめに見えるベージュのワンピースを着ているがその姿はどう見てもOL風とは言い難い。

それでも上品な初々しさがあるのでそんな場違いには映らないだろう。

「大丈夫だよ。俺の方がスーツ着てくりゃ良かったって後悔してる。

ジムに客層聞いておけばよかったよ」

「ジムさん・・・4番目に講演なさるんですね。えっと・・・」

知的所有権と企業の関係・・・？わ、難しそうです・・・」

要項から視線を外し京介に向かい

「講演しちゃうお友達さんがいるってすごいですね。同じ年ですか？」

と真顔で質問してきた。

このコはやっぱり俺が吸血鬼だってこと忘れてるのかな？

だから、creatureは必ずしも外見年齢≡実年齢じゃないんだって！

内心思いながらも

「年はヒミツ」

と冗談めかして、さして面白くもない茶化しをいれた。

ただいまより・・・

定型通りのアナウンスが講演開始を告げる。

講演は日本語の演者ならば英語の、

英語の演者ならば日本語の同時通訳が付いていた。

1／5程を占める日本人以外の聴講者に対する配慮だろう。

講演内容は非常に高レベルで要項がないと何を言っているのか、

すらわからない程だ。

字面を眺めやっとなんとか意味をつかめるような経済用語は理系畑にいる

京介にとっては睡眠薬変わりになりそうだ。

しかし美樹とジムの手前寝るわけにはいかない。

そのうち、本腰を入れて聞いているウチに結構面白くなってしまい
気が付けば要項にメモをいれながら本気で取り組んでいた。

3人の講演が終わり10分間の休憩になる頃にはすっかり肩が凝ってしまった。

「ん・・・肩凝りました」

美樹も同じだったのだろう。

軽くその場で伸びをしながら京介に笑顔を向ける。

「次がお友達さんですね」

「だね。なんとか寝ないでここまでこれたよ」

「私입니다。もしも日本語訳がなかったら絶対に寝ちゃってました」
「経済学部なの？」

「所詮は大学生ですから」

美樹はちよつと肩をすくめて欧米人風の仕草をまねた。

そんな姿がなんだか愛らしい。

あ、始まるみたいです。

壇上に長身の男性が登場するのを見て美樹は耳打ちする。

旧友は京介の知らないNYの若手敏腕弁護士の顔をして滑舌のよい英語で講演を始めた。

12. ジム（前書き）

慣れないコトしたら疲れました・・・

12. ジム

講演会後の懇親会は同じホテルの会場で行われた。

ざわめく会場の中を銀盆を手にしたボーイが泳ぐように歩き、京介と美樹にも色とりどりの飲み物を勧めてきた。

「何飲む？ お酒飲んでもいいよ」

「お酒あんまり強くないんで」

と美樹はオレンジジュースを手取る。

「そうなの？ 俺も運転があるから」

と美樹に習い、オレンジジュースを手取る。

本当のところ吸血鬼は酒には酔わない。

アルコール分解を行う酵素の働きが人間の数倍、数十倍だからだ。しかし美樹の前なのでここはいい子ちゃんぶってみた。

「岡見さんのお友達さん、すっごく格好良かったですね」

「それは・・・ね。まあ」

ジムの経歴からすると二枚目で当然というか・・・

「んと、竹来さんって映画詳しい？」

「映画ですか・・・」

美樹がちよっと考え込んだその時

「Hi, Kyosuke！」

先ほど壇上で講演しており、今話題に上っていたジム本人がシャンパングラス片手に近寄ってきた。

「ジム。ちようど良かった。今話に行こうと思ったところだよ」
そんな京介の歓迎にジムはグラスで応え、その興味はすぐに隣できよんとしている美樹に移ったようだ。

「Hello. Miss. Yamadeshiko. My name is James Anderson. Call me Jim.」

「How do you do. Mr. Jim. I'm not

Yamatonadeshiko.

My name is Miki Takaku.

「おい、ジム。いいから日本語で話せよ」

「いや、たまにはガイジンっぽくしてみたくてね」

美樹、京介にグラスをかかげもう一度挨拶する。

「日本語お上手ですね」

全く英語訛りを感じさせない流暢な日本語だ。

「ミキの発音も綺麗だよ」

ウインクしながらさりげなく美樹の腰に手を回してくる。

「で、この日本でならセクハラになりかねない男・ジムの

どこかで見たことない？」

「え……」

もう一度じっくりとジムを見るが思い当たるようなないような・

「The Moon in Daylightって映画知ってる？」

こころなしジムの話し方を真似、悪戯っぽく京介が美樹に視線を向ける。

「あっ！The moon in daylightのジム・グレイブス?!」

目をまん丸と見開きながら美樹は驚きの声を上げてしまう。

自分でも思わず大きな声を出してしまつて「しまった」と

思ったのか辺りを見渡したが幸いざわめく会場内で

こちらに注意を向ける者はいなかった。

「そう、ホンモノの狼男がスクリーンで狼男を演じるのも一興ですよ？」

おどけた調子でジムが肩をすくめて見せた。

「あら……でもジム・グレイブスさんはもう……」

「撮影中の不慮の事故により死亡、享年41歳。だね、表向きは。

でもその実はもう俳優業としてはthe moon in daylightで

区切り着いたから引退したくなってね。

今はN・Yの企業おかかえ弁護士ジム・アンダーソンとして駆けずり回ってる日々さ」

それにしても・・・白人の年齢を推し量るのは難しいが、どう見てもジムは二十代後半・・・上限をあげても30そこそこには見えない。

「ある程度の魔力があれば外見年齢なんてどうとでも好きにできるから」

美樹の疑問に対して京介が答える。

「だから少年にも中年にも老人にもなれるってワケ。

竹来さんも当分は今の外見から変わることは出来ないけれど

その内、経験を積みば好きな年齢になることが出来るよ」

その「その内」とは数百年を指すが・・・その事は伏せておく。

「あ・・・それで」

大きな瞳でじっとジムを見つめる。

そんな美樹を観察しながらジムはある事に気付いたらしい。

「Zeigten Sie ihr die Seite Ihrer
es inneren Wolfs？」

（君は彼女にオオカミの一面を見せたかね？）

「ま・・・まさか・・・だってね」

思わず声がうわずってしまふ。

ちらりと美樹のほうを見るとさすがのミス・ヤマトナデシコも

ドイツ語は解さないようだ。

「はは、京介は相変わらずMonsieur（紳士）だな」

ドイツ語やらフランス語やらを交えた会話に美樹はきょとんとして
いる。

血を啜るにしても肉を喰らうにしても・・・

我々魔族は他人と交わってない身体を好む。

悪魔族の生け贄にはいたいけな少年少女を用いることも有名だし、
吸血鬼が処女の生き血を求めるのもおなじみの設定である。

敢えて考えないようにしていたが美樹はまだ男と深い付き合いをし

たことがない。

それは・・・つまり・・・

（襲いたくなったらどうするんだよ）

非常に吸血鬼としてはそそられる対象である。

（そして男としても・・・）

当然魔族としての嗅覚を持つジムもその事に気付いてるのだろう。

「Miss・Miki、こんなつまらない男なんかやめて

私にエスコートさせてくれないかな？

東洋の真珠と出会えたこの奇跡を

今宵伴に祝わせてはくれないかな？」

ご丁寧に美樹の手をうやうやしく取り、厳かに口付けまでする。

さすが元ハリウッドスター・・・いささか芝居かかっているとはいえ

一人の女性をうっとりさせるのには十分だ。

美樹は困ったような笑みを浮かべながらもまんざらじゃない様子だ。ちよっと・・・面白くない？

「はいはい、講演者様がこんな目立つ所でナンパはマズイんじゃない？」

「なんだ？妬いてるのかな？京介は」

「なっ・・・」

なまじ当たっている気がするからタチが悪い。

でもそこは大人、表情にだすことなく

「何言ってるんだよ。フられるお前に同情してるだけ」

笑いながら茶化した。

「じゃあ、ミキ。いつでもここに電話してくれ。

いつだって君の側にかけてつけるから」

名刺を差し出し「何なら今夜にでもね」と美樹の頬にごく自然にキスをして

じゃあ、と手を振り会社の仲間らしきグループに合流していった。

「日本語お上手ですねえ」

にこやかにジムを見送りながら美樹は感嘆する。

「竹来さんの英語もなかなか・・・もしかして帰国子女だったりする？」

簡単な挨拶だけとは言え、ネイティブにいきなり話しかけられて臆せずに返事が出来るのはなかなかだろう。

「いえ、英会話の授業を学校で選択していただけです」
はにかみながら答える。

この娘には真面目な大学生なんだな、と改めて感心させられる。

「にしてもThe moon in daylightって有名なの？」

「はい。もう10年近く前の映画ですが色々な賞も取りましたし」
旧友の代表作それも主演映画にも関わらず全く持って内容を知らない。

まあこれはジムが京介の書いた論文を読まないのと一緒に？いや、違うか。

内容は人狼族の孤独な王子が人間の町娘と恋に落ちるがやがて町娘は流行病に冒されてしまう。

人狼族として強力な魔力を持っているにも関わらず人狼族への転身を頑なに拒む娘の前ではなす術なく日に日に弱っていく姿に

王子は心を痛めると同時に命の尊さを学ぶ・・・そんなストーリーらしい。

少々ありきたりな感はあるがそこはハリウッド映画がハリウッド映画たる所以なのだろう。

「すっごくキレイですよ。」

中世のドレスとか美術がうっとりする位キレイなんです」
「もしかして・・・ジムのファンだったりする？」

「いえ、素敵だなあとは思いますがすけれども。」

どちらかと言うと町娘役のシルビア・メルヴィルのファンなんです」

そんな言葉を聞いてほっとしてしまう自分が何かおかしい。

「何かジムがその映画を最後に選んだのがわかるような気がするよ」その孤独な人狼族王子と自分にどこか重なる部分があったのだろう。役者にとって「役」を演じるのは良いが現実とリンクする姿を劇場で演じることは役の中で裸になるよりも自己をさらけ出す作業なのではないだろうか？

だからこそジムは全身全霊で王子役を演じた。

その結果は最高のものと評価されそしてジムは・・

ジム・グレイブスはハリウッドという舞台を降りたのだろう。

「でも・・カーアクション中に車が炎上してジムさんは・・」

「ま、creatureにとって人間の死を演じるのはたやすいからね」

表舞台から派手に退却しジム・グレイブスは永遠のスターとなった。艶やかな幕引きだろう。

そして次の人生をまた演じている。

若手敏腕弁護士ジム・アンダーソンとして。

「同じジムで顔も同じでも年齢が20近く離れていたなら

誰だって本人だなんて夢にも思わないからね。

せいぜい親戚くらいにしか思われないだろうし」

creature が人間社会の中で生きていく場合、ファーストネームは変えないがファミリーネームを変えて生活していることが多い。

京介も今は岡見姓だがその前は長山、その前は小室・・・

と様々な姓を名乗ってきた。

たまに自分が今なんてフルネームか忘れてしまいそうになる。

「私もそのうち名字が変わるんですかね」

実感なさげに美樹がつぶやく。

「そうだね・・」

何と言っていいのか言葉が見つからない。

「名字って結婚以外でも変わることあるなんて想像してませんでした」

にここにこしながら言う美樹はなんだか楽しそうだ。

このコは結構したたかでしたっけ。しているかもしれない。気に入った。

「すぐに変える必要はないだろうけれど考えておいてね」
笑いながら答えた。

「そろそろ帰ろうか。最後までいても仕方ないし・・・」

「そうですね。あ、ちょっと化粧室行って来てもいいですか？」

「いいよ、じゃあロビーにいるから」

化粧室の鏡がいつもよりも大人びた美樹を映している。

レストルームとはいえホテルの照明らしく柔らかな灯りは女性を美しく映えさせる計算がなされているのだろう。

鏡の中の見慣れない自分に少し気恥ずかしく思いながら口紅を引き直した。

振り向きざまに後ろ姿を確認して化粧室を出ようとしたら

「きゃっ・・・すみません」

出会い頭に若い女性とぶつかりそうになってしまった。

「すみません」

慌てて顔を上げると美樹よりも10センチ近く高い位置に美しい顔がある。

プラチナブロンドを上品なアップスタイルにし、ベージュのスーツがその瘦躯を包んでいる姿はまるで外国の雑誌から抜け出した様だ。

「大丈夫よ。こちらこそごめんなさいね」

発音に外国訛りは全くなく、その声は女性アナウンサーのようによく通り耳に心地よい。

同性ながら何故かどぎまぎしつつ美樹は会釈しその場を離れようとした。

「・・・」

「え？」

何かを話しかけられた気がして振り向いたが

もうブロンド美人はそこには居なかった。

今、お姉様？と聞こえた気が・・・

でもヘンよね。聞き違いかしら？

しかし美樹は知らなかった。

その美人の口からでた言語は古代セイレーン語で決して人間では聞き取れない

周波数で発せられていたことを・・・。

その意味を解したことはすなわち、美樹の中のセイレーンの血が僅かながらも美樹を人間以外の生き物へ変化させたことと同意だった・・・。

12. ジム（後書き）

ドイツ語間違っていたら教えてください（ぺこり

13. 疑惑（前書き）

バーバントール飲んでみたいですねえ

13. 疑惑

首都高速を抜け横浜線に乗った。

流れる夜景たちはほんの百年前には想像だになかった風景だった。Creatureは暗闇によって視界が悪くなることはない。

人間よりも視細胞の桿体も錐体もその量が格段に多いのだ。

よって暗闇を照らす「灯り」という発明を必要としなかった。

また、免疫能力も自己回復能力も人間のそれとは較べられない程度に人間を発達させる起動力となっている戦争もcreate

ureにとっては

純粹に魔力・腕力を使ったシンプルなものなのでそれ故に

科学が発達することもなかった。

必要は発明の母とはよく言ったものだ。

人間はその脆弱な身体を補う為に医学・科学が発達してきた。

一人では弱く食物を得るのも困難なので徒党を組み文化文明を築いていた。

種族としてどちらが優れているかはわからない。

しかし自然淘汰の意味では地球は人間のモノとなり

creatureたちは魔界に追いやられていった。

それが答えなのだろう。

美樹とお茶をした後に家まで送りそのまま、また高速に乗った。

ジムの宿泊ホテルは、夜景を楽しむのには十分だが都内から車で行くにはいささか不便な横浜湾岸にあった。

「なんでまたこんな辺鄙な場所を選んだんだ？」

「俺が選んだわけじゃないよ。」

顧問している会社の系列だから仕方なく・・・ね」

窓からは横浜のきらびやかな夜景と黒い海の姿が一望できる。

「・・・人間はすごいな・・・」

高速道路で想ったことを改めて口にする。

「そうだな、こっちの便利な生活に慣れると魔界に戻るのが億劫になる」

ネクタイを取ったジムが昼間よりも幾分疲れを伺わせる表情で返す。

「しかし豪勢な部屋だなあ・・・さすが敏腕弁護士様」

「日本の大地主様が何言ってるんだよ」

「昔住んでいて使わない土地を貸しているだけさ・・・」

「日本各地に土地持ってるんだろ？」

「まあね、昔は一カ所に長くは居られなかったし。」

「今も一カ所にいるのはせいぜい10年くらいだな」

「まだ大学渡り歩いているのか・・・京介は勤勉だよなあ

俺はスクールを早く出たくて仕方なかったよ」

「実験楽しいしね」

変わらないな、京介は、と肩をすくめてルームバーのキャビネットを開け

「バーバンクールあるけれど飲むか？」

中を物色し京介の好きなラム酒をだしてくれる。

「ルームバーまであるとは嫌みだなあ・・・じゃあ、いただくかな」

「生憎良いライムは手に入らなかったんだが」

「良い酒はそのままでも十分だよ」

「じゃあ俺はブランデーにしようかな」

ホテルのルームバーにしては酒の種類もグラスの種類も悪くはない。

ジムはバースペースでオールドファッション・グラスに

ロックアイスとラム酒を自分用にブランデーグラスを用意してくれる。

「飲酒運転は日本でも罪になるんじゃないのか？」

勧めておいて茶々を入れてきた。

「身体の解毒機能にがんばってもらうさ」

「事故って裁判になってもお前の弁護はしてやらんからな」

そして思いついたように冗談めかして

「ベッドルーム二つあるから泊まっていくか？」

カチンとグラスを合わせる澄んだ音の後でジムが続ける。

「男と夜景の見えるスイートルームに泊まる趣味はないなあ」
苦笑いしながら軽口をたたきかえす。

「ははは、俺もだよ。じゃあミキとなら歓迎かな？」

「まあね、彼女がOKしてくれたらね」

素直に言う。

そんな京介をジムが意外そうに

「へえ、珍しく否定しないんだな」

「まあね」

グラスをくゆらせながら京介を観察しているようだ。

「それにしても・・・彼女・・・何のキメラなんだ？」

「さすがにキメラだってことは解っても何かはわからないか・

セイレーンだよ」

「へえ・・・ずいぶんとレアな材料をゲットしたんだな。

話しはきいたことあったが初めて実物みたよ。

・・・にしてもどうしてまた？」

ジムに話して不都合になることはないだろう。

京介はかいつまみながらリキュスカの強襲、乱心したリンカーン
そして不注意により美樹が殺されたことを話した。

「それで・・・キメラならば眷属として管理さえすれば
妻として娶らなくてもいいからな・・・」

その言葉の裏に京介の過去の女性たちを思う節があるか否かはわか
らない。

しかしジムは遠くを見るような瞳を黒い海に向ける。

「お姫様が目覚めたらそこには選択権が全くなく旦那が決まってい
ました、

なんていやだろ」

「死んじゃっているよりはいいんじゃない？」

「究極の選択だなあ・・・まあ、あと一番の理由は

彼女を・・・普通の女の子を・・・

俺みたいに人間を食す生き物にしくなかつたんだ」

美樹の愛らしい唇が人間の首筋に食らい付くところなんて考えられなかった。

本来ならば普通の女子大生としてこの後、就職活動に悩み

OLにでもなつて適齢期になつたらどこかの男性と甘い結婚をし、数年したら郊外の家で可愛い子供におやつを作る優しい母に・・・と普通の人生を歩めるはずだった。

それを偶然通つてしまった時に偶然、結界も張らずにcreature同士の

戦いをしてしまった・・・。

「京介・・・顔色悪いぞ・・・」

「血色の良い吸血鬼なんて茶番だろ？」

「全く・・・相変わらず血をあんまり吸つてないんだな・・・

それなのにあんな極上のキメラなんて作つたらそのうち倒れるぞ」キメラ作成にはかなりの魔力を必要とする。

その量は吸血鬼族長と格される膨大な魔力を持つ京介の身をもつてしてもなお

負担となる程だった。

「一人から死なない程度もらえばすむ事だろ？」

「もらう相手が出来たらね」

ラムの甘い香気を吸い込みながらジムから目をそらす。

「あのこは・・・美樹はどうなんだ？」

「殺しちゃったうえに食餌にするなんて胸が痛むよ」

「恋人になるまで手出さないってことかあ・・・

全く、お前そゆところは変わったな」

まあ、悪くはない変わり方だがな。

ジムは小さな笑みを浮かべながらブランデーをすすする。

「で、ジム。わざわざ昔話するためだけに呼んだんじゃないんだろ？」

「・・・まあね。それだけだったら良かったんだが・・・」

ジムは大仰に肩をすくめアタッシユケースからノート型パソコンを取り出し起動させる。

キーボードの上をすべらかに動く長い指は典型的なホワイトワーカーの指だ。

何かを打ち込んだ後、ジムはモニタを京介に向け切り出した。

「全米各地でここ1ヶ月間、3人の行方不明者がでた。

まあ、それだけじゃあ悲しい事にアメリカで特別な事件って訳じゃない」

モニタにはプロムの写真だろうか？着飾ったハニーブロンドの若い女性が

ぎこちない笑みを向けている姿、ヨットの上で撮ったと思われる少年の

あどけない笑顔そしてブルネットの髪を結い上げて緊張気味にカメラに向かってしている少女が映し出される。

「これがその被害者たち？」

「そうだ・・・みんな財界・政治界有力者たちの子供だ。

よって当初、この事件は身代金目的の誘拐だと考えられていた」しかし・・・言葉を切り、ジムはもう一枚の画像ファイルを開いた。

「彼女はジェシカ・ボンド。ある財閥令嬢だ・・・いや、だった」

「だった？」

画面にはストロベリーブロンドに深い青の瞳が神秘的な美少女が魅力的な笑みを浮かべている。

「彼女はフレミング男爵の屋敷で発見された。

頭部のみ・・・」

凄惨な話題にこの美少女はふさわしくなくないと思う。

彼女は魔界で悪魔族の有名な放蕩男爵になぐさみものにされた後喰い殺されたのだろうか？

しかしなぜ？

「彼女はフレミング男爵と契約したのか？」

「いや、調べでは彼女がオカルトに興味を持っていたとの証拠はでない」

「ジム、何で捜査状況まで詳しいんだ？コレは人間の事件なのか？それともcreatureの事件なのか？」

京介は核心をついた。

ただの営利誘拐ではなく魔族絡みなのか？

なぜ財閥令嬢が魔界の男爵の家で惨殺されていたのか？

こめかみを揉みながら考えを巡らせる。

「ズバリ言ってこの事件には人間も魔族も両方絡んでいると思う。

フレミング男爵を告発した男は吸血鬼族の自治体会長マクレガー伯爵だ。彼はフレミング男爵のパーティーで見慣れない人間がい

るのを知り独自に調べていた・・・

そして発見した時にはもうジェシカは・・・」

マクレガー男爵の正義感溢れる顔を思い出した。

京介は一族に転身させるでなく人間の妻を娶り、子をもうけたあのマクレガー男爵が結構好きだ。

前代の吸血鬼族長は転身無しでの他種族との婚姻を決して認めなかったが

京介の代ではそれを認めた。

一族の純血なんでものにそれほど価値があるとも思えなかった。

しかしおそらく前代は一族の純血うんぬんよりも混血によってより強力な種が

生まれることを危惧したのだろう。

確かにマクレガー伯爵の子息は知力・体力ともに素晴らしくその魔力も

計り知れない「何か」があったがそれをおそれ何になる？

吸血鬼族長という地位に何の執着もない京介はもしも

マクレガー伯爵Jr. 純一が京介に謀反を起こしたら喜んでその席を明け渡すだろう。

もっとも、今のところ親友の一人と言っても過言ではない純一が京

介と

仲違いする理由は見あたらないのだが・・・

「マクレガー伯爵の調べによると人間と生命のやりとりを承諾する

契約書は発見されなかったということだ。

そしてフレミング男爵は『この女は買ったんだから俺がどうしよう
と罪にならない』と

主張しているらしい」

「買った？人間および奴隷売買は異種族間協定によって禁止されている
のだろ」

「ああ、異種族間協定では・・・な。でもあの協定に批准していない
種族からの

購入にかんしての言及はない」

「批准していない種族・・・まさか・・・」

からん、グラスの中で氷が溶ける音が異様に大きく響く。

「人間がジェシカを売ったのか？」

14. 招待状

快樂殺人者は己のみが理解できる基準で被害者を選ぶ。

営利誘拐を専門で行う組織はその家族の支払い能力を見極めた上で犯行に及ぶ。

じゃあジェシカはどんな基準で選ばれた？

行方不明になっている3人も同一犯による犯行のか？

「弁護士っていうのは結構いろいろな捜査機関に知り合いが出来る職業だね」

パソコンをシステム終了しながらジムは眼鏡を机に置く。

もちろん、視力が悪いわけではなくただの伊達眼鏡だ。

「さっき見せた3人もジェシカも・・育ちも申し分ないし外見も美しい。

その上、みんな厳しい教育をなされた家庭で育っているので恋人もいないし

過去にもいたことがない。

警察はこのことから怨恨による殺人よりも営利誘拐の線で捜査を進めている。

しかし・・・俺たちの考えだと・・・」

「恋人がいたことのない『身体』ってわけか」

魔族が最もそそられる身体。他人と交わっていない神聖な肉体。

「生け贄にするも良し。食すも良し」

「その容姿からして慰み者にするにも最適って訳か・・・考えたくないな・・・」

しかも人間が人間を売っている？

魔族相手に商売する酔狂な人間がいるのだろうか？

しかも処女童貞で見目麗しいという共通項だけで魔族の犯行と決めるのは

少々根拠が薄いように思える。

ジェシカの例があるとしても、一連の事件と関係があると言い切れないだろう。

「しかし魔族にモノ売ったとして・・・対価は何で払ってもらうんだ？」

魔界には貨幣経済というものが存在しない。

原始的な物々交換の経済だ。

そんな種族相手に全うに商いができるとは考えにくい。

「それについても考えなきゃならない。もう一つ・・・」

今度は画像ファイルではなく数枚の写真をアタッシュケースから取り出した。

「他にも被害者がいるのか？それとも容疑者か？」

「どちらかと言うと後者寄りだ・・・」

京介にも関係ある結構面白い話だよ」

人狼族長・ジェームズは悪戯めかした笑みを浮かべカードをきるように

写真をテーブルへ置いた。

「こいつらは俺たちの偽物だ」

「偽物？俺たちの？」

写真は3枚、それぞれ一人ずつ写っていた。

「こいつが吸血鬼族長かな？」

金髪碧眼の薄倅そうな美青年を指さした京介の予測は外れてなさそうだった。

他、アッシュブロンドに冷酷そうな灰色の瞳をした筋骨隆々の男に経済誌の一面を飾りそうな壮年の紳士・・・いかにも「いかにも」な人物像だ。

「今時ハリウッドでもこんなチャチなキャスティングしないよ。

大体狼男ってのはもつと繊細な人種なのに何だ？この脳みそ筋肉は」

もちろん悪魔族長もこの紳士とは似ても似つかない。

こいつらはいったい何をしたいんだ？

俺たちの名を語って何の利点があるんだ？

「こいつらは俺たちの名を語って端金を使い人間界で生きている
下級魔族たちをリクルートしているらしい。」

欧州にいる人狼族の仲間から最近金で仕事を持ちかけてくる

「族長様」がいるとの報告があったんだ」

「どこかで聞いた話だな・・」

ま、俺の場合は吸血鬼族長様もセイレーン族長様もお目見えなかったが」

「まさかミス・セイレーンも吸血鬼族の族長様をリクルートするとは・・・」

不運だったねえ」

偽物人狼族長殿の写真とジムをまじまじと見比べるとなぜか
吹き出したくなってしまう。

唯一の共通点といったらそのプラチナブロンドくらいだろう。

「人狼族長様にはまだオフアーは来ないの？」

「まだまだだねえ・・・」

おそらく、京介も繁華街での魔犬退治がなかったらその存在を気付
かれることが
なかったのだろう。

魔犬の消滅前の死体から脳を取りだし情報解析をし、京介を知った
のだろう。

憶測の域を出ないが。

死体が塵化する魔物はいいが魔犬のような中途半端な魔物は面倒だ。

「そのリクルートに乗って内部調査出来たかもしれないかったな」
前もって知っていたらそんな選択肢もあっただろうが
刃向かってしまった以上、仕方がない。

「そのセイレーンは組織って表現をしていたのか？」

「いや、雇い主が興味を持ったとしか言っていなかった。

しかしあのレベルが単なる秘書となるとボディーガードの
レベルは相当かもな・・・」

インペリアの動きを思い出す。

「そこに名を連ねるかもしれないなかったんだから大丈夫だろ」

「どちらにせよ、そんな酔狂な集団が同時期に多数生まれるとは考えにくい。」

おそらく多国籍グループなんだろうな・・・」

アメリカ・欧州・・・そしてここ日本でも。

「日本での行方不明者は？」

「すまない。俺も日本の捜査機関にコネなくてね。」

でも誘拐事件などは報道規制が敷かれるから水面下では数件起きているかもしれない・・・」

どうやらジムはもう国を跨いだ誘拐組織があるとふんでいるようだった。

その根拠は？

これだけの判断材料でそこまで決めつける程ジムは夢想家ではない。それを付き合いが長い京介は十分に知っている。

「・・・ほかに何がわかつているんだ？」

京介の言葉に「そうくるところで思ったよ」と言わんばかりの表情で

「パタースン伯爵と面識は？」

「パタースン伯爵？」

人狼族きつての色好み放蕩伯爵の悪名は京介も知っていた。

しかしそれは前代の話。

いま放蕩パタースンは引退して爵位は似ても似つかない程に厳格な息子が継いでいるはずだ。

「どっちの伯爵だ？現役？前代？」

「前代の方だ。魔族紳士録にでてた方」

またずいぶん古い台帳の名がでてきた。

「ああ、知っているよ。もっとも直接の面識はほとんどないが・・・」

」
どこかのパーティーで見かけた記憶が少しあるくらいだった。

「その前代宛に招待状が届いた。差出人は人間。」

しかし差し出し方法は鷹の使い魔を使った魔族方式で・・・」

「前代は隠居しているから受け取れないんじゃないのか？」

「ああ、だからあの堅物現役伯爵殿の元にそれは届いた」

「・・・で、ジムに報告があがったわけか・・・」

一族内でのやっかいごとは大抵、族長か自治体会長に持ち込まれ
采配を振るわれるのが常だ。

「ま、見てくれ」

ジムが差し出した招待状は深紅の上質な和紙で出来た封筒に入っ
ている。

パターンソン伯爵殿

オークションのご案内

招待状は日時と場所のみ記されていた。

「これって魔界？しかも俺の古巣の近くだ」

もう数十年、足を踏み入っていない自分の館の事を思うと少し気が
滅入ってくる。

「そうだな、そう言えばアンナちゃんはまだそこにいるのか？」

「いや、もう自分の家に戻ってるいよ。こっちには連れてこれない
しね」

「以前は日本でも雇っていたじゃないか？」

「明治時代のお貴族さんならいざ知らず、

一介の大学生がメイド雇っている訳ないだろ？」

「なるほどね・・・」

長く世話役をしてもらっていたメイドのアンナともしばらく会って
いない。

「この招待状の差出人は・・・タキヤマ シュン・・・？どの種族だ？」
使い魔による配達、かかれている言語も古語に近いが魔族の文字で
かかれていたのでcreateureによるものだと推測する。

「人間だよ・・・おそらく・・・」

ジムの口から信じられない言葉がでる。

「人間？」

「ああ、おそらく。」

人狼族・吸血鬼族・悪魔族・夢魔族には現在タキヤマって名前の人物は存在しない。

尤も、マイノリティーな種族は解りかねるがね。

それにタキヤマシュンって名前の重要人物が日本には存在する・

」

ご丁寧に附せんを付けた日本の有名な経済誌をテーブルに出してきた間合いの良さは敏腕弁護士としての交渉慣れを伺わせる。

「定番と斬新の匙加減・二代目リーダーのバランス感覚・・・ねえ」
30歳前後の男の写真とともに見開きで特集されている記事を読む。
前代の急死によりその座に付いた滝山グループの若き会長の素晴らしい経歴と

現在の試みが好意的な視点で書かれていた。

「滝山瞬、32歳。独身・・・」

日本で電子工学の修士号を取得した後にアメリカへ留学。

アイビーリーグ校で経済学修士修了か・・・悪くないな」

滝山グループと言えば化学・製薬・重工業をメインに戦後発展し
今では銀行業務に参入するか否かが審議されている大企業だ。

京介のクラスメートの中にもグループ企業である滝山製薬や滝山フーズへ

就職活動している者も多い。

「その若き会長はアメリカ留学時代、

悪魔崇拝する秘密結社とコンタクトがあったらしい。

尤も深入りはしなかったみたいだね。」

ジムはこのプレゼンテーションのための資料一揃えを法廷での証拠提出かのように進めていった。

かなり滝山を犯人視している感がある。

しかし・・・やはり謎が多すぎた。

インペリアの守護獣リンカーンはなぜに乱心したのか？

彼女ははっきりと「何者かの術で正気を失わされている」と言った。正気を失わせる術はある程度の力を持った魔族ならば誰でもできる。他にリンカーンの状態で気になった事は？

あの時自分で手合わせしたわけじゃないので観察不足だったことが悔やまれる。

例え滝山がカルト集団と関わっていた過去があってもそれだけで魔術を使えるようになるとは考えにくい。

「・・・なんとも言えないな・・・」

確かに限りなく黒に近いグレーだが・・・」

研究生活が長いせい何か何事も明確に断言することの危険性を十分に承知している。

ジムもそんな曖昧な京介の答えをある程度は予想していたらしく特別不満を表すこともない。

「ま、取り敢えず・・・招待状もあることだし・・・
オークション行くか」

「潜入捜査ってワケか。まあ数百年前に現役を引退した前代パターン伯爵と

顔見知りとは考えにくいしな。

「・・・さっき魔族紳士録って言っていたけれど・・・」

先ほどのジムの言葉がひっかかる。

「そう、おそらく滝山はそれを見て招待状を出したと考えられる」
「根拠は？」

「他にも5名、正体不明の招待状ということで

俺の元やマクレガー伯爵の元に届け出があったんだ。

5人は悪魔族、夢魔族と人狼族と種族は様々。

パターンソン伯爵の例もあるがその他、1名もやはり現役引退している。

その共通点が・・・」

「魔族紳士録ってワケか・・・」

数百年前のリストに基づいて送られた招待状。

悪魔族の形式に則った配達方法。

そして誘拐された少年少女。

魔族をリクルートする偽族長たち。

そして何者かに不利な立場に追い込まれ死亡したセイレーンの美女・
・。

不可思議な断片が多すぎた。

確かにこれは開催されるオークションに行くのが一番てっとり早い
ように思える。

「オークションねえ・・・タキシードなんて久しぶりで気が重いよ」
取り敢えず行ってみるのは確定として、それまでに情報を集め分析
してみよう。

京介はまたこめかみを揉み思いの外やっかいな状況にいることを感
じた。

14. 招待状（後書き）

やっとお話が動き始めました。
長くなりそうな予感です。
感想いただけると幸いです。

15. リキュスカ(前書き)

新宿のホストさんたちを思い出しながらナガルはかきました。

15. リキウスカ

関東一の繁華街入り口にあるフランチャイズ系のカフェに一人の若い男が入っていった。

細身のダークスーツにノーネクタイ。加えてラフな無造作ヘア。

一目で堅気の会社員ではないと判る出で立ち・・・

典型的な繁華街のホストだ。

男は店内を見渡し奥のテーブルで見知った顔を見つけた。

「時間にルーズな人間はビジネスで大成しないんじゃないか？」

わずかに片眉を持ち上げ抗議の表情を見せ北欧系の美しい女性がホストに

冷たい一瞥を向ける。

「ごめんねーリキウスカちゃん。」

昨日指名が多すぎでさあ」

あくびを噛み殺そうともせずに大きく口を開く。

「それはよかったわねMr. ナガル。」

じゃあ本職だけに専念してくださいさっでも結構よ」

「俺さあ一応本職は大学生なんだよねえー。」

リキウスカちゃん。ホストはバイトお」

ナガルと呼ばれた男の間延びしたイントネーションが女・・・

リキウスカを苛立たせる。

銀髪美人のキャリアウーマンとホストの組み合わせ・・・

異色ではあるがこの街では大抵のことは「他人事」で

済ませて関心を持たれることはない。

「ってかさーマジでインペリアちゃんってヤラれちゃったわけえ？」

「昨夜メールした通りですわ。私も一昨日報告を受けたの。」

詳しくはまだ調査中らしいですけれど」

どうせ調査なんてしていないのだろう。

グループの内情は判らないが失敗した者へ労力を割くようにはみえ

ない。

しかももう自分でオカミの事は確かめておいた。

「へえーリキユスカちゃんってさあ超ボディーガードなんだよねえ
強そうなのに吸血鬼に負けてるのお？」

超ボディーガードとは何のことかしら？

グループ内のSクラスボディーガードのことだとは思うが・・・。

「Aクラスをリクルート中に死亡・・・確かに不思議ね。

そんなに強そうには見えないけれど・・・キョウスケ オカミ・・・

」

数枚の隠し撮りらしい写真を見る限りは、どこにでもいる優男にしか見えない。

「俺でも倒せそー。何か優等生っぽくね？」

「ふふ、インペリアは伊達でSクラスじゃありませんわよ。

正攻法でいっても私たちでは太刀打ち出来ないでしょうから・・・

まあ一週間してもリクルートへの糸口が掴めず、なおかつ

Mr. オカミが私たちグループのことを嗅ぎ回ったりしないので
したら・・・」

あきらめましょう、とりキユスカは写真をテーブルに落とす。

もしも昨日、オカミを実際目にしていなかったら真っ向勝負を
挑むところだったかもしれない。

予め、オカミの通う学校のメールサーバにアクセスし私信を盗み見
ておいた。

その時、大学と呼ばれる人間の教育機関の情報管理の甘さを
リキユスカは身をもって体験したのだった。

偽造した大学入構許可証を首から提げ、コンピューターの
ワークステーションを管理するアルバイト学生に

「ちよつとメンテナンスをしたいのですが」とIT企業の名刺を差
し出し

笑顔を向けるだけで学生は「どうぞ」となんの警戒心も持たずに
ホストコンピューターの席を空けてくれた。

外からアクセスするとどうしても痕跡が残ってしまう上にリキウスカには

それ程高度なコンピューターに関する知識があるわけではない。

しかし内部に入ってしまったえば学籍番号・氏名を調べるだけで私信を盗み見ることが可能だった。

また、おそらく浮つき慌ただしい雰囲気漂う金曜日を選んだ点と総合大学という性質上、多くの外国人留学生が闊歩しているので構内に入りやすいとの利点もあったのだろう。

リキウスカは京介のここ一ヶ月分のメールをチェックしたが

そのほとんどは友人たちとの他愛ない会話・

もしかしたらその実は違う意味をなしているかもしれないが表面上はそう見えた・・・

そして一番新しいメールはドメイン名からして携帯端末へのメールでは

恋人らしき女を誘って講演会聴講する予定を知った。

組織が用意した資料よりも自分の目を信じているので対象は自分で見ておきたかった。

そう思い講演会会場まで足を運びそれなりの成果があったと確信している。

知り得た情報として、オカミは普通じみた外見とは裏腹に途方もなく強力な魔力を隠している。

それはナガルのような小物には嗅ぎ取ることすら出来ないだろう。

Creatureはその力が強い程、周囲に波動をまき散らすことになる。

しかしある一定以上のクラスになると実力を悟られないように隠すようになる。

人間の格言でいえば「能ある鷹は爪を隠す」といったところだろう。そのように実力を隠しているcreatureの魔力は同等もしくはそれ以上の

クラスでなくては感知することができない。

ずば抜けた感応力を持つであろう京介と同じ会場にいてもリキウスカが存在を

悟られなかったのは、忌々しいが背中に貼り付けられた封魔札のおかげかと思うと

皮が攣るような感触に気付き、胸が悪くなってくる。

そして、京介には仲間がいる。しかも京介と同様に実力を計れない程強力なcreatureの仲間が・壇上のジム・アンダーソンが何の種族かは全く解らなかった。

推測の域を出ないがおそらく吸血鬼でも夢魔でもない・・・悪魔族か人狼族、もしかするとセイレーン族と同じく希少種であるガーゴイル族かもしれない。

「もう一つ・・・」

あの人間にしか見えなかった少女・・・確かにインペリアの香りでした。

あの香りにあの波動・・・間違いなくインペリアのもの・・・何故あの少女から？

オカミを追って周辺を洗っていたらまさかこんな副産物を見つけるとは・・・

オカミに殺された姉・インペリア。

そしてその波動を持った少女・・・これが意味することは・・・

「まーねー、売り物集めとちがってさあギャラ大きくないしねー」
リキウスカの思考をナガルのだるそうな声が遮った。

ふと我に返ったリキウスカはナガルを見据えた。

「貴方はいつも通り『狩り』をしてくださって構わないわ。

彼は私がなんとかしますから」

一緒に仕事をしなくてすむのは彼女にとってもありがたい。
しかもオカミをリクルートするにしても暗殺するにしても
ナガルの手が必要となることは今のところなさそうだ。

「えー？じゃあ俺ってこの吸血鬼は何もしなくていいの？」

「ええ」

しかしあの少女を利用するとしたらナガルも使い道があるかもしれない。

「でも、貴方の手が必要になるかもしれませんから
その時は協力を仰ぎますわ」

「はい！んじゃ、あとはよろしくねー」

ナガルは長いは無用とばかりにいそいそと店を出ていった。

どうせ街に立ち客をキャッチするか『売り物』を物色するのだろう。

「日本語は世界でも有数の美しい言語・・・だったはずなのに」

不可解としか言いようのないナガルの口調を想い

リキュスカは美しいものの存命を憂いだ。

16. 花魁（前書き）

ながーい黒髪に黒地の振り袖を羽織っただけの女性キャラを動かして見たかったです（照

16. 花魁

「ってかりキュスカちゃんって美人でもつまんねー」
いつも通り街頭に立ち、誰に言うでもなくつぶやく。

いつもの日課・・・学生でありながら勉学に勤しむのではなく
昼間の繁華街に立ち客になりそうな若い女・・・

もしくは有閑マダムをキャッチするのがナガルの日常だ。

そして・・・『狩り』と呼んでいる行為。

年若く真面目そうで造形の美しい少年少女を言葉巧みに誘いグループに売り飛ばす。

グループが出した条件は二つ。

一つは見た目が美しいこと。もう一つは処女もしくは童貞であること。

この条件をクリアした獲物が手に入り次第、指定されたフリーアドレスに

メールを送る。

その件名は「ペット」メール内容も少年をさらえば子犬一匹保護、少女を拐かした場合は子猫一匹保護とかくように指示されている。
事実上はどんなにセキュリティを強化しても誰でも観閲し放題のe-mailで

犯罪の報告をするのは危険過ぎるということか・・・

詳しいことは解らなくてもそういった秘密めいたやりとりをナガルは
「なんだかスパイっぽくてクール」くらいの気持ちでしか認識していなかった。

そういつて買い取られていく一人あたりの値段は

ホストとしては売れているナガルのサラリー3ヶ月分にもなった。

もともとナガルにとって女は客になるかやれるかだけだったのだが

『狩り』をしないか？と魔族の族長にリクルートされてからは
繁華街に立つ理由がもう一つ増えたのだ。

いつも通り客になりそうなキャバクラ嬢、ナンパに着いてきそうな尻軽女子高生・・・そして清純な風合いの少女・・・グループが望む少女・・・少年でもいいのだがナガルは基本的に女が好きだ・・・

は普段声をかけてきた女達とちがいナガルのような風貌の男が声をかけてくると、

大抵無視するか走って逃げて行く。

しかしそれはもしもナガルが普通の人間ならば、だ。

ナガルは夢魔族の血を引いている。

相手を警戒させない「匂い」を持っている。

おそらく夢魔として人間を食餌する際、有利に働く特徴だろう。

そして、ホストとして顔はいいとしてもカリスマ性、知性そして

話術がなくても店でNo.1と2を争っていられるのは夢魔としての魔力を使っているからである。

客に幾度と無くナガルの夢を見せる・・・内容はなんでもいい。

悪夢じゃなければ。

繰り返しナガルの夢を見せられた女はこれを「恋」と錯覚する。

ただそれだけでいいのだ。

半端者ではあるが夢を司るcreatureの端くれとして

夢を操るなんてお手のものだ。

夢魔として魔界で権力を得るには到底足りない力も

人間界で端金を稼ぐのに困らない程度には役に立つのだ。

しかしナガルは「自分は夢魔としても一流」と自負している。

大海をしらない蛙はこの世界にもいるものだ。

俺はこのビジネス・・・といってもグループの末端の使い捨て人員なのだが

そんな事はナガルには解らない・・・で億万長者になる、

そんな夢物語をかんがえている。

いつも通りに女たちを物色しながら視線を泳がせ・・・

ふと何かに誘われるように振り向くとそこには一人の少女がいた。

年は十二〜十八ならば何歳にでも見える。

つやつやとした黒い髪をツインテールに結い上げており

白い肌は透けるように白く、黒い髪と瞳は漆黒と呼べるほどに黒い。

黒いセーラー服に白いリボンに黒いハイソックス・・・その少女の周りだけ

まるでモノトーンのフィルターをかけたように色味がない。

顔立ちは整っており美少女の条件はすべて満たしているハズなのだがその表情のなさが災いしてか可愛いと思うより不思議な印象しか受けない。

見たことがない制服だ・・・もしかしたら中学生か地方の高校生かもしれない。

「あのさ・・・ホストクラブって興味ない？」

ナガルは気が付くとその少女の側に行きキャッチ行為をしていた

（やべっ制服着てるのキャッチしたら店の決まりやぶってんじゃん）

高校生に限らず未成年を客とすると条例違反となるので店では固く禁じている行為だった。

辺りを見回しホスト仲間がいないことを確認した。

もしも誰かに見られていたら「ナンパしていた」とでも言えばいいか。

声をかけた少女は無言のまま真っ直ぐにナガルを見つめ、すぐにその大きな瞳を自分の制服に向ける。

「そっか・・・高校生だもんね・・・お姉さんかお母さん紹介してよ」

じっとナガルを見つめそのまま静かに首を振った。

「そっか・・・名前教えてもらってもいい？」

「花魁・・・」

「おいらん？って花魁？」

少女は相変わらず無表情のままくると踵を返し足音無く歩き始める。

「待ってよお」

無遠慮に花魁の細い腕を取った。

その身体は驚くほどに熱を持っていなかった。

「・・・」

無言で見つめられると蛇に睨まれたカエルのように動けなくなり
その手の力が抜ける。

「あ・・・」

何故だろう。心底恐ろしいかった。

あんな華奢な少女が？

その「恐れ」こそナガルが magari なりにも持っている夢魔としての
本能。

（なんだよこの女・・・）

悠然と歩いて視界から消えていく花魁を呆然を眺めたただ恐ろし
さをかみしめた。

ミルク・バラ・・・ジャスミン・・・と大理石の湯船からは
甘やかな香りが立ち上っている。

ちゅん・・・湯船の中のミルクと同化してしまうような
ミルク色のしなやかな肢体が湯気の中に浮かんだ。

「リリース様。花魁様がお見えです」

バス・メイドがバスローブを手に跪きうやうやしく言った。

「わかったわ・・・」

鈴を転がす様な愛らしさと上質のブランデーのような妖艶さを併せ
持った声色が

湯気の中を優しく泳ぐ。

プレイメイトも裸足で逃げ出しそうな抜群のプロポーション、
ミルク色の肌を柔らかく彩るはちみつ色の長い髪・・・

大きなアメジスト色の瞳が聡明そうにきらめきその顔立ちは
神の領域に達した職人が丹念に仕上げた美神の彫刻のようだ。
バスローブを素肌に纏い

「髪を結うのは後でいいわ。」

花魁を待たせるわけにはいかないから・・・
ナイトドレスを持ってきて」

メイドに指示すると、その答えを予測していたような早さで
衣装担当のメイドが数点のドレスを差し出す。
その中からワインレッドのローブを選び着替えを手伝わせる。

「ごめんなさい。お待たせしちゃって」
広く豪華な応接室の真っ白いソファは花魁の黒と白の美貌の舞台と
して申し分ない。

「あら・・・弱い子犬と戯れてきたの？
でもお食事はしなかったのね」

花魁の周りにかすかに残る弱い魔物特有の臭気を嗅ぎ取りリリースは
微笑む。

「不味そうなノラには手だしたくない・・・」
花魁は表情を全く変えずにぼそりと抑揚無くつぶやく。

「花魁はグルメですものね・・・で、どう？」
「小物・・・」

あら・・・とリリースはちよつと意外そうな表情をしながらも

「じゃあ花魁の夢で直接見せていただくわ」
白魚のような指を花魁の頬に当て、額同士を触れさせると二人は
催眠術にでもかかったかの様にその場に崩れおちた。

漆黒の闇は花魁の瞳の色に似ている。

ふわり・・・その闇に浮かぶ美女が二人、眼下に広がる花魁の「夢」
で

先ほどのナガルとのやりとりを見ている。

「小さい姿も可愛いけれど、やっぱり花魁はこの姿の方が馴染むわ」
長い足を組み替えながらリリースは艶やかな笑みを花魁に向ける。

「でも人間界でオトナの格好していると目立つし疲れるのよね・・・」
花魁・・・さっきまでいた少女がこの短い時間で美しく成長して
いた。

大振りな蝶を描いた黒い振り袖をローブのように羽織り、その合わせ目から覗く白い胸元は申し分なく成熟しており、先ほどは少女としか呼べなかったが今は本来の姿・・・美しい夢魔族長に戻っていた。

深紅に彩られた爪は気怠そうに闇色の髪を弄ぶ。

東洋と西洋の美女競演・・・非常に贅沢な凶柄であろう。

「実行犯はこの子犬かしら？」

「おそらくね・・・でも小物よ。」

魔力もほとんどなくておそらく寿命も人間と変わらないわ・・・」

「こんなのが夢魔族にいるのが腹立たしいって感じね」

くすくす、と小さな笑いを含ませながらリリースが茶化す。

「腹立たしいわね。夢魔族の汚点だわ・・・」

静かな怒りを含ませた声でつぶやく。

「それを言うならば悪魔族も同じですわ・・・」

滝山グループに繋がっている者が最低二人は報告されてますもの・

・

自嘲気味な笑顔にも気品がある。

「小物になればなるほどに人間と同じくお金で動かされてしまいますものね」

さらりと花魁の闇色の髪が指から舞い落ちる。

「私たちcreatureにとってそもそも人間の経済通貨なんて全く持って

意味をなさないモノなはずなのに・・・」

「リリース、これはもしかしたら新たな価値観なのかもしれない。

今後こういうケースが増えていくかもしれないわ。

魔界に住むには弱すぎる底辺のcreatureたちはどんどん人間界に移住して

その世界に順応していき人間じみた考えを持ち始めてくるわ。

そうなった時・・・従来の異種族間協定だけでは裁けなくなってくる・・・」

「そうね・・・私たちも人間界は観光程度でしか見たことないですし」
眼下では小さな花魁がナガルの無遠慮な手をさらりと落としその姿を舞台から消している。

「人間界に詳しい・・・あの二人に助力を求めるしかないのかしら？」
もう数百年も異種族間協定会議に参加していない「不良族長」たちの顔を

思い浮かべる。

「・・・ったくあんの馬鹿男どもがっ」

リリースのその薔薇色の美しい口唇から全く持って不釣り合いな罵りの文句が吐かれる。

「全くね・・・」

そんな姿を見慣れているのか花魁はさして気にも留めずに頬杖をつく。

不良族長・・・かあ・・・

花魁の頭に京介の穏やかな笑みが思い出される。

京介に初めて逢ったのはまだ花魁が小さな頃、どこかのパーティーでだった。

きらびやかな紳士淑女たちの会話・・・ところどころであがる嬌声・

でも幼かったので大人達の会話に飽きてしまった花魁はふらふらとどこかの部屋のドアを開けてしまった。

運悪くそこでは悪魔族の伯爵とその情婦がコトの最中だった。

「なんだ、お嬢ちゃん混ぜて欲しいのかな？」

「おやめなさいな、ほら怖がってるわよ」

ベッドの上で睦み合っている男女は笑いながら花魁に品定めするような視線を向けた。

まだ小さかった花魁はただただ怖くて今にも泣きそうになりながらもその場を動けなくなってしまうた。

「ほおら、みーつけた」

そんな花魁を優しく抱きかかえ

「すみません、このコと隠れん坊してたんですよ。御邪魔しましたー」

さっさと部屋をでていった。

突然のことで呆然としている花魁に京介は

「大丈夫だった？怖かったかな？」

と優しい笑顔で花魁を降ろしてくれた。

「パーティーでは不用意に部屋開けるとあんなことになってるからダメだよ」

ほっと気が抜けて涙を流しはじめた花魁に

「びっくりしちゃったよね、よしよし。」

あっちでアイス食べようか？」

親切にも面倒を見てくれそのまま親の所まで連れて行ってくれたらしい。

『らしい』というのは安心しきってしまった花魁は

途中から京介に抱っこされたまま寝てしまったのだ。

後で親から京介のことを聞いてあの親切な紳士が吸血鬼族長だと知った。

その後美しく成長した花魁は胸の内を明かすことなく京介のことを気にかけている。

何もしないけれど……。

異種族間の恋愛・婚姻は禁止されてはいないが影響が大きすぎるとの理由から

族長どうしは固くその関係を禁止している。

どんなに望んでも京介との関係に未来はないのだ。

お互い相手の気を引き食餌とする種族同士……二人は似すぎている。

花魁はそのことを十分に理解していた。

ただ京介が元気ならそれでいいわ。

あの不良族長が……花魁はリリスとは違う闇を見つめていた。

17. 滝山（前書き）

この章は長いです（ごめんなさい）

17. 滝山

オフィス街にあるひととき目立つ高層ビル。

その回転ドアの中には様々な人種の企業戦士が吸い込まれ、はき出されていく中、長身の女がロビーを横切る。

外資系企業がテナントとして多く入っているのビルエントランスでは北欧系のリキウスカは決して珍しい存在ではない・・

しかしその類い希なる美貌、特別にしなを作らなくても異性・・・時には同性ですら惹きつけ魅了する能力、それは他種族を食餌とする

セイレーンに生まれ持つて備わっている資質でもあった。

しかし食餌を探していないときはいささか邪魔でもあるが・・・。

「ハイ、リキウスカ、コーヒーどうだい？」

「ありがとう、ミスター。ブラックでいただくわ」

滝山・・・ここでは「滝沢」と名乗っているリキウスカの雇い主のオフィスがあるフロアに足を踏み入れた途端、満面の笑みで近付いてきた

イタリア系男性は先々週にリキウスカをオペラに誘ってきた男だ。

つれない返事で断ったがどうやらまだリキウスカへのアプローチは諦めてないらしく話しかける隙をうかがっているのがわかる。

「今日はこっちなんだね・・・じゃあさ、リキウスカ、今夜食事どう？」

コーヒーを受け取り義理程度の笑みを向けると男は早速ナンパを始めてくる。

「ごめんなさい、先約があるの」

2、3週間に一度しかこのオフィスに顔を見せないが確かに社員証を首からかけているリキウスカを、この男はどこか外の企業に出向している社員とも思っているのだろう。

「そっか・・・じゃあまた誘うから、今度は色良い返事期待してる

よ」

男はそう笑顔を見せ自分の仕事へ戻っていく。

「滝沢社長と面談を。アポイントは取っておりますわ」

フロア一部をパーティーションで区切っただけの簡易社長室前で秘書業務をしている若い女性に告げる。

「はい、ペングリス様。お待ちしております。どうぞ中へ」

（あの男はどこまで魔界に足を踏み入れる気かしら・・・）

秘書を務める愛らしい女性はおそらく下級悪魔であろう・・・その艶やかな黒髪と優美な身体の曲線をぼんやりと眺めながら不安な気持ちになる。

どうぞ、と秘書が緑茶を応接用ソファに座るリキユスカの前に置き去っていったのを待つように

「で、向こうの様子はごうだい？」

ここでは化学系ベンチャー企業社長・滝沢の顔を名乗る滝山が口を開く。

「ミスター・オカミは結構手強いですわ。

東洋系の『社員』も確かに欲しいところですけどやはり

その力量からして『卸』程簡単には手におちませんわね」

「しかし『卸』ばかり居ても組織としては動かしていけないからね。

やっぱりある程度、知性に裏付けがある人材が欲しいね・・・」

卸とはここではナガルのように『商品』を探してくるモノ達を指した。

末端の『卸』とそれを束ねる『社員』・・・

今のところはインペリア亡き後、『社員』はリキユスカ、

本物とは到底思えないが吸血鬼族長のブレン、そして同じく

胡散臭い人狼族長レオン、最後にこの人物だけは実力が計り知れない悪魔族長の紳士の4人だ。

「セイレーン族の得意技は色仕掛けじゃなかったのか？」

「ふふ・・・向こうにも好みってものがありでしょうし」

「確かに・・・インペリアが倒される程だからね。」

しかし余計に気に入ったよ。

あのレオンですら敵わなかったインペリアを上回る戦闘力に有名私立大在学

の知性・・・使えない人材ではないだろう」

やっぱりインペリアは試し打だったワケね。

リキユスカは目の前の男を殺したい衝動に駆られた・・・

が今は背中の封魔札のせいでそれが出来ない・・・。

そんな内心をおくびも出さずに

「なるほど、滝山社長は彼にご執心なわけですね」

「ははは・・・ここでは『滝沢』だよ」

「この社員たちはMr. タキヤマの本性をご存じありませんの？」

「連中は周りにはほとんど興味がないヤツばかりだからね。」

研究者ってのは、えてしてそんなもんだよ」

この会社の業務内容は各地大学や企業などの研究室と共同で新規原料と成りうる鉱物、

化合物、植物抽出エキスなどを取り扱っている。

業績はまあまあで、昨年に発見したロシアのある果実からの抽出エ

キスは

素晴らしい保湿効果と美白効果が認められ、製薬会社が立ち上げた新たなコスメラインでも処方されて大ヒットとなった。

このような業務内容はもちろん滝山グループないでも同じ部署はあるが

敢えて滝山は新たな会社を立ち上げたのだった。

「滝山グループで新規のものを扱うのは何かと面倒だからね」が滝山の理由だった。

あちらでは出来ないグレーな仕事はこっちでやって失敗したら切り捨ててみるだろう。

「そうですか・・・。

話はオカミに戻りますが、古典的な手法ですが彼の弱みを使って揺すってみますわ・・・そういった方法はお嫌いかしら？」

そんなワケがない。

リキユスカとインペリアを利用するのに使った方法なのだから……。

このやんわりとした嫌みを滝山はどう受け取るか・・

リキユスカはちらりと窺ったがどうやら滝山は気付いてすらいらないようだ・・・

もしかしたら気付かない振りかもしれないが・・・。

「どんな手段でもかまわんし、報酬も彼の言い値で良い。

じゃああとは頼んだよ。・・・で今日の届けものは一つ？」

「ええ。一つですわ。いつも通り資材に運んでおきましたのでご確認ください」

もう言うことは無いわ。

リキユスカは数枚の資料を置いて滝山・・いや、滝沢のオフィスを後にした。

新しい世界を開拓すれば新しいモノが見つかる。

そして人間とはジパングにしてもエルドラドにしても

古来より新しい世界に憧れてきたのだ。

滝山もその例に漏れることなく新たな世界に憧れ、手を出した。

魔界という世界に。

例えばその世界は鉱石一つにしても地球に存在する鉱石とは

全く違った性質を有している場合がある。

伝導率、可塑性、熱伝導度・・その他、植物も興味深い。

学者は人間界で帰化してしまい生態系へ影響を与えてしまう危険性を指摘したが、

サンプリングした魔界の植物は人間界に持ってくると同時に風化してしまったので

その心配は杞憂となった。

興味深い事にこの風化した塵にしたって非常に強い抗菌性・抗ウイルス性を示し、

その他にも細胞毒性などを現在調査中だ。

しかし人間はその魔界の空気・・・暫定的に瘴気と呼んでいる・・・に

肉体が耐えられないらしくこのベンチャーの研究者を二人魔界に視察に

行かせた結果、二人は敗血症で絶命してしまった・・・

その死はもちろん秘密裏に処理した。

植物は人間界に持ち込むことが出来なかったが鉱物類は外見上変化なく

持ち込むことが可能だったので目下検査中で・・・

もしも望むような性質を持っていれば新規原料として売り出すつもりだった。

調査はこのベンチャー会社と滝山化学のごく僅か、口の堅い研究者数人に

依頼しており、結果は今週末にもでる予定だ。

まだ貨幣経済という概念がない魔界を新たな市場とは考えてない。

いずれはそうなってくれるかもしれないが貨幣という概念を導入するのに要する時間を

考えるとかなりの長期プランになるだろう。

故に今、欲しいのは資源。

しかも地球上にはない無尽蔵の可能性を秘めている。

滝山はオーク材のデスクに落ち着きノート型パソコンを立ち上げる。

「あと人材も・・・ね」

人間からすると魔法としか思えない能力を持つcreatureたち。

その全てを御したいと思うほど滝山も馬鹿ではない。

デスクの引き出しに作りつけてある金庫に保管してある

封魔札8枚を思い笑みを浮かべた。

アメリカには様々は人種が共存しそして文化、宗教も同時に多種多

様だ。

どんなかたちにせよ神を崇拝する宗教がマジョリティーな中、一般的に邪教と呼ばれる悪魔を崇拝するカルト教団も少なからずあった。

「・・・貴方が呼んだの？」

長いブロンドの髪のみを素晴らしいプロポーションに纏った美女が滝山に話しかけてきた。

留学時代に悪魔崇拝をおこなうある邪教の黒神父に教わって以来、初めての召還術は7割の緊張と2割の不安、そして1割の期待が入り混じっていた。

（このために10年近く準備したんだ・・・失敗は出来ない！）

学生の頃に知った未知の世界に憧れ続け研究し続けやっとその扉を今開けようとしているのだった。

その美女はあらゆる痴態で滝山を誘惑してきたが、もしもこの誘いに乗って

召還結界内に入ってしまったら契約以前にこの悪魔に魂をタダ取りされてしまう。

これも予め教わった通りだった。

「ああ、呼んだのは私だ」

甘ったるい胸がムカつくような臭いにむせそうになりながらも冷静に答えた。

「いつまでそんな偽りの姿でいるんだ？」

俺は別にプレイメイトに会いたいわけじゃない」

冷静な声の中にいささか苛立ちも混ざってしまっただろう。

美女は美しい顔に似合わない「にやり」とした表情で笑い、途端にどろどろと溶け出した。

ついに本性を現すのか・・・滝山は知らず知らずに手のひらに汗をかいていた。

今、人類が幾度となくコンタクトをとり続けては歴史の闇に葬り去られてきた

種族を目前とする！！

『・・・儂を呼んだのは・・・』

地獄の底から響くような声が滝山の耳ではなく脳に直接響いてきた。

こ・・・これが・・・

悪魔。

もっと醜い異形の者を想像していたが、溶け落ちた美女は意外な程に平凡な外見の小柄な老人に姿を変えた。

「あ・・・貴方が・・・」

口が渴き声がかすれてしまった。

『おそらく私が貴殿が呼んだ悪魔だが？』

スラブ系ともとれる外見だがその年齢は計り知れない・・・

60歳以上ならば何歳とも見える外見だった・・・

尤も本当の年齢なんて悪魔にとってあってないようなものだろうが・・・。

『儂を呼ぶからには何か願いがあるのじゃろ？はよ言い』

英語に聞こえるが脳の中に直接響くのももしかしたら違う言語かもしれない。

しかし滝山にははっきりと理解できた。

『そしてもちろん・・・代価はもうじよよ・・・』

にやり、右の口角をあげる笑い方が特徴の様だった。

「もちろん・・・」

生け贄の価値は容姿や身体的な理由によって決まる。

他にも極上品として、聖女神童と呼ばれるような超能力を持った人間が

生け贄にされることもあるが絶対数が少ないのでそれらが生け贄とされることは稀だった。

「私の息子だ・・・」

もう一つ、極上の生け贄と成りうる人間がいる。

それは術者の肉親・・・それも血が近ければ近い程その効果は大きい。

肉親を売るといふ背徳行為が悪魔の嗜虐性をそそりより大きな見返りをくれるのだ。

『ほお・・・息子か・・・』

目元が滝山に似た整った顔立ちの10才に満たない少年は
目前で繰り広げられるこの世の常軌を逸した光景におびえて口もきけない状態だった。

日に当たった事がないのか、その肌は透き通るように真っ白だった。
「ああ、昔愛人に生ませた子供だ。出生届も出さず秘密裏に飼育したから

この子が消えたとしても警察が捜査に動くことはない」

飼育？実の子供を？このために10年以上前から準備していたというのか！

面白い人間だ・・・悪魔は目を細めた。

たまには暇つぶしに小物を呼ぶ召還魔法陣に出てみるのも面白いかもしれない。

悪魔のそんな感想を滝山は知るよしもなかった。

『ふおふおふお。おぬしは何がほしいのだ？』

ここからが正念場だ！やっと条件提示までにこぎ着けられた！

「力を・・・貸してほしい。」

魔界を知りたいんだ」

『ほお・・・何故知りたい？おぬしは民族学者か？』

何だか人間くさい意見を言う悪魔だ・・・。

「学者になりたいと思った時期もあったけれど決して民俗学ではない。

今は単なる会社役員だよ」

『単なるか・・・そうか・・・一族経営の会社か・・・』

そんな苦労知らずのぼんぼんが火遊びしたくなってにわか召還術か・・・

ふおっふおっ・・・何か得になったか？』

「特になるかどうかはこれからの交渉しだいだよ」

『……そうじゃな。して……他の望みは?』

さっきのは叶えてくれるのか? 望みとはいくつもを望んでいいものなのか?

滝山は驚きを隠せずにいたが元来の物怖じしなさから率直な要求を述べた。

「魔界へ行きたい。」

この目でみて確かめたい」

『魔界とは……また酔狂な……命を落とすぞ……』

「なぜだ?」

『あんた達人人間には耐えられない空気なんだよ』

「空気?」

『ああ……まあ行きたいというならば止めないがな……』

「魔界行きはじゃあ保留として……そうだな……」

貴方に悪魔族長の演技をしてほしい」

この儂に悪魔族長のふりを? なんと茶番!

老人は豪快に笑いたい気持ちを抑えた。

『儂はこの通り老体じゃ。じゃから代わりにこの傀儡を使うがよい

お主の命令ならば何でも聞くぞ……実に働き者じゃ……ほれ』

老人は指をぱちんと鳴らし何かに合図をすると温度のない白煙が発生し

その中からぼんやりとした輪郭が見え……

その影は次第に壮年の紳士に姿を変えた。

滝山はそのマジックとしか思えない光景を固唾を飲んで見守っていた。

『もうひとつお前さんは非常に興味深いからこれをやろう』

何もなかった左手にいつの間にか数枚……若しくは数十枚の札があった。

『封魔札じゃ。この札をcreatureの背中に張ればその魔物はロボット三原則

に従い、働くようになる……つまり

人間に従い

人間を傷付けず

自殺をしない、だ』

「ふう・・・ま？」

そんなすごいモノがここに・・・

しかし何故俺に？

『お前さんは面白い。』

この手駒でどこまでいくか見てみたい。頑張って望みを叶えたまえ・・・』

ふおっふおっふおっ・・・

今まで気にならなかった甘ったるい悪臭がまた鼻についてきた。

ふおっふおっふおっ・・・

耳に残る笑い声とともに悪魔は姿を消してしまった。

夢か・・・とも思えたが確かに滝山の手には現実だったという証拠があった。

もう一つの証拠、息子の姿はもうそこにはなかった。

滝山は右手は紳士の手を取り、左手には封魔札10枚が握られていた。

滝山はオフィスから地下にある資材室に直通エレベーターで向かう。
この資材室・・・表向きはそうなっているがその実、末端の魔族たち・・・

『卸』が狩ってきた「商品」を見定める場所だ。

滑るような音とともに身体が下降しているのを感じた。

「そろそろ商品に向こうに運ぶか」

いつ捜査の手が回るとも限らない。

慎重に慎重を重ねることは悪くはないだろう。

「聖慶女子学院か・・・」

資材室に置いてある巨大な段ボールの中に足を折って寝かされていた少女の

特徴のある制服は有名な女子校のものだ。

毛色は悪くない。

滝山にはそれを判別する術はないが、『卸』が見つけたということはその身体もお墨付きと考えてよいのだろう。

「西洋人3人、東洋人2人か・・・他にカメラ1体・・・」

リキユスカが残したリストに目を通しながらつぶやいた。

「そろそろ屋敷に運んでおいてくれ。」

向こうの結界はどうだ？」

『ちゃんと日本の・・・東京と向こうをつなげておきましたよ』

にやり、この紳士の笑い方はどこかあの悪魔に似ていた。

あの悪魔が自分の代わりにと置いていったこの紳士は実に忠実に滝山の命令をこなしてくれた。

その体温の感じられない仕事ぶりに少々の違和感も感じたが今は

他の『社員』たちよりも信用していた。まさに忠実な人形のように動いてくれる人材だ。

「まさに人形か」

くっくくくっ・・・押し殺した笑いが静かな地下室に響いた。

17. 滝山（後書き）

これで役者はほぼ揃いました！！！！
感想いただけると嬉しいですっ

18. 誘拐（前書き）

見知らぬ方に声掛けられたら用心しましょう！

18. 誘拐

「見つけたわ……ミス・タカク。

あの少女なんですけれど」

友達らしき同年代の女とウインドーショッピングしている姿を

リキユスカは遠くから指し示す。

「へえ……オヤジ好みじゃね? いいんじゃない?」

若い女性好みの外装をしたセレクトショップのショーウインドーの前で

何やら指さしながら談笑している美樹はどこにでもいる女子大生のように見える。

「貴方がそう言うならば信じましょう。狩れる?」

リキユスカの目からはいささか少女じみているようにも見えるが、ナガルの方が商品を見る目は確かだ。

「ま、まーカーセーてーよお」

変なイントネーションでナガルはかけていたサングラスをジャケットの

胸ポケットに入れ友達が店内に入ったのを見計らって美樹に近寄っていく。

「あれー、タカクさんじゃん。

久しぶりー」

なれなれしく美樹に話しかける。

見知らぬ男に声を掛けられた警戒の色は隠せないが名前を知っているということは知り合いなのだろうと邪険に出来ない内心が手に取るようにわかる。

美樹は失礼にならない程度の警戒心でちらりと先に店に入っていた友人の方に目を向ける。

「あれー? 忘れちゃったの? ひどいなあ。俺はスグわかったのに? 綺麗になっちゃってさあ……高校の同級生なんて忘れちゃった

「？」

さりげなく近寄りながら建物の中に追い込んでいく。

「え？高校って・・・？私女子校・・・」

言い終わらないうちに美樹はかくんとその場に崩れてしまった。

低級ではあるが一応は夢魔一族。

少女一人を昏睡させるくらいのア芸当は持ち合わせている。

いえーい。

遠くからブイサインを送ってきたナガルをリキウスカは珍しくほめてやりたくなった。

「さて、じゃあ次は私の出番ね」

サングラスを外し、美樹の友人が入っていたセレクトショップに入った。

ナガルは貧血を起こした恋人を介抱するかのごとく無事に車まで美樹を運んだようだ。

「あれ・・・美樹？」

友人は出口付近にさっきまでいた連れを探していた。

「こんにちは」

リキウスカはにっこりとその少女に話しかけそのまま

（連れ？貴女は今日、一人でお買い物していたじゃない？）

古代セイレーン言語の囁きはこの娘には聞こえないだろう。

しかし脳にその振動は伝わり記憶を司る部位に刺激を与え、新しい・・・まやかしの記憶を植え付ける。

「？」

言霊を使うと背中の中封魔札がちくちくと肌を刺激したが、

例え封魔札によりほとんどの魔力を抑えられていても

人間一人に暗示をかけるくらいなら造作ない。

美樹の友人・京子は本来ならば夏物を二人で吟味した後、

両親不在の夜を女の子二人でお喋りし明かすはずだったが、

そのまま一日何の疑問も持たずウィンドーショッピングを続け一人の家へ戻って行った・・・。

この少女の中にインペリアの血が流れている。

どんな経緯があつてそうだったかはわからないが確かだろう。

ということは姉・・いや、妹になるのだろうか？

セイレーン族は女性だけの一族だ。

里に迷い込んできた男を誘惑し交配しその男を養分として喰い殺す。

子供をなすための男は人型ならばどの種族でもよい。

生まれてくる子供は父親の遺伝子を受け継ぐ事はなく、

その点では単性生殖とも言える。

セイレーン種は希少種なので子供はとても大事に育てられる。

リキウスカもインペリアも王族の娘だということもあり

それは大事に育てられた。

母が一族の歴史を、叔母や乳母たちが踊りや歌を覚えてくれた。

美しかった母は一族としてはひどく短命な一生を終えてしまった。

母が喰い殺した男の妻に殺されて・・・。

セイレーン族はもともと数少ない種族だった。

異種族間協定が結ばれた後、自由に人間を食することが出来なくな

ったが

それでも郷里では静かで美しい生活を送っていた。

セイレーンの民族衣装を纏い古代言語で民謡を歌う女王インペリア

はこの世のものとは思えない程に美しかった。

しかし2年前、4人のセイレーンが協定違反し人間と悪魔族の男を

喰い殺してしまい、その罪が問われ死罪となり、

里全体に悲しみと混乱がまだ残る内に今度は5人のセイレーンが

行方不明となつてしまった。

犯人は以前捕まつてはいないがおそらく滝山グループの

息がかかった魔族により捕らえられ封魔された後どこかに

売り飛ばされたのだろう。

彼女らは運が良ければどこかの王族の寵姫として生きているかもしれない。

もしくは容姿が全く衰えない美しい最高級娼婦として……

悪魔族長を名乗る男が里に正式訪問したのは丁度、

セイレーン族長だったインペリアがこのまま鎖国状態を続けるよりは外交を強化した方が得策ではないかと悩み始めたのと同時期だった。

そして女王姉妹であるインペリアとリキウスカは留学と称して

里から離れ、滝山グループの保護のもと人間界での生活が始まった。初めて紹介を受けた時、インペリアは滝山にほのかな憧れの情を抱

いた。

今になってみれば吐き気を催しそうだが……

グループ内で英語、日本語、中国語、スペイン語の語学、

その大まかな文化、そして経済にIT技術……

二人は驚くべきスピードでそれらを吸収していった。

インペリアは格闘技術を仕込まれボディーガード兼秘書として

社会にでるようになったがリキウスカは封魔札により力を封じられた。

「君は切り札だよ。姉君も馬鹿じゃないからいくら巨大な力を持っていたても

君のために裏切り行為なんてしないだろうしね」

かつては王子様に見えた男は静かに言った。

その言葉には蔑みもなければ恐怖も同情もなかった。

全く感情の読めない男……

滝山は人間ながら何か底知れないものがあつた。

寂しい想いと苦々しい想いが入り混じった回想をするリキウスカを

乗せ、

ナガルが運転する高級セダンは静かな振動音をたてながら

オフィス街を走っている。

取り敢えず後部座席で寝かされている少女を「商品」として

保護するのが最善の策だろうか……

「タカク……でしたっけ……」

オカミとのe-mailでは竹来さんと呼ばれていた。

ファミリーネームかファーストネームかは解らないが
この少女の名前だろう。

恋人が・・・タカクが滝山グループの手中にあると知ったら
オカミはきつと助けにくるだろう。

そして恐らく交換条件に乗るよりもグループを潰す事を選ぶだろう・
。。。

オカミのプロファイルはまだ完璧とはいかないが、
それなりに実力があり他の小者たちとは違い、

金も名誉も興味のないらしい。

一匹狼は自分の意にそぐわない組織にたいして懐柔するよりも
壊滅することを選ぶと思われる。

「そして彼の力ならばそれも可能・・・」

人質であった姉が亡くなった今、リキウスカは滝山に忠誠なんて
誓っていなかった。封魔札のせいであつた魔力を発揮することは
出来なくても逆らえばすぐに商品としてオークションにかけ、
どこぞかの好事家に買い取られると言われたが

姉がそうなるのではなく自分が売られるのならば、覚悟はできた。

組織に囲われ売られていった商品たちは慰み者にされるか
観賞用として扱われるか・

どちらにせよその末路は喜ばしいものではないだろうが

ここで飼い殺されているのも大差はないように思えた。

しかし・・・

リキウスカにはどうしても腑に落ちない事があつた。

戦闘能力は低いがインペリアもリキウスカもセイレーン王族の血を
引く身。

その魔力を封じられる封魔具を作ることが出来る悪魔族は限られて
いる。

そんな大物が何故人間の言いなりになっているのかが解せない。

「ま、グループ内に大物がいてもいいわ・・・

大物は大物同士つぶし合ってもらうますわ。

そして相討ちのなってもいいから最後にオカミを殺す・・・？」

一応インペリアの敵も取りたいですし・・・

折角出来たばかりの可愛い妹なのに囹に使わせてもらうわよ・・・タカク・・・。

貴女には罪はないけれど・・・

そしてオカミにも。

オカミは身を守っただけ。

その相手がたまたま姉だっただけ。

恨みが全くないとは言えないが自分でも驚く程に淡々としていた。

（不思議ね・・・こんなに感情がないなんて・・・）

いいの。ここから逃げられるのならば。

逃げて行く場もないけれど・・・。

19. 裏切り

インペリアは仕事熱心だった。少なくとも表面上は。

ナガルが連れてきた商品の在庫管理をし、商品たちをより美しく見せるための

ドレスアップも担当していた。

この組織を手伝うことを内心はよく思っていないことは十分承知だったが、

だからと言って使えないワケではないので十分に働いてもらっていた。

そのインペリアに姉が失敗したプランを引き継いでもらってから初めて、

進展が見られた。

以前逃げてしまった魔獣も確かに惜しかったがそのおかげで岡見を見つけることができた。

これで首尾良く彼を組織に入れば当分は人員に困らないだろう。

インペリアはボディーパーガー兼秘書として十分な働きをみせてくれた。

それはひとえに可愛い妹・リキウスカを人質としていたからだろう。しかしそのインペリアが死んでしまうと残ったリキウスカにインペリアの後釜全ては引き継がせるわけにはいかなかった。

確かに滝山に絶対服従で秘書としては使えたが封魔札のせいで大した魔力は使えない。

「そろそろ人事異動するか」

岡見は腕もたつ上に馬鹿ではなさそうだ・・・インペリアの時と同様、

恋人を盾に取り組織に取り込めばいいだろう。

滝山はそんな算段をしながら岡見の恋人をさらったが売り物にはまだするな

との伝言は聞いたが・・・

見ると結構売れそうだし折角なので鑑定してもらうか、と軽い気持ちで吸血鬼族長・ブレンを管理室まで呼び寄せた。

「Mr. ブレン。彼女を見てもらえるか？」

肖像画然とした美貌の吸血鬼青年は少々芝居がかったような動きで慇懃に滝山へ挨拶をし、長椅子に横たわっている少女の元に膝まづいた。

「彼女は・・・もしかして・・・」

「どうした？」

「キ・・・キメラですか?!」

「あ・・・ああ」

キメラ?あの天使像みたいな子供と同じか?

滝山は初耳だったが知っていたフリをする。

「彼女・・・起こしてもいいですか？」

「ああ、傷さえつけなければ何をしてもかまわんよ」

「自我をみるだけです」

ブレンは珍しくいささかむっとしながら答え、男にしては繊細な指をそつとタカクの額にあて覚醒の合図を送る。

「おはよう、お嬢さん」

「あ・・・」

眠たそうだがブレンを見つめる瞳は確かな意識が見てとれた。

「お嬢さん。お名前は？」

訛りのない完璧な日本語と優しそうな声でゆっくりと質問する。

「竹来・・・美樹です・・・私・・・」

ぼんやりとした答えだがその返事にブレンは内心興奮した。

「君は貧血で倒れたんだよ。どこか痛いところはないかな？」

冷静に見渡せばここが医務室ではないことは明白だろうし、白衣すら着ていない金髪碧眼の医者にも少なからず疑問を抱いたかもしれないが

美樹は素直に質問に答えた。

「ありがとうございます……痛いところはあります……大丈夫です……」

「そうか……よかった。じゃあもう一度お休み……」
さっきと同様、額に指をあて美樹を眠りに落とす。

「コレは……すばらしい！彼女を誰が『作成』したんですか？」

「あ……ああ、グループ内の人物だ……」

興奮醒めやらぬブレンは声が知らず知らず大きくなる。

「素晴らしいですよ！完璧だ！何の種族を使ったかは解りませんがこれほどに……精神面に異常を来していないキメラは初めて見ました……」

素晴らしく大量で純粋な魔力を使って彼女を作りあげている……素晴らしい」

この何の変哲もない小娘が完璧なキメラ？

処女だったら売り物の一人にでもしようと思ったが思わぬ商品を手に入れた……リキウスは持つてきてくれたのかもしれない。

「思いの外、できが良くてよかったよ」

「Mr. 滝山、彼女は誰が？」

「今は言えないが……グループ内の者だよ」

「そうですか……」

魔族が人間界に来訪する方法は大きく分けて二つある。

一つは人間による召還。

これは術者の力量によって召還される魔物の格が決まる。

人間の力では歴史に残るような稀代の魔術師でない限り貴族階級の魔物を召還することは出来ない。過去に戯れに大物魔族が小物に混ざって

召還されたケースもあるらしいが飽くまで稀ではある。

もう一つは空間のひずみを利用し人間界へ降り立つ方法があるが、この空間のひずみを通れるのは人間界に影響を及ぼせない程の力量……

つまり小物しか通ることは出来ない。

よって、人間界に今いる魔族たち・ブレンやレオンも・・・そして二人やインペリアがリクルートしてきた魔族の者たちも人間よりは腕がたつが魔力的には「そこそこ」な者たちばかりだ。一人、悪魔族長役の紳士はいまいち力量が掴めないところがあつたがそれでもこれほどのキメラを作成できる器ではなさそうだった。例外的に、王族クラスになれば自らそのひずみを作り出して魔界と人間界を自由に行き来できるが、よもや王族クラスの魔物が人間のために

動くことなんて考えられない。

・・・ってことは・・・

もう一度、深い眠りに落ちているキメラの少女を見やる。

これを作ったのは誰だ？

組織の人間ではないだろう・・・

滝山はとんでもない少女に手を付けてしまったのかもしれない。

この娘のバックグラウンドは危険だ・・・

確かにここでの報酬は魅力的だったが危険が迫っているのならば

そろそろ潮時かもしれない・・・

ブレンは賢明だった。

賢明にも自然な形で滝山に挨拶をしそのまま部屋を後にし、逃げ出したのだった。

オカミを慌てさせるために「商品画像」でも添付したほうが効果的だったかしら？

商品を保管する魔界の屋敷で、メイドたちが売り物用のヘアメイクを施されている美樹を座り物憂げに眺めながらリキユスカは心の中でつぶやく。

大学にて堂々と私信を閲覧した際に入手した彼のメールアドレスにはメッセージを送信しておいた。

「リキユスカ様、ドレスをお選びになりますか？」

愛らしいメイド・・・人型の下級creatureだろうか・・・

が白いローブ、

赤いカクテルドレス、濃紺の振り袖、モスグリーンのドレスと次々にベッドに並べてリキユスカの意見を待っている。

美樹をちらりと見て

「そうね・・・グリーンがいいかしら・・・」

と深く考えずに口から出た。

インペリアもグリーンのローブが似合っていたわ。

タカクはインペリアと到底似ていない。

どんな彫刻家をもつてしても表すことが不可能だろうと言われた

その美しい顔・すばらしいスタイルを思うとタカクは少女じみており女性の艶やかさが感じられない。

しかし愛らしいことは確かだ。

魔力を今は感じることはないが、creatureとして成熟してくれば

やがてはセイレーンらしくなるかもしれないので、全てが終わったらタカクをセイレーンの里に連れて行くのもいいかもしれない。

東洋系のセイレーンは一族始まって以来だ。

郷里の仲間たちはこのチャーミングな新入りを歓迎してくれるだろうか？

リキユスカの忘れ形見と知ればみんな大事にしてくれるだろう。

取り敢えずは大事な人質として大事に保護し、

オカミには明日のオークションを「荒らし」てもらおう。

「この娘は明日のオークションには出品しないわ。

だから今日はドレスとメイクの色合わせだけで」

メイド達に指示し美樹の髪にターコイズの簪をさしてやった。

（可愛いわ）

確かにセイレーン特有の艶はないが愛らしく可憐だ。

そんな美樹に満足し

「あ・・・」

次の指示を口にしようとした時に滝山の気配を感じ言葉を止めた。

「・・・ここに来るなんて珍しいですわね、ミスター滝山」

滝山がドアを開けると同時に部屋の入り口に背を向けながらリキュスカは言葉を投げる。

そんな彼女に驚きもせずに

「たまにはね。急遽、明日の商品が増えたからその報告も兼ねて・・・ね」

とよく通る甘い声で返事が返ってくる。

「商品？彼女は売りませんわよ。」

いつもは感情がない声に今日は不自然な穏やかさがあり不吉な予感がした。

細身のネクタイはスーツ同様に彼のために仕立てた一点モノだろう。特別長身というワケではないがバランスの良いスタイルにファイルを手にし気怠げながらも自信に満ちた佇まいは何だか男の色気を感じさせる。

「彼女を隣の部屋へ。あ、荷物も一緒に持って行ってあげて」

リキュスカはメイドに指示し人払いをすると滝山は満足げに次の言葉を放つ。

「リキュスカくん。君も壇上に上ってもらおうよ」

至極落ち着いた声、にこやかで完璧な笑顔。

「インペリア君なき今は君の利用価値がひどく下がってね。」

私の組織ではオルゴールドールは必要ないんだよ。

君は君を必要とする者の元へ行ってもらう」

（利用価値が無くなったので寝首をかかれないウチに金に換えるってわけね。

いつかはそうなると思っていたけれどオカミを組織に取り込めると見切り発車するつもりだとは・・・）

「タカクを盾にオカミを働かせるわけね」

「そう、人間も魔物も大事な人を守るという古典的な観念があるみたいだからね」

「貴方にはないの？」

この男にも父や母が居るはず。

それにもしかしたら妻や子供も。

この男が普通の幸せな家庭を持っている図が思い浮かばないようなこの偽物の笑顔で表面上は何の問題もない家庭を築いているような・

リキウスカには滝山がわからない。

そして解りたくもないように思える。

「わたしに家族？面白い質問ですね。

私も人間なのでちゃんと父と母が居ます・

いえ、居ましたと言うのが最適でしょう。

父は巨大な滝山グループを束ねる多忙な企業人間。

母は旧家出身で若い頃は映画女優をしていたお嬢様、そんな家庭でしたよ」

「今は？」

この男にも普通の幼少時代があったと思うと何だか不思議な感じがする。

「ご存じのとおり父は心筋梗塞で若くしてこの世を去りました。

母は表向きでは長期療養のために郊外で長期滞在となっていますがその実、

精神に異常をきたしましてね、病院で隔離しています」

「至極普通とは言えませんがそれでも幸せな家庭だったんじゃないですか？」

「ええ、表向きは。

会社トップの父に元女優の美しい母、そして一人息子であった私は幸い

将来の滝山グループトップとして決して恥ずかしくはない経歴を築きました。

しかし母には女優時代から付き合っていた俳優崩れの愛人がいました。

そして私が成人すると同時に父に毒を盛って殺し、その愛人と一緒になろうとしました」

淡々と映画の内容でも話すかのように滝山は語る。

「長い時間、女性に立ち話を強要するのも何ですからどうぞ腰をかけて下さい。

ベッドでもソファでも。」

リキウスカはベッドに腰をかけ、滝山もそれに習い隣に腰掛けた。二人で並んで座り、くつろいだかのような図はまるで旧知の友か恋人同士のようにも見えたかもしれない。

しかし二人は雇い主と配下。そして店主と商品。

「浅はかな考えです。」

母は知り合いの医者を買収し心筋梗塞を促進するような血液凝固因子を用いて少しずつ父の身体を蝕ませていきました。その結果、父は母の思惑通り莫大な遺産とともに帰らぬ人となりました。

私が二十五の時です」

「……お母様は？」

「母は愛人に入れあげてましたがその愛人にとって母は付き合えば金をくれる

数あまたの恋人の一人だった。

しかし莫大な遺産付きの再婚は魅力的だったみたいです。

一度わたしにも挨拶に来ましたよ。

なかなか面白いシヨウでした。母とは釣り合わない何とも惨めな男。

若い頃はさぞや男前だったのかもしれませんが、長い日陰生活で卑屈な空気

が体臭のようにまとわりついていました。生粋のお嬢様だった母と並ぶと

使用人と奥様にしか見えない……滑稽な図でしたよ」

「その男はどうしましたの？」

「私は母がどんな人生を歩むのもべつに構いませんでした。

母の罪を偶然知ってしまいましたでしたが知った時にはもう

父は助からないであろう状態でしたし……。

しかし母は結婚するにあたり自分が犯した罪を未来の旦那に話しました。

そうしたらその男は結婚したらその罪を警察に告発して

遺産を独り占めにしようと思いました」

それで人間不信に？

この男の異常なまでの冷静さと無感情は母の愛憎劇に嫌気がさしたから？

「着眼点がありがちとは言え悪くはありませんでした。

ただやはり少々頭の悪い男だったのでその計画を酔った拍子に仲間に話してしまった。

そしたら甘い汁にありつこうとした仲間は母を直接脅迫してきました。

母も折角証拠が残りにくい方法で手を下したのですから

もっと毅然とした態度でいればよかったのに……

母は愛人を問いつめました。

愛人はそんな事は知らないと一点張りでしたが丁度その言い合いの最中に

愛人の若い別の恋人が入ってきました。

愛人の若い恋人は母の目の前で男を刺し殺し自分の胸も包丁でひと突き……

無理心中でした。あっけないものですね。

そして母は精神に異常を来し入院、愛人の仲間が一度私の元へも脅迫まがいな事を言いに来ましたが丁重におもてなしました」

「おもてなし？」

「……ええ。彼は二度と悪いことはしないでしょ」

しないと出来ないは違うのじゃなくて？ミスタータキヤマ。

彼が何故、過去をこんなにするすらと話したか解らない。

もしかしたらこの事は彼にとってそれほど秘密にすることではなかったのか？

リキウスカには解らない。

日本という土壌で滝山のような家系に生まれたものにとって、そういったバックグラウンドは通常なのか珍しいのか・・・。

まだ人間界の日が浅いリキウスカには解りかねた。

「貴方は・・・」

なぜこんなにも魔界に深入りするの？

魔族と交流を持った人間は得るものが多ければ多いほど不幸は大きく降りかかるということをこの聡明な男が知らないはずはないだろう。

「不思議に思いますか？こんな人間を」

滝山は寂しそうな顔と冷淡な顔とを交互にみせながらリキウスカに向き直る。

「私は魔界にある資源と人材が目的です。

そこには無限に思える可能性と巨万の富への駒があります。

しかし・・・」

未知に魅せられた男の告白？

金と未知の世界への興味がいきすぎただけ？

「・・・しかし危険が伴っていることも知っています。

幸い私には今は守るべきものがないので攻めの体勢でいかせてもらいます」

さあ、昔話はここまでです。

滝山はベッドから立ち上がり先ほど見せたのと同じ少し寂しそうな表情で

リキウスカをみやる。

「ミスター、彼女をホストルームまでお連れするように」

ミスター？あの悪魔族の男！！

他の偽族長たちとは違いどこか力量の読めない謎の男・・・
ミスターと呼ばれる初老の紳士が息子とも言える年齢の滝山の指示

に従っている図は

何か不思議な光景に思える。

「貴方・・・ミスターが名前？」

リキユスカをエスコートするように自然な仕草で腰に手を添え促すミスターからは不気味な程に魔力を感じられない。

「名前？そんなものはありませんよ。」

ただ便宜上そう呼ばれているだけです。

わたしはわたし。必要だから居る。ただそれだけの存在です」

「あなた程のcreatureが何故人間に使役されているの？」

「さあ、何故でしょうね。」

それを知ったところで貴女の状況は変わらないのでは？」

「そうね」

「拘束する必要はないでしょう。」

どちらにせよ貴女はミスター滝山には逆らえない」

「そうね、この忌々しい札のおかげで」

リキユスカの極限まで抑制されたcreatureとしての感応能力が不思議なことを感じ取った。

「貴方・・・この札を作ったの・・・貴方なの？同じ臭いがするわ」

ミスターと呼ばれる紳士は優雅な笑みを浮かべ

「その問いは近いけれど遠いですね。お嬢さん、なかなか良い嗅覚ですよ」

と答えになっていない答えを返す。

「リキユスカ君、君も他の商品同様ドレスアップするかね？」

必要ならばメイド達を呼ぶが」

「ふふ・・・その必要はありませんわ。」

キャリアガール風のcreatureも珍しくてよろしいのではなくて？」

「流石、心得ているね。じゃあ、良い買い手が付くことを願っているよ。」

君の仕事の引継は岡見君に頼むから心配はいらないよ」

状況は最悪？

いいえ。今までだって決して良くはなかったもの。

あまり変化はないわ。

ただ心配なのは妹・・・タカク・・・。

彼女はちゃんと無事オカミに助けてもらえるかしら？

リキユスカは歌う。

タカク・・・美樹のために。

封魔札のせいでその歌声に魔力が込められることはほとんどなかったが

小さな声でセイレーン族を賛美する民族唱歌を歌う。

彼女の中に細くでも流れているセイレーンの血が彼女に力を与えま
すように。

リキユスカの声はわずかではあったがゆっくりとそして

確かに屋敷中に染み渡っていった。

19. 裏切り（後書き）

段々佳境に入ってきました！
感想お待ちしております。（ぺこり

20. 宣戦布告（前書き）

大学のメールセキュリティって結構甘いですよねえ

20. 宣戦布告

週の最中、中だるみの水曜の朝は研究室へ向かう足取りがやや重い。しかも今夜はジムと連れだってオークションへ行かなくてはならない。

その昔、人間界に來たばかりの頃は京介もオークションで数々の美しい芸術作品を競り落とし、コレクションしていた。

それらの美術品の数々はさすがに大学生の一人暮らしの部屋には似つかわしくないのである物は魔界の屋敷に、

ある物は美術館に寄贈してあった。

午後には学校を抜けて魔界に行き取り敢えずは

タキシードを取ってこなくては・・・

と一日のスケジュールを考えながらいつも通りパソコンを立ち上げると同時に

塩原が隣に腰かけてくる。

「岡見・・・この前一緒に歩いていたのって経済学部の竹来さんだよね？」

「知り合いなんですか!？」

立ち上げる機械音と重なった質問に驚き、塩原をまじまじと見る。

「いんや、竹来さんの友達の彼氏って弓道部じゃない？」

弓道部の飲みに来てたって塚田がいつていたよ」

弓道部に所属している同級生の名が話しにあがった

「超可愛いコでしょ？」

彼氏いないし、飲みでも男が何人も群がったけれども

結局誰も携帯番号聞けなかったみたいだよ。

岡見すごいな。」

「すごいなって程でも・・・」

「え？彼女じゃないの？」

「友達ですよ。バイト先一緒だったんで」

へえ・・・と塩原は何かを考え

「今度、飲みしようって伝えておいて」

それだけ言い残し何やら嬉しそうに実験台に向かっていく。

美樹はどうやら他学部にまでも目立つ存在だったらしい・・・

まあ可愛いしね・・・にしても全くあの先輩は・・・

苦笑しながらパソコンに向かおうとすると今度はその行動を携帯電話話が邪魔してくる。

「あ・・・昇迦じゃん。めずらしい・・・」

あ・・・やべー・・・明日の授業、今日に振り替えたんだっけ！

夜はオークションだから日付ずらしてもらわなきゃ・・・

はい、岡見です。

形式に則った受け答えをしながらいいわけを考えていると電話の向こうで昇迦が息を切らしているのが解る。

「どうした？落ち着け。何があったんだ？」

ちよっとした用事での休講って内容ではなさそうだ。

「先生・・・一島さんが・・・桜ちゃんが・・・」

慌てているような憔悴しているような声色。

電話越しなので正確な表情は解らないがタダ事じゃないことは十分に伝わる。

「行方不明なんだ・・・」

嗚咽が続く。

お嬢様学校に通う少女・・・堅い家柄・・・真面目・・・美少女・・・

「まさか!!」

「先生・・・俺・・・」

「落ち着け、昇迦。この事は警察に届けたのか？」

「桜ちゃんに限って家出なんてことはないだろうけれど・・・

まだ一日しかたっていないからたぶんまだ言っていないと思う。

今、桜ちゃんの友達に親が聞き回ってるって・・・」

「他にいなかった友達は？」

「いないみたい・・・」

月曜夜の塾に來なくて友達が家に電話したみたい・・・で・・・
・・・先生・・・ごめん、突然・・・でも・・・俺・・・」
言葉にならない。

日常の中に突然、恐ろしい可能性を秘めている非日常が舞い込むと人間はどうしてもそれにうまく対処なんて出来ないものだ。

「お前にも心辺りな・・・」

ツー、ツー・・・

どうしていいのか解らなくなつて頼れるところもなく

京介に電話してきたのだろうが、その電話は一方的に切られてしまふ。

昇迦の友達が・・・しかも真面目な美少女？もしかして日本でも・・・？

You got a mail!

いつのまにか立ち上がっていたパソコンの画面上に見慣れた表示がされ、

初めて見るアドレスだったがいつもの習慣でメールを開く。

しかしその簡潔な文面を見ると京介は悪態を付きたい気持ちに陥る。

「・・・状況は最悪だ・・・」

岡見京介様

可愛い恋人が商品にどれくらいの値が付くか

見てみたいかしら？

興味があったら滝山グループの門戸をたたいてみて

アドレスはTakiyama@・・・

ドメイン名からして誰でも取得できるフリーアドレスらしい。

しかもご丁寧に「滝山」を名乗っていた。

宣戦布告か・・・。

俺もなめられたモンだ。

ミス・セイレーンの敵はもらうってワケね。

オークションを内偵するまでもなく、はっきりと確信する。

「敵は滝山だ」

20. 宣戦布告（後書き）

いよいよ乗ります！！

21. 潜入（前書き）

乗り込みます。

京介に武運あれ！

21. 潜入

ジャズバンドの生演奏とあちこちのテーブルであがる嬌声、そしてルーレットを回す音やチップを動かす音……カジノにありがちな光景が繰り広げられている。

ドレスコードが敷かれているのか男性客は皆タキシードで女性客も皆イブニングドレスを着用しており、カジノ特有の欲に渦巻く熱気は感じられず

皆上品に遊びに興じていることから滝山主催の違法カジノに興じているその客層は

極めてハイクラスだと推測できる。

ここは都内一等地の大豪邸。

よもやその地下でこのような饗宴が行われているとは誰が思うだろうか？

しかも恐ろしい事にこの地下室は魔界と繋がっている。

繋がっている……というよりも共有している……

と表現するのが適切だろうか。

魔界からも、都内の屋敷からもこの共通の部屋に通じる術がかけられているようだ。

しかし人間が魔界に、そしてcreatureたちは地球には行けないようだ。

それにしても空間を歪める大術を……本当に滝山は人間だろうか？

そんな疑問を持ちながら、京介ももう長いこと袖を通してなかったタキシードに

身を包み居心地の悪さからタイを緩めたい欲求に駆られる。

隣にいるジムはさすがに着慣れているのが伺える。

「俺なんか場違いだよ」

苦笑しながらジムに耳打ちすると

「吸血鬼族長様が何言ってるんだよ。」

魔界でも人間界でも以前は社交界を荒らしていたクセに」

と茶化された。

これだから過去知りの友達はなあ・・・。

「昔は昔、今はいたいけな男子大学生だからね」

「・・・日本語って難しいなあ」

大仰に肩をすくめて呆れる仕草をする・・・

そんな二人に一見してボディィーガードと解る大柄な男二人が近付いてくる。

「今日はどういった目的でしょうか？」

言葉使いこそ丁寧だが有無を言わせない迫力が十分にある。

カジノゲームに興じるでもなく会場をうろつく男二人組を

警戒視するのは解らなくはない。

近寄ってきた男たちは外見はアングロサクソンだがこいつら・・・

おそらく悪魔族の下級悪魔たちだろう。

「ミスター滝山に招待されたんだが・・・」

動じる素振りもなくジムが招待状を出し渡し、

受け取った男は招待状を見やりちらりとジムそして京介に視線を向けると

「失礼しました。ミスター・パターンソン。どうぞどちらへ、御案内いたします」

思惑通り滝山グループは名前は知っていてもパターンソンと

面通ししてあるわけではないらしく本人確認も付き添いの京介への質問もなく二人を促した。

厚い胸板をゆったりとしたタキシードで覆っているが

その下にはホルスターに収まっている人間界の飛び道具・・・

拳銃を携えているのがはつきり解る。

この世界魔界で拳銃とは・・・人間界暮らしが長い下級悪魔らしい発想だ、

京介は茶化してここは古典的に口笛を吹きたい衝動に駆られたがぐっと我慢する。

艶のある革靴が深紅の絨毯を敷き詰めた階段に柔らかな音を響かせる。

反響からしてかなり地下も降りることになりそうだ。

（ここで一人は片付けるか）

目でジムに合図を送ると

「失礼」

一応は無礼を詫び、男の背中に掌を当て「眠れ」と気を失わせる。崩れる音が階上に居るもう一人の見張りに気付かれないように男の身体を抱きかかえその場に静かに座らせる。

「京介、何時間くらいで目が覚める？」

「多分半日はおねむしてくれるよ」

「こいつらも後で処罰対象になるかな？」

「協定違反を知っていたらね・・・」

ま、後はそれなりの機関にまかせましょ」

地下二階ではすでにオークションが始まっていた。

壇上には上等なスーツを着こなした滝山本人がオークションと

取り仕切るオークションニアに扮し、20名程の客・・・

カジノの客はほとんどが人間だったがこちらは人間と魔物は半々くらだろうか・・・

を相手していた。

地下とは思えない程に広く、壁の天使を描いたと思われる美しいリトグラフや

コーナーに配置されているガレの作品とおぼしき香水瓶、

それらの際だたせる暖かみのあるワインレッドのカーペットに

飴色の椅子が好相性で、サザビーズのオークション会場にも引けをとらない

贅と趣向を凝らした会場と言える。

この様な状況ではなかったらじつくりと鑑賞し腰を据えてオークションカタログを開くのも楽しいかもしれない。

しかし今日はそんなのんびりはしていられない。

おそらくこの屋敷どこかに美樹や他の被害者たちも居ると思われる。

「あのコ・・・キメラか・・・？」

興奮を抑えた低い声でジムがささやいてくる。

壇上を見ると巨大なトリカゴに入られている少年は

人間とガーゴイル族のキメラだろう。

もう自我を無くしている瞳には全く輝きがないが美しい顔と

背中から伸びる見事な羽がまるで神話にでてくる天使のようだ。

「キメラ・・・ガーゴイルだな・・・」

絞り出すように京介が言葉を発した。

おそらく死亡したガーゴイルの羽を美しい少年に付けたのだろうが
接合後、

与えた魔力が不十分だったせいかな少年は自我崩壊を起こしている。
ただの少女少女だけじゃなくこんなモノまで売り物にされているな
んて・・・

改めて美樹の身が心配になる。

美しい生きた彫刻を大富豪らしきアラブ系の人間が高額で競り落と
した。

次に壇上に引き出されたのは写真で見覚えのあった

長いハニーブロンドの愛らしい少女だ。

少女は目の前に繰り広げられている光景に驚愕の表情を浮かべ

おびえたように心持ち後じさる。

そんな姿が嗜虐性をそそり悪魔族の伯爵、男爵達が次々とコールを
叫ぶ。

人間が金・・・しかもドルで競り落としているのに較べ、

魔族達は様々な品物をコールしていることから

魔族は生け贄一人あたりを「何か」で引き替えているらしい。

「キメラ・・・生け贄・・・」

「そしてcreatureたちはそれと代償に魔具や魔界の鉱物を
払うのか？」

青白い顔で熱心に壇上の少女を値踏みしている悪魔族紳士の傍らには

七色に輝く金塊のような鉱物が麻袋いっぱい詰めてあり、他にも夢魔族と思しき好色そうな老人は従者に山のような魔具やら魔術書らしき古い書物やらを持たせていた。

「鉱物で？そんなの何の価値があるんだ？」

「新規原料・・・滝山グループは化学も重工業も主要産業だしな・・・」

低い声で京介はつぶやく。

滝山の狙いは魔族たちとの直接取引ではない！

ヤツの狙いは「魔界の資源とその未知性」だったのだ！！

「そんなののために・・・」

首だけで発見されたジェシカの写真が頭に浮かんだ。

半端者の魔物を使って少年少女を仕入れそれらと引き替えに魔界の「モノ」を手に入れ、鉱物類ならばその有用性を調査し道具類ならばそれを用いて魔術のたぐいを行う？

リンカーンを乱心させたのもこれらの道具で？

そして魔界紳士録もこの経緯で手に入れて利用した？

そう考えてもやはり「最初の一手」が謎のままだ。

未知の世界に無限の可能性を感じる、そこまではあり得る話だ。

まだ未知の部分が多い宇宙や深海を研究する者が多いことからそれが見える。

しかし魔界を？

もしも魔界に目を付けたとしてもどうやってここまでコネを作った？

（直接本人に聞くか・・・）

壇上で商品説明・・・少女のプロフィールを読み上げている滝山を見ながら

体中に温度の低い怒気が満ちてくるのがわかる。

殺さない程度にやりますか・・・

可愛い眷属である美樹を誘拐した罪はたっぷりと払っていただきましょう。

「京介、いつ近付く気だ？」

声を落としてジムが耳打ちしてきた。

「休憩になったら近付こう・・・もしかしたらヤツは俺を知っているかもしれない」

「だろうな。リクルートするにあたっての下調べはばっちりなんじゃない？」

名前・大学・・・もしかしたらスリーサイズとか」

「ついでに好みのタイプも調べておいて欲しかったな」

「今から直接要望書でもだしたら？」

「いや、用意されると口説く楽しみがないだろ？」

やっぱり自分からいくのがいいな」

「・・・確かに」

場違いなまでに余裕たっぷりの二人。

表面上はそう見えるがこの大術をかけた人物が滝山の手の内にあると思うと

実は二人とも落ち着きを装うのに苦労しているのだ。

そんなやりとりをしているとバニーガールの愛らしい若い女性型の下級悪魔たちが色とりどりのカクテルを銀盆に乗せ客に配って回り始める。

「どうやら休憩みたいだな」

「・・・だな。んじゃ最初の挨拶は俺、ミスター・パターソンがしますか」

ジャケットの襟を直し滝山に近づき

「ミスター・タキヤマ。今日はお招きありがとうございます」

大仰な仕草に強すぎるまでの南部訛りのある英語で話しかけた。

「ようこそいらっしゃいました・・・失礼・・・」

「ああ、パターソンです。」

ジム・パターソンですよ」

「ああ、ミスター・パターソン。失礼しました

こちらの会は始めてですね。

いかがですか？わたくしどもの趣向は」

滝山の英語は訛りも無く非常に流暢だ。

「すばらしいね。」

みんな粒ぞろいだ。美しい。しかも見事な身体だよ。
どういたぶろうかあれこれ悩むのがまた楽しいね。

生きたまま少しずつ食すのも良いし犯しながら狂わせていくのも
趣がある」

「いかようにも。お買い取りいただいた方のご自由に」

滝山はジムの穏やかとは言えない話にも眉一つひそめることなく切
り返す・・・

こいつ・・・同じ人間を何だと思っているんだ？

同じ人間。

こいつ・・・滝山は紛れもなく人間だ・・・。

じゃあこいつの裏にはだれが？

「ところで・・・実はミスター・滝山に会わせたい人物がいるんだ
よ」

「よろこんで。どんな人物ですか？」

「彼ですよ」

京介に目を向けると流石にその表情に動きが見られ

「なるほど・・・ミスター・パターソンの配下でしたか・・・それ
は失礼」

穏やかな笑みを浮かべ京介に洗練された仕草で握手を求めてくる。

「失礼、俺はアンタと友好を結ぶつもりはないんでね」

そうですか、さして気にする風でもなく滝山は肩をすくめ手を引く。

「あんた達がさらっていった友達を迎えにきたんだが」

「ほお、失礼。恋人かと思いきや友達だったんだね。」

彼女なら丁重なもてなしをしているよ。

なんて言っただって大事な岡見君との取引材料だからね」

「俺が断る、と言ったら？」

仮面のような慇懃な表情とは違い、

ふ・・・冷たい笑いを漏らした滝山は初めてその内面を見せたよう

に思える。

「キメラのお嬢さんには籠の鳥になっていたかどうかかもしれないね」

「へえ・・・自信家ですね。」

俺たちが力に訴えないって保証は？」

「友達のお嬢さんがどこにいるか解らないだろ？」

確かに正論だ・・・。

しかもキメラだと解るとはバックにいるCreatureもある程度は教養がありそうだ。

さっき売られていたキメラの少年も組織に作られたのかもしれない。

「友達を助けるために交渉の場に出るだろうって証拠は？」

「はは、助ける性格じゃなければここまで来ないでしょう？」

まあ幸いにして愛らしいお嬢さんだったので岡見君が来なかったとしても

有効活用させていただきだけですよ。

で、どうですか？

滝山グループは君を破格の待遇で迎えるよ？

どうだい、大学の研究室よりも設備もいいですしね。

滝山製薬に籍を置く気はありませんか？」

「生憎、進学組は就職活動の厳しさにはうといからね、のんきなモンだよ」

「creatureといえども学歴社会ってわけか？人間界は色々大変だろうに・・・」

滝山グループが色々バックアップしますよ？」

「・・・そうやってセイレーン族も組織に荷担させたのか？」

リキユスカの聖母の笑みがふと浮かんだ。

「彼女らも人間社会を知りたがっていたからね。」

語学、経済学・・・そして政治学まで色々と意欲的に学んでくれた模範的な

留学生達だったよ」

「・・・たち？」

怪訝そうな京介を見て滝山は考える。

もしかしたら、まだ岡見はリキユスカのことしか知らないのか？
そうか、インペリアと面識がないのか・・

ってことはこの手入れはインペリアの差し金ってワケでもなさそう
だな。

インペリアが組織から逃げ出したいばかりに岡見をそそのかしたの
かとも思ったが

やはり封魔札付きのセイレーンなんてただ美しいだけの紙人形・・
所詮は頭が回る生き物じゃなくその程度か・・

滝山は岡見の目的を推し量るべく言葉を選んだ。

「他にも魔界からの留学生を数名、支援しているからね」

「ただの留学ってよりも誘拐ノウハウをたたきこんでるんじゃない
？」

「残念ながら・・誘拐したのは私じゃないよ。

私は買っただけですよ。

そして仕入れた商品を売る手はずを整えた・・それだけだよ」

「仲介屋には罪はないと？」

京介と滝山の会話に合わせジムもわざとらしい訛り英語をやめる。

「未成年略取は犯罪だろうね。

しかし誰から買い取って誰に売った？

魔物？ばかっているだろ？証拠もないしね」

「人間の法には問われないって踏んでるわけか・・」

「異種族間協定に人間は批准していないからね」

そんなことまで知ってるとは・・滝山は本当に人間なのか？

人間だろうが・・じゃあ誰がバックにいるんだ？

滝山に魔界の法を教え、結界を張ったcreature・・

吸血鬼族？魔族？それとも人狼族？

瑠璃色のカフスの具合を神経質そうな指で直しながら

滝山は壁を背にするよう2, 3歩移動し立ち位置を変える。

「そして魔界では日本の個人情報保護法は適応されないだろうから

ね。

利用させてもらっているよ」

「でもちよっと使う名簿古すぎない？」

「さすがにそこまで吟味はできないよ。」

でも来客率は悪くはないよ。

少年少女のおかげで珍しい鉱物や道具を・・・

そして珍しい生き物のおかげでドルを手に入れることができるから結構良いビジネスといえると思うがね」

「たしかに・・・それで売っているモノが罪のない子供たちじゃなければ

俺ももう少し評価できたんですけどね」

「残念だねえ・・・君には是非とも来て欲しかったのに」

「交渉決裂だね。」

じゃあ私は悪役のセオリーに従うとしよう。

悪魔族・吸血鬼族・人狼族のそれぞれの長たちを

『説得』させることが出来たら私の元に来てください。

そして君のお姫様を助けたければ私の元で働くか力で彼らをねじ伏せてください」

じゃあ、また後ほど。

そうにこやかに言うのと、携帯電話を内ポケットから出し

「ゲストだ。クリスとレオン、そしてミスターをよこしてくれ」と短く告げ・・・・・・・・・・

「あっ」

息を呑む二人の前から忽然と消えてしまった。

「なっ・・・あいつ本当に人間か?!」

驚く京介に

「落ち着け・・・ってかちよっとお前疲れているか？古典的な方法で消えただけだよ」

ジムがコツコツと床を軽く蹴る。

「そうか・・・確かに俺・・・」

少し冷静さを欠いているみたいだな」

マジックの仕掛けのように床が抜ける仕様になっていたとは・・・
そんな子供だましの手に一瞬でも驚いてしまった自分を恥じる。

オークションアが消えてしまっっては、この会は一時中断なのだろうか
そんな事を意に介する者はここにはいないらしく客たちは
なごやかに休憩を楽しんでいる。

「悪役のセオリーに従うらしいな・・・俺らの歓迎部隊が来るってコト？」

「そうなんじゃない？京介、準備運動しておいた方がいいぞ」

「ジムこそデスクワークばかりで身体なまってるんじゃない？」

「お前ほどじゃないよ。甘ちゃん大学生さん」

軽口をたたき合える俺たちの余裕はホンモノだろうか？

いいや、そんなことはない。

謎の多い滝山のバックに二人とも表情には困惑を隠せない。

22. 衝突（前書き）

戦っています。

戦闘って難しいです。

22. 衝突

ボスの命令は迅速に行われた。

「俺は人狼族族長・レオン。」

そしてこちらが悪魔族長殿だ」

プラチナブロンドに薄い瞳の色が冷酷そうな印象を与える

自称・人狼族族長サマは誇らしげに自己紹介する。

現れた男たちは2人・・・二人とも以前ジムが持ってきた写真の人物だ。

滝山の電話内容では3人だったはず・・・残り一人は隠し玉なのか？
ぐにゅう・・・・・・

悪魔族長殿と紹介された男がすつと右手を挙げたと同時に
周囲の空間が歪む感触がする。

どうやら悪魔族長殿が何やらもごもごと唱えオークション会場内の
この周辺の空間を切り取り戦闘用の結界を作ったらしい。

（へえ。騒ぎを起こす気はないってことね）

この結界があれば客たちはこちらが何をしていても気付かずに
くつろいでいられるであろう。

「ハーイ、人狼族長様。」

お手合わせ願えるかな？」

人狼族族長様へ向けるジムの声にはかなりの怒りが含まれていた。

しかしそれに気付いたのは京介だけだろう。

レオンはこちらを一別し、東洋人と西洋人の優男たちを鼻で笑うか
のごとく

「怪我したいのか？それともマゾか？」

タキシードの上からでも厚い胸板が伺える。

「生憎、俺はどちらかというとサディストなんだ。」

まあ女性を傷付けるような行為をするってよりも

ベッドの上で女性の羞恥心を煽るのが好きなんだがな」

どうでもいい事を抜かしながらジムは指を鳴らしながら
レオンとの間合いを測っている。

お互いに相手の力量を推測しあっているのか・・・と思った瞬間、
二人は激しい拳のぶつかり合いを繰り広げた。

魔力をほとんど使うことがない力での押し合い・・・

ジムは人狼族脳みそ筋肉説を否定していたが

種族的にはどうも肉弾戦を好む傾向があることを京介は知っている。
さて、あっちは似たもの同士頑張ってもらいますか。

じゃあ俺はこいつか・・・

と上質のスーツを隙無く着込んだ壮年の紳士に向き合う。

相変わらず男は余裕の笑みを浮かべていた。

西洋人とも東洋人とも見える魅力的なロマンスグレー・・・

何かがおかしい。

確かに悪魔族なはずだがその波動が全く感じられない。

その実力は俺以上ってコトか？

京介は目を凝らすように男周辺の空気を読もうとした。

「君が私の相手か・・・それもよからう」

深みと深みが調和したバリトンは古いスパイ映画の主人公役でも
演じさせたらぴったりくるような声だ。

「オジサマにはこんなところよりも

ビジネス街で日本経済に貢献して欲しいね」

「ここでも一応は経済に貢献しているんだよ。

滝山グループの新規事業は実に斬新だね、

新たな世界を資源とする予定なんだよ」

「その新規事業には少年少女の生け贄は必須？」

「必須であってもなくても・・・

私には全く持って関係ないからかまわんよ」

その物言いに胸が悪くなるような感情を催す。

こいつに何を言っても無駄みたいだから

申し訳ないけれど消えてもらおうか・・・

もともと人狼族に限らず Creature は拳や力でモノを語る種族だしね。

いささか狡いが先制攻撃を仕掛ける。

インペリア直伝の足払い・・・

そしてその体勢から反動を利用して腹部への蹴り・・・

彼女にされた事をそのまま試してみると確かに

足払いが直撃した手応え（足応え？）はあったが

腹部への蹴りは空振りに終わり・・・

「ぐっ」

反対に胸部へ鈍い痛みが走る。

悔れない・・・気配が全くない・・・。

肋骨が折れているかもしれない。

いやな音が身体に響き灼熱で焼かれるような痛みが腹部に向かっていく。

京介の足払いを受け姿勢を崩した体勢から

京介に向け毒を含んだ炎を向けたのだろう。

恐ろしいことに、この紳士は結界を張るのにも

印を結び集中させた魔力を放出するのにもまったく「魔力」の増減が読めない。

動きも最小限度の動きしかしないので次の動作が読みにくい。

ふわりと浮かび接近してくると思いきや

その体勢のまま炎を指から生み出し京介に仕掛けてきた。

「お前・・・」

炎の応酬をかわしながら紳士に近付き京介も掌から炎をだし

焼き殺そうと試みる。

ぶわぁ・・・

確実にその青い炎は男を包み全てを焼き尽くす・・・はずだった。

「畜生っ」

炎をもろに受けても服の一片とも焦げることなく、

余裕の笑顔を浮かべている。

「この程度かね？」

紳士は息ひとつ乱さずに静かに聞いた。

「・・・まだまだ」

「何も面倒なことせずに従えばいいものを・・・

そんな難儀な仕事でもないしねえ」

「女の子誘拐する趣味はないんでね」

「はっはっはっ・・・君が社員になったら誘拐なんて端末な事はさせんよ。」

このビジネスの中核になってもらうつもりだよ」

「・・・冗談じゃねえよ」

両手を前にかざし意識を集中し・・・

今度は先ほどとは異なり大量の冷気を吹き付ける。

「年寄りは冷えが大敵？」

しかし白く煙る冷気の中からは

「少々冷房が効きすぎているようだね？」

最近和省エネブームじゃないのかね？」

全くダメージらしきものを受けた様子なく紳士は

自分の首に手を当て軽くもんだ。

悔しいがその姿はかなり洗練されておりスクリーンの中にも

その姿は十分に映えるだろう。

（・・・つくしよー・・・何ものだ・・・こいつ・・・）

吸血鬼ではない・・・人狼でもない・・・

恐らくは悪魔族であろうが・・・

（気配が読めない・・・まるで作りものみたいだ・・・）

作り物・・・？

・・・人形？人形！

そう気付くと符合がいった。

傀儡。

人の形をした生きた人形・・・

生かされている人形と呼んだ方が正しいかもしれないが。

ここまで見事な傀儡を作るのは今生きている中では
現・悪魔族族長リリスか前代族長にてリリスの父・サタンくらいだ
ろう……。

ゾンビなどに代表されるアンデット（死人返り）は
悪魔族の能力だ。

キメラは身体の一部などを他種族へ移植し生き返らせたり
他の種族へ作り替えたりするのに対し、

アンデット（死人返り）は死体もしくは元々生命の無い人形に
生命を吹き込む技術になる。

通常レベルの悪魔族がアンデット（死人返り）や
傀儡を作ってもその動きはぎこちなく脳部分は既に死滅しているか
元々脳に準ずる器官がないので知性はまったくくない。

しかし目の前にいる傀儡は喋るコトも出来れば
戦い方を考えることも可能とみられることから

明らかに知的レベルが一定以上である。

これ程の傀儡を作成できるのは王族レベル……
サタンカリリスしかないだろう。

どう考えても現悪魔族長が戯れで傀儡を作り
人間に与えるなんてないだろう。

ってことは……あんのクソ親父っ

サタンの人をおちよくるのが大好きな食えない性格を思い出し
悪態を付く。

どうもおかしいと思ったらヤツが後ろにいたのか……。

「ぐっ」

完全に集中するではなく考えながら男の攻撃をよけようとしたのは
甘かった。

男が指先から出した鋭い氷の柱を避けきれず京介の脇腹にざっくり
と刺さる。

しかし傀儡と解ればそれなりの戦い方がある。

勝算が見えた！

「んじゃ申し訳ないけれど・・・」

右手をかざそうとすると肋骨に鋭い痛みが走るが

治癒術をかけている余裕はない。

意識を集中して手に集まったエネルギーをそのまま炎に変え、

男の頭部目掛けて投げつける。

先ほどの身体全体を包むような広範囲の炎とは違い一点集中攻撃・

傀儡を作る時に必要な「核」が必ず頭部にあるはずなのでそこを狙った。

傷一つ付けることができなかった先ほどの攻撃とは異なり

今度の炎は確かに男の頭全体を包み焦げ臭い臭いと共に首から上が焦げ、

もげ落ち・・・

そこにはただの木塊となった紳士のなれの果てがあった。

はぁ・・・はぁ・・・

肩で息をしないと肺まで空気が届かない様に感じられた。

痛みを感じるのは右胸部と左腹部、そして背中には

火傷のような痛みがあった。

治癒術を使うべきか？

いいや、今魔力を減らすのはヤバいかもしれないし

すぐに美樹さんを探したい。

しかし・・・っていうかヤバい。

吐き気するわ寒気するわふらふらするわと貧血の症状がでている・

・。

そりゃそうだよな。

キメラ作ってリキウスカから受けた怪我治して、

またここで魔力使えばそりゃ限界近くなりるっちゅーねん。

畜生・・・適当に血補わないとホントやばいかな？

でも・・・

「適当で血吸えるほど俺も無節操じゃないんだよね」

倒れる時はせめてお姫様助けてから、ね。

京介が男が塵になったのを確認し終えた頃には

ジムは折角のタキシードとどこどこに汚れや破れを作りながらも
自称・人狼族族長をノックアウトしていた。

ジムはレオンから奪い取った鍵を渡し

「ミス・ヤマトナデシコはお前に任せるよ。

この会場の魔界側が商品管理室になっているらしい。

俺はオークション会場行って売られた被害者達を保護してくる。

滝山を追うのは後だ」

と踵を返していった。

京介は口の中の血を吐き出し鍵をジャケットのポケットに入れ
ジムとは反対方向へ歩みを進めた。

22. 衝突（後書き）

あとはラスボス！

23. 言霊(前書き)

相乗効果ってあるもんです

23. 言霊

美樹は甘ったるい香りの中で目が覚めた。

ゆっくりと重い瞼を開けると・・・見覚えのない天井が見える。

どこ・・・？私の部屋じゃない・・・。

依然、健康診断での採血により倒れて医務室のベッドで目覚めた時が思い出された。

しかし背中から伝わる感触は医務室のベッドにしてはふっくらし過ぎている。

「ど・・・こ・・・？」

口の中は乾いており、頭が妙に重い。

経験ないけれど二日酔いってこんな感じかしら？

とぼんやり考える。

2，3回瞬きをし、ゆっくりと体を起こすと

どこにも痛みを感じずに動くことが出来る。

ホテル？

寝かされていた大きな真鍮のベッドは羽毛布団らしく

ふかふかと気持ちよい。

同じく真鍮のとつてがついたアンティークなドレッサーは

かのセットかショウルームのように完璧に配置されている。

ふと視線を自分の身体に落とすと見知らぬ服を着せられていた。

ベッドから降りると毛足の長いカーペットが裸足を優しく包んだ。

壁にかけてある仰々しいレリーフの鏡をのぞき込むと

「わぁ・・・」

中世のデザインだろうか？

映画の中でしか見ることがなさそうなモスグリーンの豪華なドレスが見慣れたハズの自分を包んでおり、広く開いた胸襟りが何だか気恥ずかしい。

「すごおい・・・」

自分では決してしないような濃いメーキャップに

クラシカルなアップスタイルがまるで別人のように仕上げている。

部屋を見渡すと大きなソファの上には

数点のドレスが掛けられている。

（誰かが着替えさせてくれたのかしら？）

今更ながら何もされてないか不安になってきた。

どこも痛いところないわよ・・・ね？

自分の身体をぺたぺたと触りながら確かめていく。

多分・・・大丈夫・・・かなあ？

えっと、知らない男に声をかけられて・・・

そのまま記憶がなくて・・・

考えれば考えるほどに状況が掴めない。

ドレスに紛れてソファの上に見覚えのある自分のバッグを

見つけほつとする。

携帯があれば・・・と中を探ると

「あった！」

安心するのも束の間

「圏外・・・」

落胆する。

人間界ですらない魔界で携帯電話の電波が通じるはずもないのだが
美樹にはそんな事は思いもよらない。

気を取り直して部屋のドアを見つめそつとノブに手をかける。

全く回らないし押しても引いても全く動く気配がない。

「誰か！誰かいませんか！？」

ドアを叩きながら大声をだすが辺りには全く音がない。

通常だったらどんなに静かな空間でも風の音や外の気配などが感じ
られるハズなのだが全くそれがない。

どうしよう・・・ここってどこかしら？

頭がハッキリするにつれ不安が大きくなってくる。

私ってば死んじゃったの？ここって死後の世界？

もう一度部屋を見渡す。

趣味もよくすばらしい部屋だがそれでもとてもくつろぐ気分になんてなれない。

身震いしそうになるのを何とか抑え、

こんな時は・・・と京介の言葉を思い出した。

『取り敢えず落ち着く。なんなら歌でも歌っちゃう』

そうよ、こんな時こそ落ち着いて何か手を考えなくちゃ！

落ち着いて・・・落ち着いて・・・

えっと・・・多分私はまだ生きている・・・はず。

あの男の人に誘拐されたのかしら？

えっと・・・んー・・・どうしよう？

落ち着かなくなってきたてしまう。

そうだ！歌・・・歌！

京介の顔が浮かぶと何故かすごく懐かしい気持ちになった。

すう・・・と息を吸ってゆっくり歌を紡ぎ出した。

今日の朝、聴いた確か今売れているバンドの曲・・・

歌詞もメロディーもかなりうろ覚えだったが

確かにそれを思い出そうと努力している間だけは

今の状況を忘れることが出来る。

一緒に住んでいた恋人同士が別れ、彼女が寝ている間に

部屋を出ていく歌・・・

恋愛経験の薄い上に男性側から歌った詞を美樹が

感情移入することは難しい・・・

しかしたただたうろ覚えの単語をつなげながら歌を必死で紡ぎ・・・

「扉を開けたら」「おやすみ」といったキーワードを含む

その歌声は声が届かなくとも空気を振動させ辺り一帯に染み渡り・・・

そしてリキユスカの歌とシンクロし「呪い」を発動させていった。

24. セイレーン（前書き）

京介さん。楽しんでます。

24. セイレーン

会場から地上に出るとそこは旧フェリプス邸の真ん前にでた。

この屋敷の上に美樹が・・・

彼女だけではなくまだオークション会場に連れてこられていない控えの商品たちもここに在るとのことだ。

本来ならば懐かしいはずの魔界独特の濃密な空気が

今は何故か苛立たしく、旧フェリプス邸の古き良きドイツ建築を思わせるロマンティックな建物・・・

有名テーマパークのおとぎの城をミニチュアにしたような風貌も神経を逆なでるようだ。

「無事で・・・」

傷物になつては商品価値が下がってしまうので

大事に保護されている可能性は高い。

それでもやはり心配だ。

彼女の身に何かあったら・・・

俺はどう責任を取れるのか？

もしかしたら彼女にとって俺は疫病神かもしれない・・・。

古風な鍵を回しそつとドアを開ける。

（見張りがいるかもしれない？）

気配を探ってみたが全く生き物の気配が感じられなかった。

ただ唯一感じられるのは強力な結界の痕跡のみ。

あの傀儡は結界師としても超一流だったようだ、

既に過去形ではあるが。

「術者が死んだから消えたのか？」

普通は術者が死ぬと結界の効力は弱まり時間の経過と共にその力は次第に失われていく。

しかしこの短時間で力が弱くなったとは考えにくい。
じゃあ何故？

これは罨？

いくつもの可能性が頭に浮かぶがどれか検証しているヒマはない！

（罨ならば力業で突破すりゃいいか）

京介は静まりかえったエントランスに足を踏み入れた。

うずくまる人影に身を固くするとそれは寝息を立てて安眠しているメイドと思しき下級悪魔だった。

「ね・・・てる？」

他にも寝ているメイド服らしい格好をした女が廊下で寝こけている。

（これは・・・何なんだ？）

全く解らない。

しかし美樹の気配は感じられる。

この近く・・・この部屋かな？

ドアを開けると、広い部屋・・・

日本式に言えば30－40畳はあるだろうか？

そんな部屋のクイーンサイズのベッドの上、

見慣れぬドレス姿で美樹はぼんやりと座っていた。

「京介さん」

呆然としている・・・というよりもぼんやりとしいると表現するのがぴったりくる声色で美樹はその名を呼ぶ。見たところ大きな外傷はなさそうだ。

商品は大事に保管しておいてくれたのだろう。

「大丈夫？」

ほっとしながらも駆け寄った京介の首に美樹はひしと抱きついてくる。

いきなりということで京介の腕は行き場を無くしてしまう。

「怖かったの・・・」

ぎゅ・・・と京介の首に回した腕に力がこもる。

そっと細い身体を抱きしめ返すと香水らしき甘い香りが

鼻腔をくすぐる。

「ごめんね・・・怖い思いさせちゃって・・・」

腕の中の美樹が顔を上げ潤んだ瞳で京介を見上げた。
メイクのせいなのか？

濡れたような艶やかな口唇が清楚な美樹に色香を足している。

「京介さん・・・よかった・・・」

もう一度、京介の首に回した腕に力を込め

そのままゆっくりとベッドへ抱き倒してくる。

（おいおい、どうしたんだよ）

どうやら違って見えるのはメイクのせいだけではないようだ。
怖さで混乱しているのか？

もう一度美樹を見やるが至極落ち着いているように見える。

「竹来さ・・・ん？」

何かの間違いかな？と色々考えてしまう。

「さん、はいらないし・・・美樹って呼んで・・・」

いつもよりも気怠げで甘い声が普段の美樹からは

絶対に出てこないであろう積極的な誘惑を示している。

すぐく嬉しいけれどもさすがにコレはおかしいよなあ・・・。

しかもこの妙に耳に残る声色にはどこか聞き覚えがある。

誘惑・・・声・・・

「あ、セイレーンか。」

って何で？」

今おかしいのは美樹の自我が抑え込まれてセイレーンとしての
美樹が表面に現れたのだろうか？

それはリキユスカが歌った歌と魔界の空気、

そして極限状態だった美樹の精神状態のせいとは流石に

京介は知るよしもなかった。

キメラでも立派にセイレーンするんだなあ

と美樹を組み敷いている体勢ながらしみじみと

納得してしまう余裕が自分でもおかしい。

そっか、人間界とちがつて魔界には邪気・・・

滝山の言葉で言えば瘴気に当てられてしまい、

よりcreature「らしい」姿になったってわけかな？

と、ここまでは推測できた。

いや、待てよ。

この屋敷全体は結界によって空気清浄がなされているから瘴気は無いはずだが・・・？

悩みつつも目の前の美樹の艶姿を見るとそれしか考えられなかった。って事は・・・あの結界を破ったのも見張りを眠らせたのも

美樹が言霊で子守歌でも歌ったのだろうか？

そんなトコがこのお嬢さんに可能なのか？

「本人に聞いてみないと真相はわからないなあ」

美樹を見下ろしながら、

どうせこのまま人間界に連れて行けば元に戻るんだろうしと気楽に構える。

（戻らなかったら困るけれどねえ）

でも・・・この妖艶な美樹が人間界に放たれたら何人の男を虜にし喰いモノするのかと少し嫉妬じみた気持ちで考えてしまう。

麗姿のその実、セイレーンは凶暴な肉食獣なのだ。

本来、その艶姿で男を惑わし肉に食らいつく種族・・・

キメラである美樹は人食するかは謎だが・・・。

（って言っても今、このお嬢さんに喰われるほど俺も弱くないし・・・）

魔性を感じさせるまでに妖艶な美樹を堪能するのもいいかもしれない。いい。

でもなあ・・・いつもの美樹さんに迫られるなら嬉しいけれどなあ・・・ってか迫られるよりも迫るほうが好みかも

そんなあほな思考を巡らせながら腕の中にいる美樹を見やる。

細い首筋や白い胸元、花卉色の唇を見ると

何もしないのも惜しい気がしてくる。

（いやいや、いかな）

折角誘惑してくれているんだし据え膳食わねば何とやら・・・
いや、今は美樹さんであって美樹さんじゃないんだから。

正気を無くしてる女性に何する気だよ、おい。

ひんやりとした指で京介の頬をそつと包み無言で見上げる仕草が
京介の支配欲をくすぐる・・・

しかしそれと拮抗して自制心がドレスに手をかけようとする行動を
制御する。

血くらいもらっておこうかなー、キメラ作成に魔力使ったし・・・
先ほどの悪魔族の人形との戦いで多くの魔力を消費した。

要するにお腹が空いている？喉が渴いている？状態なのだ。

しかも状況は最高。

ベッド上の行為に乗じて吸血を行う事が多い京介には
願ってもない場面なのだが・・・

しかも折角だしそのまま色々しても・・・

（でもねー・・・やっぱり・・・ね）

あー、俺って好きになったコにはなかなか手が出せないって
古いタイプなのかなー？

なんて冗談じみたひとりごちしながら

「色々なことは今度よろしく」

正気的美樹が聞いたらきょんとしてしまいそうな台詞をつぶやき
人差し指を美樹の額に当て

「おやすみなさい」

いつかした脳に覚醒の合図を送るのは逆の施術・・・

脳に睡眠を誘発する合図を送ると潤んだ瞳がゆっくりと閉じられ
そのまま「すー、すー」と静かな寝息を立て始める。

やっぱりキスくらいしておけばよかったかな？

昼間はいつもの美樹で夜はセイレーンの美樹・・・

理想かもしれない。

なんていささかオヤジな事を思いながら幸せそうに熟睡している

美樹をみやる。

「ま、色々今度・・・ね」

もう一度言いながらちよつと遠慮気味ながら額にキスをする。
今日はこれだけで我慢しておくよ、ひんやりとした頬を撫でると
美樹がちよつと笑顔になった・・・気がした。

もう一人のお姫様は隣りの部屋にいた。

他のメイドたちと同様に眠りこけていたが赤い振り袖を着せられ、
今時珍しいまでの真っ黒な髪はまるで大きな日本人形のようなだ。

真面目な美少女としかきいていないが状況からして

昇迦から聞かされた一島桜と考えて間違いないだろう。

調査開始以前の被害者がいるだろうがその者たちは
もうこの世にはいないだろう・・・。

「良かったな、昇迦。お前のお姫さんも無事みたいだよ」

腕に美樹を抱いているので桜は起こさなくてはならなかった。

（美樹の物らしき鞆も持ってるしね）

目立った外傷は見られず規則正しい寝息はなんら異常ないようにみえる。

おはよう。

少女の額に掌をかざし覚醒の合図を送ると

「・・・ん・・・」

小さく身じろぎし

「あ・・・」

うつすらと瞳を開ける。

「おはよう。えっと・・・違ったらごめんね。

一島さんかな？」

「はい・・・えっ??」

確かに目が覚めたら腕には気を失っている女性を抱きかかえた男が
立っていたらそりゃおびえるだろう。

しかも仰々しくタキシードまで着込んでいるし
自分は自分でいつの間にか着替えさせられているし・・・
一島 桜は大きく目を見開き怯えたように後ずさる。

「あ・・・安心して。俺、曙 昇迦の家庭教師」
なんて間抜けな自己紹介なんだ！

しかし桜は昇迦の名前に反応し

「曙くん！ ああ・・・今何曜日かしら？」

「え？ あ・・・えっと水曜日かなあ？」

全く持って場違いな質問に至極ばか丁寧に答えてしまう。

「水曜・・・やだ！ 何時！？ 曙君と引き合わせてもらえる約束を
やっと取り付けたのに・・・」

驚いて、慌てて・・・そしてはらはらと涙をこぼし始める。
何とも女の子ってのは忙しい生き物だ。

ってか自分の安否より先に曜日を確認するって・・・大物だなあ。

でもそうか・・・このコも昇迦の事を・・・

昇迦が真面目になる日も近いってことかな？

京介は苦笑いしてしまう。

「あ、昇迦心配していたよ。約束は大丈夫だよ、今度でも。

ね、無事で良かったね」

「あ・・・私・・・どうしてこんなところに・・・？」
今更かい！？

「えっと・・・覚えているコトないかな？」

「覚えていること・・・学校帰りに・・・」

ホストみたいな男の人に声掛けられて・・・それから記憶が・・・

「
ふう・・・ん。」

ホストみたいな男ねえ。

そいつが少女たちを・・・そして美樹を誘拐したのだろうか。

「どこか痛いところとかない？」

「・・・大丈夫です。ただ・・・この振り袖は・・・？」

「さあ・・・何だろうねえ？この人もこんなドレス着せられちゃってるし・・・」

誘拐犯の趣味かねえ？」

美樹を見やりとぼけた笑顔を見せる。

桜も緊張が解けたのかつられて笑顔になる。

「えっと、もしかしてあのソファにかかっている服って君のかな？」
ソファの上には無造作に学生服らしいものが投げ出されている。

「あ、多分そうです。」

じゃあ着替えます・・・えっとここは・・・都内ですか？
誘拐犯は？」

「じゃ、着替える間はお部屋出てるね。」

んと・・・誘拐犯は取り敢えずは大丈夫だよ。

ちゃんとお家まで送り届けるから安心して・・・ただねえ

不安なのは君のご両親やまわりのみんなが大騒ぎなんだよねえ」

どうしょ？と京介は肩をすくめて見せる。

「警察に？」

「うーん。恐らく警察にはまだだと思っただけけど・・・」

これが桜一人だけだったら記憶操作すれば万事解決だが

今回は両親に始まり昇迦など友人たちにも話しが回ってしまっている。

（そんな大人数に記憶操作ってのもなあ・・・）

うーん、と頭を悩ませていたら

「京介、お前もたまにや人を頼るってことを覚えるんだな」

背後からジムの呆れ声が聞こえた。

「あれ？ジム」

「あれ？じゃないだろ、京介。」

会場の方は呼んだ部下たちに任せてきたよ。

誘拐された被害者たちは各家庭に返し誘拐された間の記憶は消しておくように指示しておいたよ

オークション会場にいた少女が3人、

少年2人そしてキメラ一人・・・

行方不明者数とも合致した。

彼女を入れてこれで全部だろう」

腕に掛けていたジャケットをキングサイズのベッドに投げ自らも腰掛ける。

「今悩んでいるのは要はそのお嬢さんの記憶と両親、

友人数名の記憶操作すればいいんだろ？」

それくらいならば俺の部下にやらせるよ。

友人たちは電話を媒介として術かければ手間もかからんしな。

お前は少し休めよ。まだ滝山が残っているんだしな」

そう言うジム自身にも疲れが見える。

「そっか。んじゃお願いしちゃおうかな。

ってことで一島さん、着替えてくれるかな？」

このお兄さんの部下がちゃんと君のお家まで送り届けてくれるから。

あ、安心してね。俺たちは・・・その・・・誘拐犯とは違うから」

そういえばちゃんと京介たちの立ち位置を説明していない。

桜にとっては京介らも誘拐犯も変わらなく映っても仕方ない。

「いいえ。曙君のお知り合いなんですよね。

だったら信じます。」

きっぱりと言い切る桜は何だか頼りない外見よりも

しつかりしているように見受けられる。

それとも恋する乙女は強いってやつ？

桜はジムの部下である人狼族の女性に伴われ人間界に戻っていった。

24. セイレーン（後書き）

何か京介の性格がだんだんオヤジくさくなってきました・
ちなみに性格のモデルは作者自身です（汗

25. 封魔札（前書き）

京介の以前のお話は

Egoistic RealityとMemory of the treeに出ています。お時間あったら是非読んでみて下さい

25. 封魔札

「滝山はまだ見付からないの？」

「ああ、オークション会場にはいなかった・・・
おそらくこの屋敷だと思うのだが・・・」

「うーん、んじゃ、定石通り・・・最上階か地下室かな？」

「あんな、ゲームじゃないんだから」

「あれ？やっぱりダメ？」

軽口を叩きながら人の気配を探りつつ廊下を歩く。

美樹をジムの配下に頼むか悩んだがここは自分で責任を持ちたいと思

抱きかかえたまま連れて行くことにした。

「しかし・・・見事にみんな寝こけているな・・・
一体どうして・・・？」

「俺もわからないんだよねえ」

入った時にはもうみんな夢の中だったからなあ」

びたり、二人の歩みがある部屋の前で止まる。

ドアの装飾が他よりも凝ったレリーフになっていることから
どうやらこの部屋はホストルームのようだ。

「ここか・・・？」

ジムは声を殺し京介に目配せする。

この部屋から・・・確かに気配がする・・・

しかしこれは人間の気配では決してない。

Creature?

まだ他に？

「取り敢えず開けてみますか」

「異議なし、だな」

そっとドアノブに手を掛け開けると同時、二人とも壁に身を隠す。
・・・が、中の気配は何も動くことなく辺りには静寂だけがあ

る。

二人とも目で合図し同時に部屋に踏み込むと

「やはり恋人を助けるためになら動きますのね。

良かったわ・・・タカクが無事で・・・」

滝山がいると踏んだホストルームには予想を反して

グレースーツの短めのタイトスカートからは見事な脚線美を覗かせる
キャリアガール風の若い女性が居た。

「君は・・・？」

「お会いするのは初めてですわね。

見覚えありませんの？」

って言っても姉とは少ししか似ていませんしね・・・」

姉？・・・銀髪・・・もしかしてインペリアの妹か！？」

行儀が良いとは言えないが丸テールブルに足を組んで座る姿は

惚れ惚れするほどに美しく・・・

顔立ちは似ているがインペリアの毒のある美しさを深紅のバラとす
るのならば

リキウスカはもっと瑞々しい・・・

どちらかと言えば大輪の白百合を思わせる美貌だった。

京介とジムは互いを窺いみる。

「もしかして・・・お姉様の敵ってヤツ？」

「そうしたいのは山々ですけど敵わないのは分かり切っていますわ

それに・・・姉は完全には死んでいませんし・・・

タカクの中で生きているのでしたらそれはそれで構わないわ」

お手上げのポーズをしながら大袈裟に肩をすくめながらも

京介の腕の中で無邪気に眠る美樹に笑顔を向ける。

「私は貴方とも貴方のお友達のみスター・ジムとも

戦うつもりはありませんからそんなに好戦的にならないで下さい」

「・・・滝山の狙いは魔界の資源・・・

君は？お金？名誉？」

「ふふ・・・私も魔界育ちなのでお金に価値を見いださせませんわ。

私は何を欲したでもない・・・わたしは・・・」

はらりと細身のジャケットを脱ぎ捨てその美しい指でシャツのボタンを外し・・・

「私が組織で働いているのはこれが理由ですわ・・・」

ベッドルームでの美人のストリップはかなり扇状的で半裸に思わず見とれてしいそうだったが

雪のように白いと形容するのがぴったりの背中を向けると・・・そこには痛々しくミミズ腫れを起こして肌に張り付く封魔札があった。

「なっ・・・」

「これは・・・」

京介もジムもその禍々しい図に言葉を失ってしまふ。

「・・・悪魔族の封魔札か・・・」

やっと口を開いたジムも凄惨さに二の句が継げない。

「誰が・・・まさか滝山が・・・？」

「そのまさかですわ。」

私はこのために彼に逆らうことが出来ませんの」

しゅる・・・シルクと思しき滑らかな光沢のある布地がおぞましい刻印を隠す。

「人間に・・・封魔札が使えるのか？」

「さあ・・・私には詳しい事は言えませんが・・・

ただはつきりしていることはこの札のせいだ

わたくしは滝山には逆らうことが出来ないということよ。

そして貴方にもね・・・ミスター・オカミ」

真っ直ぐな緑の双眸が複雑な表情で京介を見据える。

「えっと・・・ミス・・・」

「リキユスカよ」

「ああ、ミス・リキユスカ・・・

君自身が封魔されていたとしても護身獣が

君の敵を倒してくれるんじゃないの？」

インペリアはリンカーンのことを「セイレーン族の守護獣」と言っていた。

ならばリキウスカにも守護が付いているということではないのか？

「ふふ・・リンカーンが守護するのはクイーンただ一人ですわ」ということは・・

「セイレーン王族が・・」

「ええ。」

恥ずかしいことにセイレーン王族直系の2人とも滝山グループの手駒に甘んじておりましたの・・・」

テーブルに座り直しリキウスカは自嘲気味に視線を伏せる。

「ミス・リキウスカ。」

その札を取ることが出来ると言ったら・・・

君は滝山には従わないのかな？」

少し考え込んでいたジムは質問し続ける。

「もし・・・もしも、君を縛り付けているものがその札のみなら、この場で外しても構わない・・・

100%確証は出来ないが・・・恐らく出来ると思う」

「貴方に？」

・・・・・そうね。貴方なら可能かもしれないわね・・・

もちろん、私と滝山を繋いでいるのはこの札のみ・・・・」

滝山の独白を思い出す。

恵まれた環境で生きてきたはずなのに何故か寂しい生を生きているあの男の少し寂しげな表情。

しかし滝山が行っていることこれから行おうとしている事には全く賛同出来ない。

彼を慕う心ももうないだろう。

（じゃあせめて私の手で殺すわ・・・）

「お二人に頼める義理はないと解っているの。」

でもお願いします。この檻から出してください」

日本式に深々と頭を下げリキウスカは言う。

貴方に頼める義理はない・・・かあ、
インペリアも同じような事を言っていたなあ。

京介はインペリアの面影をリキユスカに見たような気がする。

「よしてくれ。ミス・リキユスカ。」

美人の手助けだったら頼まれなくても喜んで引き受けるさ。」

「え？ ジムがやるの？」

「当たり前だろ。京介がそれ以上力使ったら倒れるだろ？」

どうせろくすっぽ血吸ってないんだろうし」

「えーと、何ヶ月か前に血吸ったよお？」

「アレだろ、報告書読んだよ。ハンパ者の吸血鬼の血吸ったってヤツ。」

でもそんなんは吸い取った血以上に魔力を使って相手の血を浄化したから

結局はプラスマイナスでマイナスだろ？

無理はすんなって」

え・・・と、確かにね。

あれ？ 俺ってホント吸血鬼だったわけ？

京介は何だか頭を悩ましてしまう。

「そんなワケだから、俺がやるよ」

ジムはリキユスカに向き合い

「じゃあ・・・そこに座ってこっちに背を向けて・・・

いや、服はそのままでもいいから・・・」

と指示し掌に魔力を込める。

ぼわっ

周囲の温度が1～2℃上昇したかのような錯覚に陥る。

暖かみのあるオレンジの光がジムを中心に溢れだし部屋を満たす。

「・・・あっ・・・」

札が風化するのを感じると

リキユスカの口から小さな驚きの声が漏れると同時に

今度はリキユスカを中心とした銀色の光が周囲を照らしだした。

「これが・・・」

今まで封じられていたセイレーンの魔力。

今度は周囲の温度が急に下がったように感じる。

あふれ出る魔力が冷たい光となってリキユスカの周りにたなびく。

「ありがとうございます」

リキユスカは凜とした表情でジムにそして京介に頭を下げ丁寧にお礼を述べる。

「これでもう君を縛るものはないよ。

じゃあ、ちよっと手間だけれども滝山を捜すの手伝ってくれるから？」

ジムは優しくリキユスカを促し部屋を出る。

京介は思った。

（もしかして・・・）

このお嬢さんの魔力を戻すのは滝山の処遇を決めてからの方が良かったんじゃないか？）

と・・・。

25. 封魔札（後書き）

リキユスカさんもつと色っぽいキャラにしたかったなあとちよつと後悔です（汗

26. Denza Macabra (前書き)

封魔札をとってもらったりキユスカさん。
どうします??

26. Denza Macabra

「この部屋に？」

相変わらず緊張した面もちのジム。

先ほどの封魔札はがしで若干魔力を使ったものの目立った疲れはもう見えない。

「・・・ええ、おそらく。」

滝山はこの屋敷に居るときはいつもこの部屋を書斎として使っているわ」

そう案内された場所はリキユスカがいたホストルームから2階登った階の一番奥だった。

「開けて・・・大丈夫かなあ？コレ」

用心深い事を言いながらも大した魔力も感じないので

のんびりとしている京介の声はこの場にそぐわないようにも見える。

「ええ・・・おそらく・・・腕のたつ彼の護衛はもう居ないはずよ。

クリスが・・・吸血鬼族族長と名乗る男がいたけれど・・・

そんな強い人じゃなさそうだし」

リキユスカは表情を抑えた声色で説明しドアノブに手を掛け扉を開ける。

「やあ、みなさん。」

揃いも揃ってお目見えとは・・・

結局、わたしが揃えた駒は負けたわけですね」

滝山は落ち着き払った様子でマホガニー材のデスクから3人を見据える。

「手駒を倒し籠の中のお嬢さんたちを助けわたしのところまで来ました」

じゃあ、ここで私が出来ること・・・そうですね

では最後の足掻きってヤツを試してみますか」

かたん、とデスクの引き出しを開け取り出した札を

トランプのように扇状に広げる。

(あれが・・・リキユスカに張ってある封魔の札・・・)

「足掻くのは勝手だけでも、足掻く前に聞いてもらおうか。

ただの人間であるお前など今は全く驚異にはならない。

大人しく降参し我々の裁きを受ける方が得策ではないか？」

ジムは冷静に諭す。

「どの道・・・

裁きを受けても生き地獄になるのは目に見えてますしね」

逃げは私のポリシーに反するのですよ。

滝山はそう言い席を立ったかと思うと手持ちの札を京介の腕にある美樹目掛け飛ばしてきた。

「なっ！」

ぱーんっ

美樹の手前50センチでリキユスカは札をはたき落とし炎で焼いた。

「そう・・・解ったわ・・・改心する気はありませんのね。

じゃあ貴方に贈りますわ・・・恐怖のダンス(Danza Mac
abra)を」

高く低く切なく甘く・・・

異国の言葉が美しい旋律を紡ぎ、長い銀髪をたなびかせて歌うその姿は

芸術の女神そのものの様だが次第に滝山が苦悶の表情を浮かべ始めた。

「だめだ!!!リキユスカ!!!」

やっぱり魔力を解放するのが早かった・・・。

ヤツを殺したい気持ちは解るがもしもここでリキユスカが禁忌を犯して滝山を殺せば極刑は免れられない。

「うぐ・・・」

みるみるうちに青ざめ口角から白い泡・・・

そして次第に血の泡を吹きだした。

周囲を圧倒する程の濃密な魔力がリキユスカの瘦躯から溢れだして

きた。

「間に合わない・・・これが・・・」

セイレーン王族の力。

圧倒的な強さ。

今まで抑えられていたエネルギーが一気に吹き出したのだろう。

京介やジムですら全身に鳥肌が立つのを止められない。

がたん。

滝山は前のめりに倒れ二度と動けない物体となった。

26. Denza Macabra (後書き)

さよなら。滝山さん。
悪人結構好きです。

27. 悪魔族長リリス（前書き）

女は強いのです。

27. 悪魔族長リリス

「ふおっふおっ。

結構イイとこまでいったけれどやっぱ手を広げすぎたか」

どこからもなく声が聞こえてきたかと思うと3人の丁度真後ろに突然小柄な老人が現れた。

「サッサタン！！！」

「おお、京ちゃんか。お前相変わらずまだまだぼんぼんだなあ」
ふおっふおっふおっと独特の笑い方をし京介を茶化し

「ご隠居なんで？」

狐につままれたような顔で質問するジムに

「ジム坊や、隠居している身には娯楽は必須でな」
ふおっふおっ和高笑いした。

「そしてこりゃ見たことない別嬪さんがおるのお

姉さんは・・そうか、セイレーン族か。

いいのおセイレーン族は美女揃いだからのお」

ふおっふおっ・・・

京介は何だか段々腹が立ってきた。

「サタン！いくら前・悪魔族長だからといって・・・

戯れにも程があるでしょう！」

「ふおっ。

京ちゃん。怒るなかれ。

儂は異種族間協定に違反するような行為はしとらんぞ？

滝山には確かに封魔札と人形を与えた。

しかしそれは儂が彼から『対価』をもらったからじゃ。

それよりも・・・いいのかね？契約無しで滝山を殺してもうて・・

・」

そうだ・・。

サタンの戯れよりも今はリキユスカの大罪の方が大問題だ。

いくら理由があるとはいえ情状酌量という制度がないのが異種族間協定だ

「後悔しているのは楽な死に方をさせてしまった事だけですわ。どんな理由にせよ契約無しで人間を殺めるのは重罪・・・もちろん心得ております」

観念していたのだろう。

自嘲気味ながらも神妙にリキウスカはつぶやく。

いかなる事情があっても異種族間協定により裁判にかけられればこのままリキウスカは死罪・・・もしもうまくいっても生涯幽閉はさけられないだろう。

「でも・・・」

「いいのよ、Mr. オカミ。姉様の敵は一応取りましたし」
安心させようと見せる笑顔。

なぜだかその笑顔は美樹を思い出させた。

「お疲れさま、リキウスカ」

そんな空気をぴしゃんとせき止めた声・・・

書斎然とした部屋にはどう考えても似つかわしくない

ゴージャスな深紅のドレスにゴージャスな肢体、

そしてハニーブロンドの絶世美人。

「リリース！」

「大魔女様まで出てくるってことは

滝山のことは悪魔族でも追っていたのか？」

ジムの質問にはわずかに片眉をあげただけの仕草で答え

「リキウスカ、お務めお疲れさまでした。

異種族間協定委員会会長として、そして悪魔族長として

お礼を申し上げますわ。

滝山の処刑は協議会で可決され貴女にそれを命じたのはこの私・・・

そのことをもう隠す必要はありません。

この不良族長たちにも説明なさってももうかまいませんよ？」

「リリースさん・・・？」

リリースカは不思議そうな悩んでいるような・・・
不思議な表情を見せる。

そんな彼女にリリースはまるで姉のように穏やかな声で

「貴女のお姉様、インペリアとは幼少の頃の別荘で一緒に遊びましたわ・・・」

懐かしい・・・インペリアが亡くなって本当に・・・。

この件では随分辛い思いをしたのにこんな役を命じてしまった
私を許してね」

「り・・・リリースさん・・・」

インペリアの緑の双眸からクリスタルのように輝く涙が溢れ・・・
そのまま崩れ落ちる。

「・・・ねえ、他種族の介入を嫌う悪魔族が
セイレーンに助け求める？」

腑に落ちないジムはリリースに耳打ちする。

「ふふ・・・さあ・・・」

毒婦の甘い笑顔・・・

これはリリースに大きな借りが出来たみたいだ。

そんな慈悲深い大魔女様はくると振り向きその形相を阿修羅へ変えた。

「おーとーおーさーまー」

その迫力は怒れる竜のごとし。

ハニーブロンドが溢れる怒気でたなびいている錯覚すら見えるようだ。

「り・・・りりすちゃん・・・ね、怒らないで。

パパ反省しているから・・・ね？」

これがかの有名な恐怖の悪魔族長サタンだろうか？

そこには腰ぬかさんばかりにおびえる一人の中年男がいる。

「問答無用！！！！」

ばちーんっ

盛大な平手打ちが炸裂する。

ばき、ぼこっ、どさっ……

明らかに骨が碎ける音に肉が裂かれる音なども含まれている。

オソロシー……

さすが現・悪魔族長リリス様

その恐ろしさは父をも凌ぐ……。

「りりすちゃんっごめんっ……ぐあっ……」

ご愁傷様です……大魔女は怒らせちゃいけません……

ぼろぼろになったサタンにもちよっただけ……

ホントちよっただけ同情も……するかな？

いや、しないか。

27. 悪魔族長リリス（後書き）

もう少し!!

あと少しで終わりますのでいくばくかお付き合いを

28. 今後（前書き）

リキユスカさんの未来に幸アレ！です

28. 今後

「さて、お久しぶりですわね、京介。そしてこのコが……
可愛いコね……吸血鬼にもせず手も出さず……

大事なお人形さんにするの？」

美樹の額にそっとキスをしリリスは京介を見上げ、
紫色の瞳が神秘的な光を宿すその麗姿はいつみても色あせてない。
(ちよっと怖いが)

「どうって……出来る限りは人間として生きていく手助けするよ」
どの位の長さかは解らないが……

「彼女の身体はもう人間には戻せませんけれど……
異種族間協定法の例外として今回美樹さんを殺したことは無効・

つまり貴方に監督責任は問わないとしてもよいのよ？」

リリスならば出来るだろう。

なんと言っても一番の権力者だ。

しかも父・サタンの悪戯心が一枚噛んでいたとあっては
何かしないと気が済まないのだろう。

「ん……いいよ。配偶者じゃなく眷属だから自由もあるしね。
やっぱり彼女を死なせてしまったのは俺の責任でもあるから……

」
腕にいる美樹を見やる。

「このコ……おいしそう……」

いつの間にか現れた小さな花魁がじっと美樹を見やりぼそりとつぶ
やく。

「おいおい、彼女を喰い殺さないでくれよ？」

笑いながら花魁の頭を優しくなでた。

(いつまでたっても子供扱いね)

花魁の嬉しいような寂しいような複雑な感情を

いつものポーカーフエイスから読みとることは不可能だろう。

嫉妬よりはむしろ親愛の情をもって美樹を見つめ、その頬に指を当てた。

「じゃあ彼女のコトは京介次第ってことにしますわ。

あと・・・若干名、組織から逃げ出したメンバーがいるらしいですけれど

それらは私どもに任せてください。

この件についてと今後似た様な犯罪が起こりうる可能性について、人間界に根付いている貴方がたに助言を求めるので・・・

そのうち正式な要請が来ると思っていってくださいまし。

じゃ、私はこれで。そう言うとりリスは花魁と供にふうっと消えた。ほうけたようだったリキユスカも我に返ったように表情を引き締め居住まいを正すようにジャケットの襟を直す。

「私もどこかの学校で勉強し直して・・・

これからのセイレーン族のあり方を学びながら考えますわ」

インペリアの聖母を思わせるような笑顔とはまた違う・・・

リキユスカが京介とジムに見せたもつと希望に満ちた笑顔は

これからのセイレーン族の明るい未来を予想しているようだった。

「んじゃ、片付いたみたいだし・・・俺も帰るわ。

今夜の飛行機で本国戻らなきゃだしね。

よかったらミス・リキユスカ。

ウチの事務所で働きながらロースクールにでも行きませんか？」

「え？でも・・・そこまでは流石に・・・」

いきなりの申し出にリキユスカは実に和風な淑やかさで遠慮を見せる。

「なに、奨学制度を設けると色々周囲からの覚えもめでたいし、ね。

お互いのためになると思うから・・・

じゃ、詳しい話しは飛行機の中でも」

ジムはリキユスカの背中に手を添え

「京介、ミス・大和撫子はお前に任せたよ」

京介にはぽんっと肩を叩き二人して消えてしまった。
え???

ちよっと待ってくれ!

こんな時代錯誤なドレス着たままのお嬢さんをどうしろってんだ!?
置いていかないでくれって!!

美樹だけが平和にすーすーと寝息を立て続けた。

28. 今後（後書き）

もう少し・・・お付き合い下さい

29. アンナ（前書き）

アンナは可愛いけれど「おかん」なイメージです。
いつかメイドさんをテーマに書いてみたい気がしますV

29. アンナ

困った。

こんな大げさなドレス姿で日本に帰るわけにもいかない。

美樹が元々着ていた服はどこだろう？

と思ったがもう一度あの屋敷に戻る気になれず・・・

そして廊下で倒れていたメイドたちが持っていた服数点の中に

美樹がきていた服が混ざっていたことなんて京介は知るよしもない。

こんな時は・・・。

以前、雇っていたメイド・アンナを思い出す。

魔界の屋敷で身の回りの世話をしてもらっただけでなく、

明治・大正時代の日本では安奈と名乗らせ女中として

人間界にも連れて行ったメイドだったが現在は魔界で

のんびり仕立屋をしながら静かな生活を送っているらしい。

彼女の所にいくとただ一つ心配は・・・

「まあ、京介様！ ついに奥方様を連れてきてくださったのですね！

」

ドアを開けるとアンナは大きな瞳を更に大きく見開いて

きらきらとした笑顔で迎えてくれた・・・が、思った通りだよ。

「ちがうんだよ、アンナ聞いてくれ」

やっぱりアンナは激しく誤解している。

予想していたことではあったが。

「全く・・・

一体いつになったら京介様はアンナを安心させてくれるんですかねえ・・・

折角こんな可愛らしいお嬢さんとお知り合いになりましたのに」

やっと聞いてくれる体制になったアンナに詳しく説明すると

さも残念そうに肩を落とした。

アンナは最近、妙に京介の将来を心配している。

頼りない主人への忠告というよりも息子を持った母の気持ちなのだろうか？

「まあ・・・そのウチね・・・」

曖昧な答えをしながら紅茶をすすする。

「はあ・・・ま、これも縁ですから仕方ないですわね」

完全に適齢期の子供を持った母の意見だ、こりゃ。

あのね、俺、実年齢はイザ知らずただいま大学四年生だから・・・ね、一応。

「じゃあそういったことでしたら、このアンナ。

助力は惜しみませんわ」

話はいつのまにか軌道修正されており、数十枚のデザイン画を取り出してきた。

「さ、好きなデザインを選んでください。お仕立てしますわよ」
さ、選んでくださいって・・・。

さしてファッションに興味のない男に女性の服を選べってのは結構無謀だ。

え・・・と・・・。

これくらいかなあ、と選んだ服は白く清楚なワンピースだった。

これなら日本を歩いていてもおかしくないし

何より美樹のイメージにぴったりだろう。

「また大人しいデザインを選びますわね・・・」

コレなんてどうですか？」

アンナが指し示した図は・・・その・・・

確かに着てくれたら嬉しいけれども

これ着て町中を普通に歩いているのって日本なのかな？って・・・
もはや水着の域まで露出した服だ。

これは見たいけれど他の男には見せたくないって違うか。

「いやね、日本に帰るのだし彼女も目が覚めてこんな格好していたらシヨックだろうし・・・」

至極まっとうな意見を述べた。

「まあ・・・」

でしたらこのまま目覚めたら裸の京介様が横にいらっしゃるのは？

既成事実から始まる恋もアリですわよ！」

「彼女が聞いたら青くなるような事言わないでくれよ・・・アンナ」
疲れがどっと出てくる。

「幸せなんて結果論ですわよ。」

京介様、高貴な血を引いたキメラですし処女ですし
花嫁として迎えるにあたりなんら遜色ないですわよ？」

さっきまで縁だから仕方ないとか言っていたのにさ。

まあこんな事を言われるのは初めてではないので

それなりの対処法は心得ていて・・・

一番良いのは黙っていることだった。

「・・・まあこんな事言っても仕方がないみたいですしね。

じゃあ採寸させていただきますわ」

やっと終わった・・・。

「あ、運ぶなら手伝おうか？」

そんな発言にアンナはくすくすと笑いながら

「京介様、下級とはいえアンナも悪魔の端くれ。

華奢なお嬢さん一人ぐらい造作ありませんわよ？」

と言いつの言葉通り美樹の身体を軽々と抱きかかえ

隣の部屋へ消えていく。

「覗きたいのならはおっしゃって下さいな、

ご所望とあらばドア開けておきますから」

なんて余計な(?)言葉まで付けて・・・

(って見たいけれど見ていいわけナイだろーっ！)

心の中で盛大なツツコミを入れ冷めてしまった紅茶をすすする。

こうしてアンナの部屋を訪れるのは久しぶりで・・・

おそらく部屋に入ったのは日本で安奈と名乗っていた頃以来だった。
変わって無いなあ・・・アメリカンカントリー調のインテリアは

赤と白のギンガムチェックでまとめられていて

どこことなく以前美樹といったオムライス専門店を思い出させた。

まだあの逢瀬から一週間前後しか経っていないのに

何だかもうずっと前のように感じられた。

幾ばくかの時間、ぼんやりと部屋の内装を眺めていると勢いよく開いたドアとともに

「じゃ、わたくしは作業に取りかかりますわ!」

ドレスを脱がせシーツらしき白い布を身体に巻いたのみの美樹を抱き抱えながら

アンナが現れ、京介の座るソファに美樹を寝かせた。

「え?このまま?!」

「ええ、お部屋は十分暖かくしてありますしまたお着替えされるんですもの。」

じゃあわたくしは作業に没頭いたしますから待っていてくださいまし」

確かにあんなドレス着せるのも脱がすのも大変だもんなあ・・・じゃなかった。

あのね、そういった問題ではなく嫁入り前のお嬢さんを腕や肩も露わの霞もない姿のまま男と同席させるのはいかなものかとね・・・

と反論する間もなくアンナは工房のドアをさっきと同様、勢いよく閉め京介は取り残されてしまった。

しかし・・・このシーツの下はきつと何も着てないんだよなあ・・・

・
いかんいかん。見ちゃ失礼だし何より目の毒だ。

コツコツコツ、柱時計が規則正しく時を刻む音と

美樹の安らかな寝息だけが部屋に流れた。

手に取った紅茶を飲むでもなくただティーカップを持つだけという無意味な動作をしてしまう。

「ん・・・」

反射的に目を向けてしまう。

むきだしの白い肩がかすかに動き、唇から甘い声が漏れた。

（うわぁ・俺にどうしろと!？）

いや、どうもしちゃいかなだろうと極力別の事を頭に思い浮かべる。

（pHメーターの基本原理はファラデーの法則で・・・

ELISA法を確立する際は抗体濃度を・・・

シュレージンの猫が・・・古細菌の遺伝子配列相同性は・・・

・・・）

もう分野なんてお構いなしに頭に浮かぶがままに考えていく。

しかしそう簡単に興味をそらせることなんて出来ない。

「・・・京介さん・・・」

起きちゃった?と心配になったが相変わらず、

すやすやと肩が規則的に上下していることからそれが寝言だと気付く。

「・・・俺の夢・・・見ているの?」

そっと頬を手の甲で撫でる。

「ごめんね、怖い思いさせちゃって・・・次はちゃんと守るからね」意識がないと解っているが優しく話しかける。

彼女を京介と関わったせいで色々怖い目に合わせてしまった。

偶然とは言え京介の不注意で妖獣に殺されてしまい、

今度はキメラになったせいで・・・もしくは京介の身近にいたせいで誘拐されてしまった。

キメラ・・・余計なことにいセイレーンのキメラとして

魔界の邪気に当てられセイレーン化した姿を思い出してしまう。

（あーやつときゃヨカッタのか!？）

いや、いかなだろう。

・・・いかな。

極上の血が流れているその首筋よりも無防備な唇に目がいつてしまう。

（だから意識のない女性を何よこしまな思考の対象にしているんだ

って・・・)

「・・・だめだめ犯罪犯罪」

小さな独り言を自分に言い聞かせるようにつぶやくと

「淫行は親告罪ですから

お相手の方から同意を頂ければ犯罪にはなりませんわよ」

アンナが手に完成品をかけた姿で二人の後ろに立っていた。

「あああああんなっ」

「いかにもアンナですわよ？　どうなさいました？」

「い・・・いつからそこに？」

「先ほどからですわ」

「そ・・・そんな時は声かけてくれよ・・・」

「あら、御邪魔するほど無粋じゃございませんわ。

席外しますから続きをどうぞ」

「いや、しませんから」

がつくりとうなだれて答える。

「そうですか？　ではお着替えさせますわね。見ます？」

「いえ、見ませんのでお願いします」

「あらだらしのない。下着もサービスで仕立てておきましたから

良かったら起きて着ている姿を鑑賞してくださいまし」

ウインクしながら美樹を抱え奥の部屋へ消えていくアンナを見送り

「・・・はあ」

もう一度大きくうなだれてみた。

何か覚えのある香りがする・・・。

何の香りかしら・・・何か懐かしいような落ち着くような・・・

それが紅茶の香りだと思えば当たると美樹は重い瞼を開けた。

「逃げなくちゃ」

呟いた声はうまく口が動かずかすれた音にしかならなかった。

はっっ、ゆっくりと起きあがるとそこに人の気配を感じて息を呑んだ。

「大丈夫ですわよ。もう心配ないですわ、ここは私の家です」

「・・・いえ？」

「そう。貴女のことは京介様がちゃんと助けだしましたのよ」

もう安全よ、聞き覚えはないにしてもアンナの優しい声が

いくらか美樹の警戒心を解いた。

「私・・・」

「目が覚めた？」

アンナの後ろから京介の優しい声がする

「京介さんっ」

あ、岡見さん・・・と顔を赤らめながら言い直す姿が愛らしかった。

「こちらはアンナ、美樹さんを・・・その・・・まさかドレス姿で

人間界に戻るわけに行かなくて・・・手伝ってもらったんだ」

あ、もちろん着替えとかアンナがやったから安心してね、と慌ててつなげた。

「あ、服・・・」

ゆっくり身体を起こし、自分の身体を見てさっきの大仰なドレスとは違ってシンプルなワンピースを確認し・・・可愛い・・・とつぶやいた。

「気に入ってくださいました？アンナの力作ですわよ」

「似合ってると思うよ」

本音だが言葉に出すところとちよつと照れくさかった。

「ありがとうございます」

同じくちよつと照れ気味な美樹。

そんな初々しい二人をアンナは氣遣って席を外してくれた

（席外してくれてもここで何もしないちゅーねん）

「大丈夫？あの・・・色々・・・」

色々って何だよ？

自分で言っただけでツツコミいれたくなった。

「はい。大丈夫です」

本人も落ち着いているみたいだし詳しく聞くのは今度にしよう。

下手に恐怖を甦らせるのは賢明とは思えなかった。

「よかった。じゃあ、お茶いま持ってくるから少し休んでもどろっか」

「はい。・・・戻る？　そう言えばここってどこですか？」

アンナの家だよ。って冗談言おうとも思ったがきつと怪訝な顔されてしまうだろうから

「ここは魔界。人間のいる世界とは違う世界だよ。」

そしてここが俺の故郷・・・さっきいたアンナは俺がこっちにいた時に

お世話になっていた人だよ」

「お世話・・・恋人さんですか？」

どんなお世話だよ！　お世話で恋人って・・・（え？　考えすぎ？）

「いや、メイドだよ」

「メイド！　すごい・・・映画みたいですわねえ」

「あ・・・いや・・・ほら・・・昔だし・・・日本じゃないし」

「でもすごいですね・・・メイドさんかあ・・・」

しきりに感心しているが一体何に感心しているのだろうか？

緊迫感にかける気がするが元氣ならばいいか、と京介に笑顔が戻った。

「何でしたらメイド服着ます？」

そういつて現れたアンナはいつの間にかさっき着ていたアイルランドの

民族衣装にも少し似たアンナの故郷独特のワンピースから、明治時代に着ていたクラシカルなメイド服に着替えていた。

「アンナ・・・変な遊び教えないように・・・」

彼女はコスプレマニアだった・・・

ま、だから仕立屋なんて職業に就いているのだろうけれどね。

「変とは失礼な。何を深読みなさっているのやら・・・」

コレだから殿方は・・・」

くすくすと含み笑いをするアンナを美樹は不思議そうに眺め

「深読み？」

「あ、あまり気にしないで。竹来さんは」

いかんっこのままここに居るのは危険かもしれない。

着せ替え大好きなアンナが美樹をモデルに色々着せて遊びそうだ・

・

早々に立ち去らなくては・・・

「あ、この家は結界張って空気を浄化してあるけれどこっちの空気は身体に悪いから・・・ね。

そろそろかえろっか。

人間界は大変な事になっているかもしれないし」

美樹が誘拐されたのは昨日・・・火曜日以前だろう。

メールを見たのが今日・・・水曜日、そして日本では今はおそらく・
・

水曜の夕方くらいだろうか？

ってことは彼女は昨夜、無断外泊を・・・

（一島桜は何かしたけれどこっちはどうしよう？

純情女子大生が無断外泊・・・はあ・・・

勘当されないといいんだけど・・・

大人数を催眠かあ・・・）

美樹をちらりと見て京介は「はあ」とまたため息をした。

「あのね・・・竹来さん。

非常に言いにくい話なんだけれど・・・

竹来さんが誘拐された曜日って何曜日か覚えている？」

「え・・・と、京子とお出かけしている最中だったので・

火曜日です」

あちゃー・・・

「今日は水曜日なんだよ・・・竹来さん、

ご家族心配して通報とかしてないかな？」

勘当と通報、どっちも避けたいなあ・・・

実家暮らしってこういうった点は大変だよなあ

「水曜ですか・・・家族は心配してないと思いますけれど
京子が・・・友達が心配しているかもしれません」

「え？なんで友達？」

「友達の両親が旅行で不在なのでお泊まりする予定だったんです
・・・ほっ。

よかったー。

それならば取り敢えず大丈夫？それとも友達も心配して連絡してる
かも？

「取り敢えず・・・ここからじゃ携帯の電波届かないし・・・
日本に帰ろうか？」

「あら・・・ゆっくりなさっていけばよろしいのに」

「そうもいかないよ、アンナ。

人様の大事な娘さんですからね」

こっちに居る間は人間界での時間進行はほとんどないとは言っても
気持ちにはやるものだ。

「じゃあ、京介様もお着替えなさりますか？

現代の日本でタキシードは浮きますわよ？」

流石面倒見が良いアンナは気が利いた。

「ありがとうございます、俺の服ってある？」

「ありますわよ。もちろん。

主君のお召し物を仕立てるのも私の仕事のうちでしたからね。

どうぞあちらの部屋でお好きなのを選んでくださいまし」

「じゃあ竹来さん。ちょっと待っていて」

「はい。紅茶頂いてます」

アンナが淹れてくれたお茶を手にながらほほえんだ。

（大丈夫そうかな）

「京介様。まだ名字にさん付けで呼んでらっしゃるのですね」

奥の部屋に行くなりアンナはあきれ顔で言った。

「まあね、まだまだオトモダチですから」

「まだ、ってことは今後は頑張るのですね。

応援いたしますよ・・・そうそう、服の下にも全く傷はなかったですわ。

精神状態も安定しておりますしおそらく心配はないと思いますわ」「良かったよ・・・ホント」

目の付け根を指で揉みながら疲れを感じた。

あとはしばらく大人しく生活して魔力が回復するのを待たなきゃ

「・・・京介様。アンナは美樹様よりも京介様が心配ですわ。

相変わらず血を吸っていないんですね・・・」

「・・・まあね・・・」

「京介様、私が口出しするのは差し出がましいでしょうけれど・・・もっとお体をご自愛なさってくださいまし・・・」

京介様にもしものことがありましたら・・・

吸血鬼一族全体に影響を及ぼしますのよ・・・

一人だけのお身体ではないのですから無理だけはなさらないでください」

アンナが苦言を呈するのも無理はない。

今の状態で吸血行為をしないのは自殺行為に近かった。

「ごめん・・・でも俺はやっぱり・・・まだ・・・」

「美樹様はどうなんですか？」

「確かに気になるけれどまだ・・・ね」

差し出された薄い黄色布のシャツに袖を通してながら昔を振り返った。

誰彼かまわずと吸血行為を繰り返していた過去。

そしてそんな行為の無意味さを教えてくれた一人の女性。

端から見たらありがちな話もその当人にとっては「ありがち」ではなく

人生に深く関わる出来事となった。

一国の姫である血筋にも関わらず遊女として生きて行かなくてはならない身上であつても、尚、曲がることなく真っ直ぐだった彼女の黒曜石の瞳が今でも京介の胸を締め付けた。

「・・・言い過ぎましたわ。申し訳ありません。」

でももしも京介様が倒れるようなことありましたら、

アンナが無理矢理襲ってでも血吸わせますわよ」

「はは・・・男女逆だよ、何だかそれ」

「そうですか？・・・まあそういうことですから気を付けてくださいね」

二人が美樹のもとに戻った時には彼女はすやすやと寝息を立てていた。

「ふふ・・・お疲れみたいですわね」

「そりゃあねえ・・・こっちに居れば時間は進行しないけれど彼女の身体にとってはちゃんと時間流れているしね」

「じゃあ京介様。適度に頑張ってくださいまし」

穏やかな笑みは昔のままだ。

栗色の瞳が母のような優しさをたたえていた。

「ありがとうございます、アンナ。」

また近いウチにくるから」

アンナの家の扉を人間界と繋いだ。

術を使うのを穏やかじゃない心境で見つめるアンナの視線に気付いたが

彼女は敢えて何も言わなかった。

「じゃあ」

アンナ宅に来たときと同じように美樹を抱きかかえ

魔界と人間界のゲートをくぐるとエレベータで下降する時に似た重力を感じた。

29. アンナ（後書き）

次で最後です！！

エピソード：美樹と京介（前書き）

やっと終わります。
戻ってきました。

エピローグ…美樹と京介

ここならばいいかな？

そう選んでつないだ場所は奇しくも美樹をキメラへと「手術」した場所だった。

抱きかかえたまままで起こすのは誤解されるかな？

そう考え京介は夜気の中、そっとお姫様を柔らかな芝生の上に横たえた。

もう一度彼女を観察した。

本人が言うとおりでどこにも外傷はなさそうだった。

「細かいけど起伏が全くナイってわけじゃありませんよ。

綺麗な身体ですわ」

なんて余計なこれまた情報までくれた……。

「無理矢理起こすのも可哀想だよなあ」

幸せそうな寝顔を見ると、もう季節柄さほど寒くもないし

このまま寝かせておいてもいいかなって気になり、

そのまま上体だけ起こし自分にもたれかけさせた。

（だって芝生とはいえ地面に寝かせるのはナンでしょ？）

静かだなあ……。

平日とは言え昼間でも寂しい場所なので夕方は人通りも全くなく大学敷地内であることを忘れそうだった。

そよそよと風が美樹の柔らかい髪をたなびかせシャンプーの香りを運んできた。

（ナンか俺、竹来さんの寝顔見る機会がやたら多いなあ……）

付き合っているワケでもない女性の無防備な状態を多く見るのもなんか変な感じだなあと肩にかかる美樹の重みと暖かさを感じた。

美樹さんがこの後しなちゃいけない事は……

友達に電話して状況を把握して……適度な時間に帰って……
まあ大丈夫か。

警察沙汰にさえなっていなければ俺が記憶操作してなんとかするかあ・

「連れて逃げちゃうかな」

それもロマンティック？ いやいや。

彼女の同意がなければ犯罪だって。

そんなあほな考えをたしなめるかのように聞き慣れない携帯の着メロがなり始めた。

「あ・・・」

寝ぼけながらも携帯に反応できるのは流石としか言えなかった。

「おはよう、竹来さん。」

携帯でなくて大丈夫？」

「おはよう・・・ございます・・・メールなので大丈夫です・・・」

「そっか、よかった」

「ありがとうございます」

そう言い終わらないうちに

「あっ・・・すみませんっ私・・・いつの間に・・・」

はっと頭を上げ、肩で寝ていた事に気付く顔を赤らめた。

「いいんだよ。疲れてたんだね。」

お疲れさま・・・そしてごめんね、色々巻き込んだじゃって

もう人間界だよ・・・ここは学校」

この場所が始まりだったし・・・。

「ありがとうございます・・・。いえ・・・すみません。私の不注意で・

・

そしてありがとうございました」

瑞々しい笑顔をみると助けてよかったと心から思えた。

「いいのいいの。無事に帰ってこれてよかった・・・

向こうはどうだった？」

「なんか魔界ってこっちと空気が違いますね・・・うまく言えませんが」

「そうだね、ちゃんと結界張ってない場所を不用意に歩くと

人間の身体には毒だから気を付けないとね」

「それってキメラになっても変わらないんですか？」

「どうだろう・・・？さっきは立派にセイレーン化していたしねえ

「んー・・・どうだろ？試すのは結構リスク大きいからやめようね」

「はあい」

素直な生徒のような返事をした美樹にセイレーン化して

京介を押し倒した（抱き倒した？）事は黙っておこうかなと思った。
ちよつと惜しい気もしたけれどね。

「ごめんね。今回は・・・」

今度からちゃんと守るから」

「いいえ。とんでもないです。

ありがとうございます

でも・・・怖いのは・・・ここでも違う世界でも・・・

私がもしも自分を見失って無差別に人を傷付けそうになったら・・・

」

「大丈夫だよ。

そんなことはきつとないよ。

もしも・・・」

京介は真っ直ぐに美樹に向き合う。

風が美樹の長い髪を乱す。

「もしも？」

髪を手で押さえながら澄んだ瞳を京介に向け聞き返す。

「その時は俺が責任もって殺してあげるよ」

アカシアの香りを風がどこからともなく運んできた。

「大丈夫。

責任持って竹来さんには人を傷つけさせないから」

殺してあげるよ。

優しい声だがそこに強い意志も感じられた。

決してロマンティックとは言えない台詞だが、

何故か美樹にはその言葉がまるでプロポーズのようにも聞こえ

少し赤面してしまう。

「はい、その時はお願いします」

何か変な答えね、そう思いながらも笑顔を京介に向けた。

エピソード：美樹と京介（後書き）

長々とお付き合いありがとうございました！

このお話は時系列的には

Egoistic Realityの数ヵ月後でMemory of the Treeの前です。Memory・・・には美樹らしきコを少しでも登場させています。

もしもお時間あったらそちらも是非読んで下さい！
本当にありがとうございました。

感想いただけるとすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1446b/>

CREATURE

2010年10月23日12時55分発行